

青森県埋蔵文化財調査報告書 第296集

上野平(3)遺跡

—東北縦貫自動車道八戸線(八戸～八戸)建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2001年2月

青森県教育委員会

上野平(3)遺跡

—東北縦貫自動車道八戸線(八戸～八戸)建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2001年2月

青森県教育委員会

序

東北縦貫自動車道八戸線（八戸～八戸）の工事路線には縄文～平安時代、中近世など多くの遺跡があり、平成9年度から順次発掘調査が行われてきました。八戸市上野平(3)遺跡もそのひとつで、平成10・11年度に調査されました。本書はその結果をまとめたものです。

この調査によって、縄文時代では落とし穴や大型の土坑、奈良・平安時代では竪穴住居跡と土坑といった多時期にわたる遺構とこれに伴う遺物が発見されました。このことから、上野平(3)遺跡は縄文時代から平安時代、近世に至るまでの長い間にわたって、様々なかたちで人々が生活してきた場であったことがわかりました。

この成果が、今後の八戸市や馬淵川流域の歴史解明や埋蔵文化財の保護と活用にと役立つところがあれば幸いに存じます。

本書を刊行するにあたり、日本道路公団東北支社、八戸市教育委員会並びに御指導・御協力を賜った関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成13年2月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 中島邦夫

例 言

- 1 本報告書は、平成10・11年度の2カ年にわたって発掘調査された東北縦貫自動車道八戸線（八戸～八戸）建設事業に伴う、八戸市上野平（3）遺跡の成果を収録したものである。
- 2 本遺跡は八戸市大字上野字昼場、上野平、外に所在し、北緯40°28′45″・東経141°25′13″に位置する。青森県遺跡台帳番号は03264番である。
- 3 本報告書の作成は、小田川哲彦・平山明寿が担当し、これらに関わる遺構と遺物等の実測図作成は調査補助員及び室内作業員が行った。執筆者の氏名は文末に記してある。
- 4 鑑定および自然科学分析等については、下記の方に依頼した。（順不同、敬称略）

石器の石質鑑定	松山 力	（八戸市文化財審議員）
炭素年代測定	木越 邦彦	（学習院大学）
胎土分析	三辻 利一	（奈良教育大学）
- 5 出土遺物の写真撮影は、シルバーフォトおよびフォトスタジオらわずに委託した。
- 6 調査区内基準点測量は、株式会社コサカ技研に委託した。
- 7 遺跡位置図は、国土地理院発行2万5千分の1地形図を使用した。
- 8 本報告書における用例は次のとおりである。
 - 1）挿図中の方位は真北を示す。複数の遺構が図示しきれ真北が異なる場合、各方向を示した。
 - 2）挿図の縮尺は、位置図・配置図・各遺構・遺物の大きさにより適宜し、縮尺率は図中に示した。
 - 3）竪穴住居跡の床面積はプランメーターで計測し、3回の平均値を用いた。
 - 4）竪穴住居跡柱穴は、挿図中にP-番号と表記し床面からの深さを（ ）内に表示した。
 - 5）遺物観察表の計測値で（ ）は推定値、< >は残存値を示したものである。
 - 6）遺物写真は縮尺不同であり、挿図番号と遺物番号で表示した（図10-3 = 10-3）
 - 7）スクリーントーンは以下のものを使用した。



焼 土



土師器内面黒色処理

- 9 引用文献については巻末に収めた。
- 10 本調査に関わる諸記録、遺物等の資料は、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 11 発掘調査及び本報告書の作成にあたり、次の方々から御指導・助言を頂いた。銘記して感謝申し上げます。（順不同・敬称略）。

宇部 則保、大野 亨、佐々木浩一、瀬川 滋、長尾 正義、田中 寿明、古屋敷則雄

目次

序

例言

目次

挿図目次・写真図版目次

第1章 調査概要	1
第1節 調査要項	1
第2節 調査に至るまでの経緯・調査経過	2
第3節 調査方法	5
第2章 遺跡の立地・基本層序	8
第1節 遺跡の立地	8
第2節 基本層序	9
第3章 検出遺構と出土遺物	11
第1節 竪穴住居跡	11
第2節 土坑	33
第3節 溝状土坑	47
第4節 土器埋設遺構	55
第5節 円形周溝・溝跡	55
第6節 道跡	57
第4章 遺構外出土遺物	58
第1節 土器	58
第2節 石器	61
第5章 まとめ	64
第1節 古代の土器について	64
第2節 検出遺構について	68
第6章 自然科学的分析の成果	71
第1節 放射性炭素年代測定結果報告	71
第2節 出土土器の蛍光X線分析	72
出土遺物観察表	74
引用・参考文献	77
報告書抄録	78
写真図版	

挿 図 目 次

図1 事業関連遺跡位置	3	図21 第9号竪穴住居跡(2)	29
図2 路線及び地形	4	図22 第10号竪穴住居跡(1)	30
図3 平成10年度調査トレンチ配置	6	図23 第10号竪穴住居跡(2)	31
図4 周辺の地質	8	図24 土 坑(1)	35
図5 基本層序	9	図25 土 坑(2)	36
図6 I区遺構配置	10	図26 土 坑(3)	41
図7 II区遺構配置	11	図27 土 坑(4)	44
図8 第1号竪穴住居跡	12	図28 土 坑(5)・出土遺物	45
図9 第2号竪穴住居跡	14	図29 溝状土坑(1)	48
図10 第3号竪穴住居跡	15	図30 溝状土坑(2)	50
図11 第4号竪穴住居跡(1)	17	図31 溝状土坑(3)・出土遺物	52
図12 第4号竪穴住居跡(2)	18	図32 土器埋設遺構	55
図13 第5号竪穴住居跡(1)	19	図33 円形周溝、溝跡・出土遺物	56
図14 第5号竪穴住居跡(2)	20	図34 道跡・出土遺物	57
図15 第6号竪穴住居跡(1)	21	図35 遺構外出土縄文土器(1)	59
図16 第6号竪穴住居跡(2)	22	図36 遺構外出土縄文土器(2)・弥生土器	60
図17 第7号竪穴住居跡(1)	24	図37 遺構外出土石器	62
図18 第7号竪穴住居跡(2)	25	図38 出土土師器集成(1)	65
図19 第8号竪穴住居跡	27	図39 出土土師器集成(2)	66
図20 第9号竪穴住居跡(1)	28	図40 竪穴住居跡変遷	69

写 真 目 次

写真1 作業状況・層序	80	写真11 土坑(1)	90
写真2 調査I区全景・検出遺構	81	写真12 土坑(2)	91
写真3 第1号竪穴住居跡	82	写真13 土坑(3)	92
写真4 第3号竪穴住居跡	83	写真14 溝状土坑	93
写真5 第4号竪穴住居跡	84	写真15 円形周溝・道跡・土器埋設遺構	94
写真6 第5号竪穴住居跡	85	写真16 竪穴住居跡出土遺物(1)	95
写真7 第6号竪穴住居跡	86	写真17 竪穴住居跡出土遺物(2)	
写真8 第7・8号竪穴住居跡	87	その他遺構出土遺物	96
写真9 第9号竪穴住居跡	88	写真18 遺構外出土、土器・石器	97
写真10 第10号竪穴住居跡	89		

第1章 調査概要

第1節 調査要項

1 調査目的

東北縦貫自動車道（八戸～八戸）建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する上野平(3)遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存して、当該地区の文化財の活用に資する。

2 発掘調査期間 平成10年9月1日から同年10月30日まで
平成11年8月3日から同年10月29日まで

3 遺跡名および所在地 上野平(3)遺跡（県遺跡番号03264）
八戸市大字上野字昼場43、外

4 調査対象面積 平成10年度 1,500平方メートル
平成11年度 8,000平方メートル

5 調査委託者 日本道路公団東北支社八戸工事事務所

6 調査受託者 青森県教育委員会

7 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査協力機関 八戸市教育委員会

9 調査体制

調査指導員	村越 潔	青森大学教授（平成11年度）	（考古学）
	市川 金丸	青森県考古学会会長（平成10年度）	（考古学）
調査協力員	巻 長伍	元八戸市教育委員会教育長（平成10年度）	
	森林 康	現八戸市教育委員会教育長（平成11年度）	
調査員	七嶋 修	元県立八戸北高等学校教諭	（地質学）
	工藤竹久	八戸市教育委員会主幹（平成11年度）	（考古学）
	小林和彦	八戸市縄文学習館主任主査兼学芸員（平成10年度）	（考古学）
調査担当者	青森県埋蔵文化財調査センター		
平成10年度	所 長	中島 邦夫	
	次 長	成田 誠治	
	総務課長	成田 孝夫（現、県工業振興課課長補佐）	

	調査第二課長	福田 友之
	文化財保護主事	新山 隆男 (現、平内町立山口小学校教諭)
	文化財保護主事	平山 明寿
	調査補助員	佐々木一人・永洞佐哉子・秋田知子
平成11年度	所 長	中島 邦夫
	次 長	成田 誠治
	総務課長	成田 孝夫 (現、県工業振興課課長補佐)
	調査第二課長	福田 友之
	文化財保護主査	小田川哲彦
	文化財保護主事	平山 明寿
	調査補助員	佐々木一人・秋田知子・浜田 泉 岩間陽子・細川志穂子

第2節 調査に至るまでの経緯・調査経過

調査に至るまでの経緯

東北縦貫自動車道八戸線は、一般国道45号(八戸久慈自動車道)に連結する八戸ジャンクションを起点とし、馬淵川とJR東北本線を跨ぎ北進し、八戸ハイテクパーク付近の八戸北インターチェンジで再び一般国道45号に連結する、区間約14.8kmの高速道路である。

八戸線は、東北縦貫自動車道の延伸で、市内の交通緩和および八戸駅西側への計画的な市街地形成のほか、既に使用している「百石道路」および「第二みちのく有料道路」に接続することにより、青森県北部に対する高速交通のサービス拡大等、県内の高速交通大系を形成するうえで重要な区間となることから計画され、平成14年に全線供用を目指し建設が進められている。

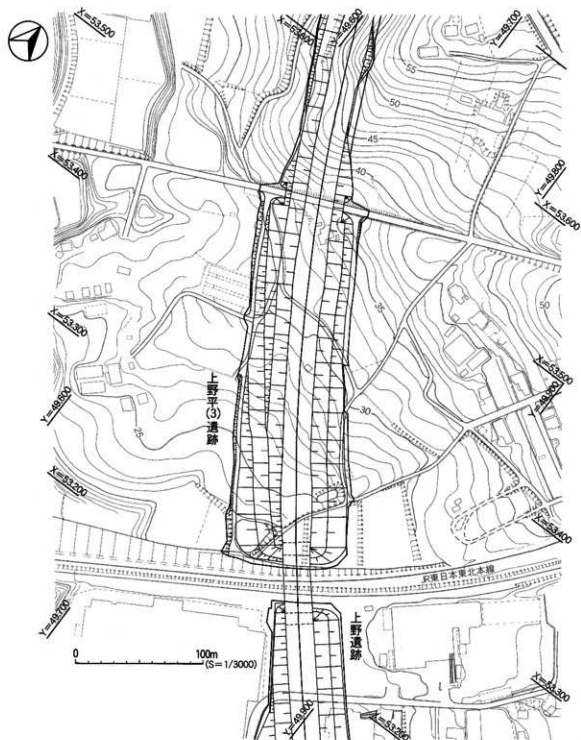
この工事路線内には11遺跡が所在し、最終路線決定に伴い日本道路公団東北支社八戸工事事務所より発掘調査の委託がされた。この路線内の埋蔵文化財の保護を図るため、日本道路公団東北支社八戸工事事務所・青森県土木部高規格道路対策室・八戸市道路建設課・青森県教育委員会・八戸市教育委員会が協議を重ね、平成7年から青森県教育委員会文化課により路線内遺跡の踏査および試掘調査が行われ、これらの結果から、工事計画にそって発掘調査を行うことを受託した。

青森県教育委員会文化課は、関係機と協議の上、11遺跡のうち昼場遺跡・人首沢遺跡・大仏遺跡・根岸山添遺跡・毛合清水(3)遺跡の5遺跡の発掘調査を八戸市教育委員会に要請し、櫛引遺跡・上野遺跡・上野平(3)遺跡・岩ノ沢平遺跡・笹ノ沢(2)遺跡・笹ノ沢(3)遺跡の6遺跡の発掘調査を青森県埋蔵文化財調査センターに要請し、当センターは緊急性の高い遺跡順に、平成9年度から調査に着手することとなった。

上野平(3)遺跡は、平成7年の踏査で確認され、翌年に行われた隣接する上野遺跡の試掘調査から関連する遺跡として、平成10年に登録された。当初、平成11年度の調査予定であったが、10年度他遺跡の調査の進捗状況により、1年度繰り上げて試掘先行の調査を開始した。(小田川)



図1 事業関連遺跡位置



番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	時代・時期	種別	備考
1	上野平(3)遺跡	03264	上野平草場, 上野平	縄文早期・奈良・平安	散布地・集落跡	平成11年度発掘調査(池七ンター) 本報告書
2	柳引遺跡	03150	柳引字額, 額神, 上野, 下矢倉, 丹	縄文早期・奈良・平安	散布地・集落跡	平成9・10年度発掘調査(池七) 平成10年度『柳引遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書263頁
3	谷塚遺跡	03050	柳引字上野戸	縄文早期・奈良	散布地・集落跡	平成9年度発掘調査(八戸市教育) 平成10年度『稲巻遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第78頁
4	上野遺跡	03216	上野字上野戸	縄文期・平安・中世・近世	散布地・集落跡	平成11年度発掘調査(池七) 平成12年度『上野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書297頁
5	人形沢遺跡	03267	柳引字人形沢	縄文早期・平安	散布地・集落跡	平成10年度発掘調査(八戸市教育) 平成11年度『人形沢遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第84頁
6	沼ノ沢遺跡	03053	柳引字岩沢平, 仙平, 種島, ミタラセ	縄文早期・奈良・平安	散布地・集落跡	平成10・11年度発掘調査(池七) 平成12年度『沼ノ沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書287頁
7	大仏遺跡	03054	茨内町字大仏	縄文・平安・中世・近世	散布地・集落跡	平成11年度発掘調査(八戸市教育) 平成11年度『大仏遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第84頁
8	沼ノ山遺跡	03203	茨内町字程野山, 辰沢, 蟹ノ沢	縄文期・平安	散布地	平成10年度発掘調査(八戸市教育) 平成11年度『沼ノ山遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書78頁
9	毛合橋本(1)遺跡	03122	茨内町字毛合橋本, 北橋ノ沢	縄文期・平安	散布地	平成10年度発掘調査(八戸市教育) 平成11年度『毛合橋本(1)遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第84頁
10	毛ノ沢(2)遺跡	03041	茨内町字毛ノ沢, 下毛清水, 杉子沢	縄文期・平安	散布地	平成11年度発掘調査(池七) 平成12年度『毛ノ沢(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書305頁
11	熊ノ沢(2)遺跡	03042	茨内町字下毛清水	縄文早期	散布地・集落跡	平成11年度発掘調査(池七) 平成12年度『熊ノ沢(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書305頁

図1 ●—本事業調査遺跡
表中の遺跡は、平成10年度青森県遺跡地図から抜粋および加筆した。

図2 路線及び地形

調査経過

平成10年度は、当センターでは掘引遺跡（2次）・岩ノ沢平遺跡の調査が行われたが、掘引遺跡の2次調査が早く終了したため、当センター・委託者・関係機関により協議し、上野平(3)遺跡を繰り上げて調査することとした。

この調査の目的は、路線内での本発掘対象区域の確定と、次年度調査時のプレハブ・駐車場・排土用地、および重機進入路の確保である。JR東日本東北本線と市道一日市高岩線に挟まれた、路線内約30,000㎡を対象に、幅4m、最長60mのトレンチを20本設定して遺構確認調査を行った。トレンチは必要に応じて拡張したが、検出した遺構については極力確認のみに留めた。この結果、図3に示したが、路線のほぼ中央部の1号～9号トレンチからは遺物の出土がほとんどなく、遺構も4号トレンチから土坑が1基検出されただけである。また、路線南端部の14・15号トレンチ周辺は、廃材が混じる2m以上の厚さの盛り土で、旧地表面下も湧水が激しく、出土遺物も確認されなかった。このため、4号トレンチ検出の土坑を精査し、19・20号トレンチ南側から5～9号トレンチ南端までの範囲と14・15号トレンチ周辺および溜池を本発掘調査から除外することとした。トレンチによる調査面積は約1,500㎡で、遺構と遺物の検出状況から、路線南側10～13号トレンチ周辺と16・17号トレンチ周辺のおよそ8,000㎡が翌年の発掘調査対象となった。

平成11年度は、予定どおり8月3日に調査を開始した。雑草木の除去調査区域の確認を行い、掘り下げ等の本格的作業に入ったのは、中旬の盆休み明けからである。掘り下げは、調査期間と面積を考慮し、また、前年度の調査状況を踏まえながら重機を用いて行った。9月初旬には表土の除去は終了し、中旬には遺構検出および精査作業が主体となった。遺構の集中する範囲は前年度の調査で把握できたため、その周辺の掘り下げは人力作業とし、その範囲以外のI区北西側低地部は遺構確認のため重機を用い掘り下げたが、予想したとおり湧水がひどく作業は遅延ぎみであった。この湧水は、I区南東側の溜池周辺でも顕著で、精査時に遺構中位まで水没するものが多数あり、土層確認など支障をきたした。10月に入り遺構精査主体の作業となり、前年度に中世の堀跡と思われたII区の遺構は、近世の道路跡であることが判明したほか、竪穴住居跡には奈良時代と平安時代のものがあることが判明した。下旬にはSK11やSK29の2基の大型土坑の精査を残すだけとなり調査は順調に進んだ。調査終了前日の10月28日には、八戸地域を集中豪雨が襲い、撤収準備に苦労したほか翌日の作業も懸念されたが無事10月29日に全調査を終了することができた。

平成11年度は本調査8,000㎡の発掘調査を実施し、調査区である沢地に面した微高地は、縄文時代早～後～晩期、弥生時代には狩猟地として、奈良・平安時代には集落として利用されていたことが判明した。
(小田川・平山)

第3節 調査方法

平成10年度の調査により、発掘地域が路線の北と南側に分かれたため、調査区を遺構と遺物が多く確認された南側をI区、北側をII区とした。

調査はグリッド法を基本とした。グリッドは国家座標X系にあわせて打設することとし、業者委託で調査区内に基準点を8点打設した。さらにこの中の公共座標値 $X=52.280$ ・ $Y=49.750$ （グリッドE・F-12-13中心杭）と $X=53.320$ ・ $Y=49.750$ （グリッドE・F-22・23中心杭）の2点を基準

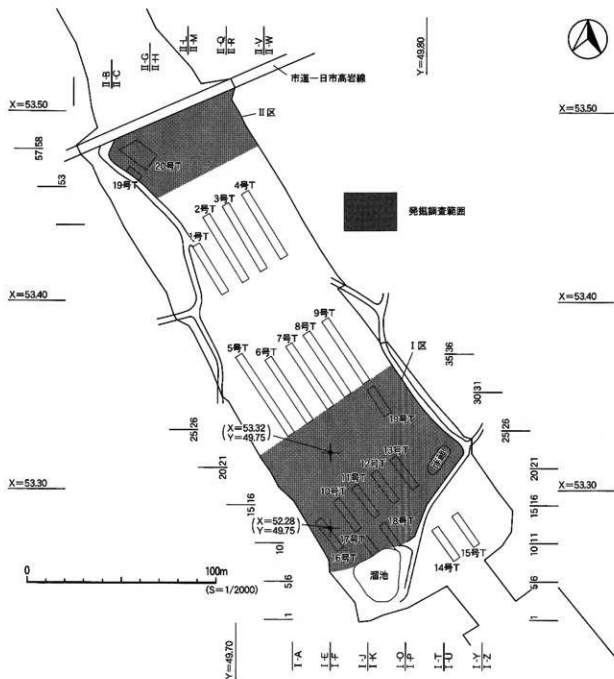


図3 平成10年度調査トレンチ配置

とし、1辺20mの正方形を大区画とした基準点を設け、さらにその基準点を基に、4×4mの小グリッドを設定しグリッドピンを打設した。グリッドの呼称は、Ⅰ区とⅡ区を分けたいうえ、東西方向にアルファベット、南北方向に算用数字を付し両者を組み合わせたものにした。なお、平成10年度調査のトレンチ設定は工事用基準杭を用いた。

標高値は、工事に設置された二級水準点から大区画とした基準点へ移動し、各遺構精査の必要に応じてさらに移動して用いた。

粗掘り作業のうち、表土撤去は重機を用いたが、表土が薄い箇所については人力で掘り下げた。検出作業は基本的に、第Ⅱ層面と第Ⅳおよび第Ⅴ層面で行ったが、第Ⅱ層で検出した遺構についてもそのプランを明確にするため、さらに掘り下げて検出・精査したものもある。

遺構名については、調査時に遺構ごとの略号と検出・精査順に番号を付した。10年度は調査の必要があった土坑（SK）と溝状土坑（SV）にそれぞれ番号を付けて精査し、11年度に検出された遺構には順次番号を付していった。他の遺構略号は竪穴住居跡（SI）、円形周溝を含む溝跡（SD）とした。

遺構精査に当たっては四分法と二分法を基本としたが、規模と形状に応じた分割法を用いた。

土層観察は、『新版標準土色帖』を用い、土色とマンセル記号を併記し、特徴を注記した。層順については、遺構の堆積土には算用数字を用い、調査区全体の土層についてはローマ数字を用いた。実測図の作成は、遺構図は1/20を基本としたが、規模や遺物出土状態などの違いに応じて任意の縮尺で作成した。遺物の取り上げは、遺構およびグリッドごとに層単位で行った。

写真撮影は、35mmカメラを用い、モノクロームネガフィルム（フジPRESTO）とカラーリバーサルフィルム（フジPROVIA）で撮影したほか、特徴的なものに関してはカラーネガフィルム・ボラロイドカメラも用いた。

（小田川・平山）

第2章 遺跡の立地・基本層序

第1節 遺跡の立地

本遺跡はJR東日本東北本線八戸駅から南西へ約3.4km、同東北本線北高岩駅から北東へ約1km離れた、馬淵川左岸の標高約21～32mに位置する。

地質的には、馬淵川狭窄部の左岸で、五戸台地の中位面最下層である低位段丘の根城面にあたる。五戸台地は第三紀更新世末期に形成された砂礫層を基盤とする段丘で、上位に第四紀洪積世に降下堆積した、高館・八戸火山灰層を被覆している。本遺跡の基底は八戸火山灰層で、遺構のなかには高館火山灰層まで掘り込まれているものもある。

遺跡の現地形は、南側に流れる馬淵川に向かう緩傾斜地で、調査区の西側から南側にかけては狭小な沢地になっている。北側と東側は、遺跡を囲むように段丘上位高館面につづく傾斜地となっている。本遺跡の南は東北本線を介して上野遺跡に接している。

調査前の現状は蔬菜等の耕作地として利用され、一部には地山面までおよぶ耕作痕が認められた。

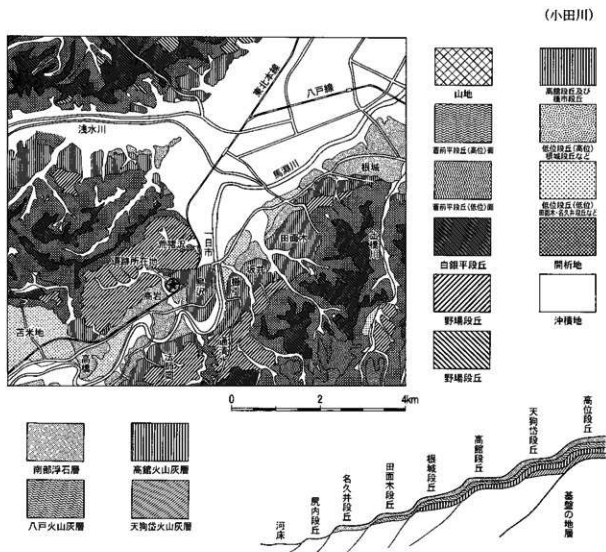


図4 周辺の地質

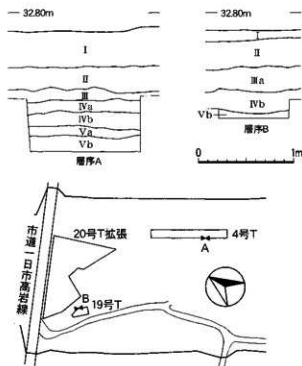


図5 基本層序

基本層序

- 第Ⅰ層 黒褐色土 (10YR2/2~2/3)
層厚20~60cm。耕作土が主の表土層。
十和田b火山灰 (灰白色浮石粒) 混入。
中振浮石 (黄褐色浮石粒) 混入。
- 第Ⅱ層 黒色土 (10YR2/1~2/2)
層厚20~60cm。古代の遺構、掘り込み層。
十和田b火山灰 (灰白色浮石粒) 混入。中振浮石 (黄褐色浮石粒) 混入。
- 第Ⅲ層 黒褐色土 (10YR2/2~2/3)
層厚20~40cm。中振浮石混入の砂質土。
Ⅲa層 (中振浮石均等に混入)。
Ⅲb層 (中振浮石ブロック、層状)。
- 第Ⅳ層 黒褐色土 (10YR2/2~3/2)
層厚20~40cm。南部浮石混入。
Ⅳa層 (南部浮石少量混入)。
Ⅳb層 (南部浮石多量均一混入)。
- 第Ⅴ層 暗褐色土 (10YR3/3)
層厚40~80cm。
Ⅴa層 (南部浮石が混入) 八戸火山灰遺構層。
Ⅴb層 (遺構検出最底面) 八戸火山灰遺構層。

第Ⅴ層以下の層は上野遺跡と同じであり、八戸火山灰の各層序に対応する。

第2節 基本層序

調査区内の基本層序は、隣接する上野遺跡と特別に変わることはない。

第Ⅰ層 黒褐色土 (10YR2/2~2/3) 層厚は20~60cm。耕作土を主とする表土層である。十和田b火山灰と思われる灰白色浮石 (岩粒) と黄褐色の中振浮石粒が混入する。粘性・しまりはなく、軟らかい。Ⅰ区東側と南端付近は層厚がなく、路線中央部に向かい厚さを増す。またⅡ区は、旧宅地範囲であったためか、堅く土色・土質がやや異なる。

第Ⅱ層 黒色土 (10YR2/1~2/2) 層厚は20~60cm。十和田b火山灰と思われる灰白色浮石の混入が顕著であり、中振浮石粒も少なからずみられる。粘性・しまりはないが、第Ⅰ層より湿性に富んでいる。古代の遺構の掘り込み層と思われる。

第Ⅲ層 黒褐色土 (10YR2/2~2/3) 層厚20~40cm。中振浮石粒が多量に混入する砂質土である。粘性はないが、しまりはある。調査区から除外した、路線中央部からⅡ区付近までとⅠ区西側の沢部分では、層中下位に中振浮石だけが層状またはブロック状に堆積する。前者の第Ⅲa層と後者の第Ⅲb層に細分される。Ⅰ区の遺構確認では、最終堆積土として検出の目安となった。

第Ⅳ層 黒褐色土 (10YR2/2~3/2) 層厚20~40cm。南部浮石を混入する。粘性およびしまりがあり、Ⅰ区西側の沢部分ではグライ化している。南部浮石の混入の割合から、第Ⅳa層と第Ⅳb層に分けられる。第Ⅳa層は黒色が強く、南部浮石の混入は少ない。第Ⅳb層は褐色が強く、南部浮石の混入量も多い。層厚はほぼ同じであるが、Ⅰ区南側には薄くなる。落とし穴と考えられる土坑は、本層で被覆されているものがほとんどである。

第Ⅴ層 暗褐色土 (10YR3/3) 層厚40~80cm。黒褐色土 (10YR3/2) に南部浮石が混入する第Ⅴa層とほとんどみられない第Ⅴb層に分けられる。湿性および粘性・しまりがある。第Ⅴb層が遺構検出の最底面である。

第Ⅴ層以下の土層は上野遺跡と同じであり、八戸火山灰の各層序に対応する。竪穴住居跡や土坑など、大半の遺構の底面および周壁は、八戸火山灰層中にとどまっている。

(小田川)

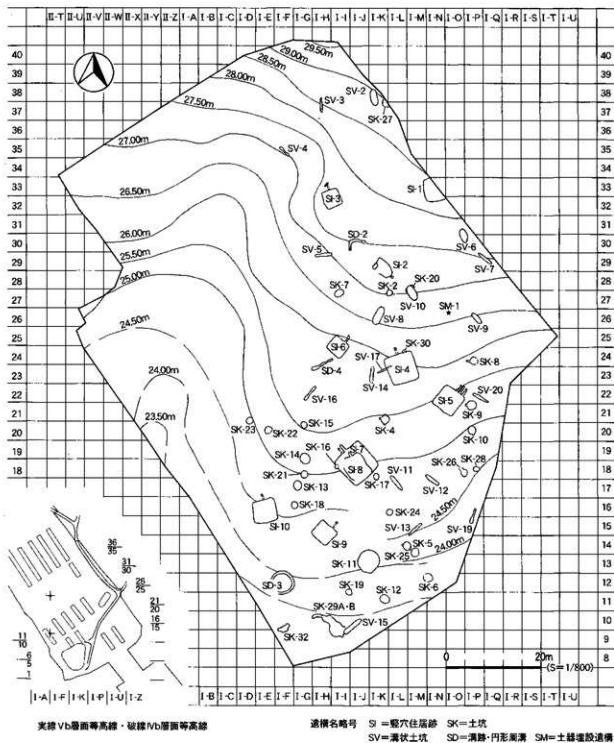


図6 I区遺構配置

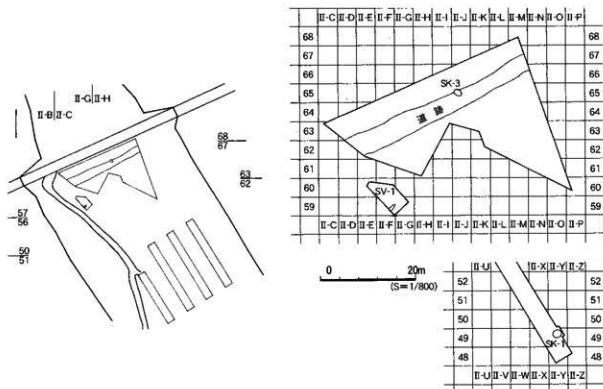


図7 II区遺構配置

第3章 検出遺構と出土遺物

概要

検出遺構は、竪穴住居跡10軒、土坑31基、溝状土坑19基、土器埋設遺構1基、円形周溝・溝跡3条、道跡1条であり、これらのほとんどはI区で検出されている。I区は北から南に下る緩傾斜地で、西側は調査区南端の沼地へ向かう埋没沢である。東側は標高23m～27mの微高地であり、各遺構はこの微高地部分に集中して検出された。各遺構の堆積土の状態から構築面は、第II層（古代～縄文時代晩期）、第III～第IV層（縄文時代中・後期～早期中・後葉）、第IVb層（縄文時代早期中葉以前）の三つの画期があったものと思われる。以下に、各遺構ごとに記述する。（小田川）

第1節 竪穴住居跡

総数10軒を検出した。すべて古代のもので奈良時代が4軒、平安時代が6軒ある。重複するものは、第7号（平安）と第8号（奈良）の2軒ある。奈良時代の竪穴住居跡は、ほぼ同規模で16・17mの間隔で北側と南側に分かれてつくられている。平安時代の竪穴住居跡は、大型と中型があり、カマド軸方向の違いから2時期に分けられる。各竪穴住居跡について検出順に記述する。

第1号竪穴住居跡（図8）

【位置と確認】 I区調査区東側境界のIN-3グリッドを主体に位置する。標高28m程の微高地にたくられており、第IVb層中に黒色土プランで検出した。本住居跡の約半分は調査区外に延びている。【平面形・規模】 全体形は不明であるが、およそ方形になるものと思われる。検出した住居跡に西辺

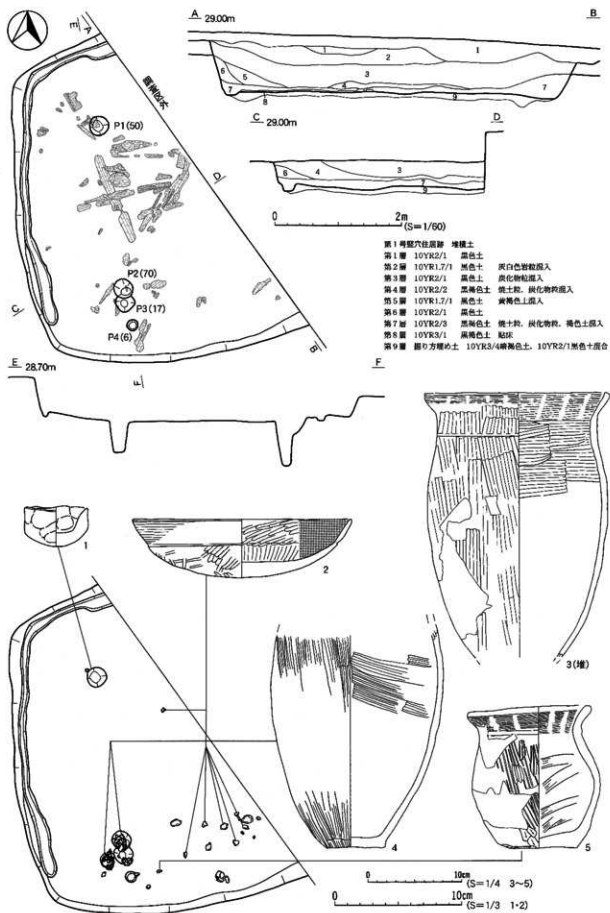


図8 第1号堅穴住居跡

と南辺はやや湾曲しているが、西辺で約4.5m・南辺で4mあり、規模が約5m前後の住居跡になるものと思われる。検出した部分の床面積は12.9㎡である。

〔堆積土〕住居跡内堆積土は7層に分けられる。黒色土を主体にした自然堆積層である。第8層は調査区境界壁面とその手前に僅かにみられた薄層で、貼り床土と思われる。第9層は混合土の掘り方埋め土である。

〔床・壁〕床面中央から東側にかけてはおおむね平坦であるが、西側はやや起伏があり、北側は中央部に向かい約10cmの高低差で傾斜している。床から検出面までの高さは、西壁で約35cm、北壁で55cm、南壁で30cmである。調査区境界面の土層により、掘り込み面は第Ⅱ層であり、床面までの深さは北側で80cm、南側で60cmある。

〔カマド〕調査範囲には確認されなかった。調査区外の住居跡北側ないし東側にあるものと思われる。

〔柱穴〕床面から4基のピットを検出した。大きさはピット4を除き、径が30cm程の円形である。深さはピット1が50cm、ピット2が70cmあり支柱穴と考えられる。

〔壁溝〕西側壁直下から北側壁直下につくられている。溝幅は10～20cmで、深さは6～8cmである。溝そのものは緩く蛇行しており、溝底は起伏がある。

〔出土遺物〕堆積土中のほか、住居跡床面南側を中心に土師器と礫が出土している。特にピット2の周囲からほぼ完形品が潰れた状態で出土している。また、堆積土第7層上面から床直上まで住居跡中央部を中心に炭化材が重なるように出土した。炭化材の幅は20cm程で、長さは1～1.5m程である。

〔小結〕床面出土土師器から8世紀代に比定される。また、炭化材の出土から火災に遭ったものと判断している。
(小田川)

第2号竪穴住居跡(図9)

〔位置と確認〕I区中央東側IK-28・29グリッドに跨って位置する。標高27～27.5mにつくられており、第Ⅳa層中に黒色土の隅丸長方形のプランとして検出した。

〔平面形・規模〕平面形は南東方向が湾曲した不整な長方形である。大きさは、長軸方向で約4.2m、短軸方向で約3mある。床面積は約9.8㎡である。

〔堆積土〕住居跡内堆積土は5層に分けられ、第2層黒色土を主体にする、第4・5層は薄層で部分的にみられた。第6層は掘り方埋め土である。掘り方は深く起伏が激しい。

〔床・壁〕床面は小さい起伏はあるが概ね平坦である。床面から検出面までの周壁の高さは約10cmで、やや開くように立ち上がる。

〔カマド〕床面中央から東寄りに、カマド袖部と思われる焼けた粘土の高まりを検出している。袖の規模は70×80cmで、床面から12～15cmの高さで遺存している。内部には褐色土を主体にした土が4層堆積しており、その下から12×24cmの範囲の火床面を検出している。煙道の痕跡は確認できなかったが、プラン外側に検出したピット2が煙出孔の可能性があり、これから推定して、長さ1.8m程の半地下式の煙道であったものと思われる。方向は真南から東へ約45度傾いている。

〔柱穴〕床面にピット1基を検出した。径が約40cmのほぼ円形で、深さは55cmある。やや斜めに掘り込まれており、1基だけであり住居跡の柱穴とは考え難い。

〔土坑〕西側隅に隅丸長方形の土坑を検出した。規模は90cm×1.3mで、床からの深さは35cmある。

[出土遺物] カマド内と袖部から土師器甕の破片と礫が出土している。

[小結] カマドの位置から小型の住居跡と判断している。カマドと掘り方の関係を詳細に捉えることができなかったが、床面積の割に土坑の占める位置も大きく、特殊な使われ方をした住居跡の可能性はある。カマド出土遺物から9世紀後半～10世紀初頭に比定される。(小田川)

第3号竪穴住居跡 (図10)

[位置と確認] I区西北側IH・I-32・33グリッドに位置する。第IV層面に黒褐色の方形プランとして検出した。

[平面形・規模] 平面形はほぼ方形である。大きさは、北辺と西辺がやや長く約3.5～3.6mあり、南辺と東辺では3.2～3.2mである。床面積は11.8㎡である。

[堆積土] 住居跡内堆積土は6層に分けられる。黒色土を主体にした土で、灰白色岩粒の混入が顕著であり自然堆積と判断した。第1層は白頭山火山灰であり、第7層は掘り方埋め土である。

[床・壁] 床面は全面にわたり平坦である。掘り方底面は起伏が激しく、最大15cmの深さがある。

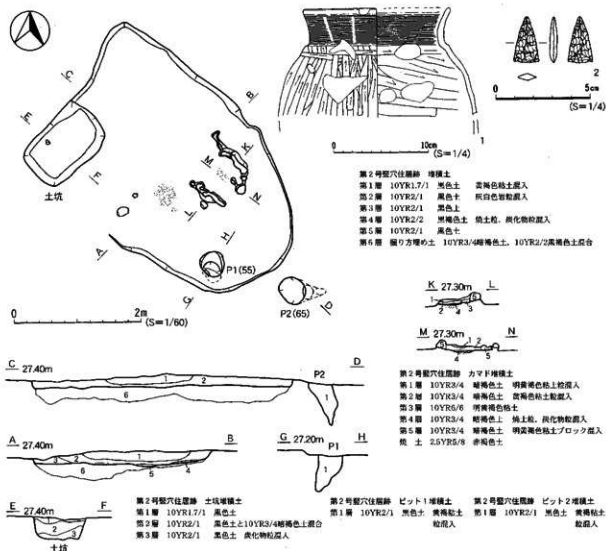


図9 第2号竪穴住居跡

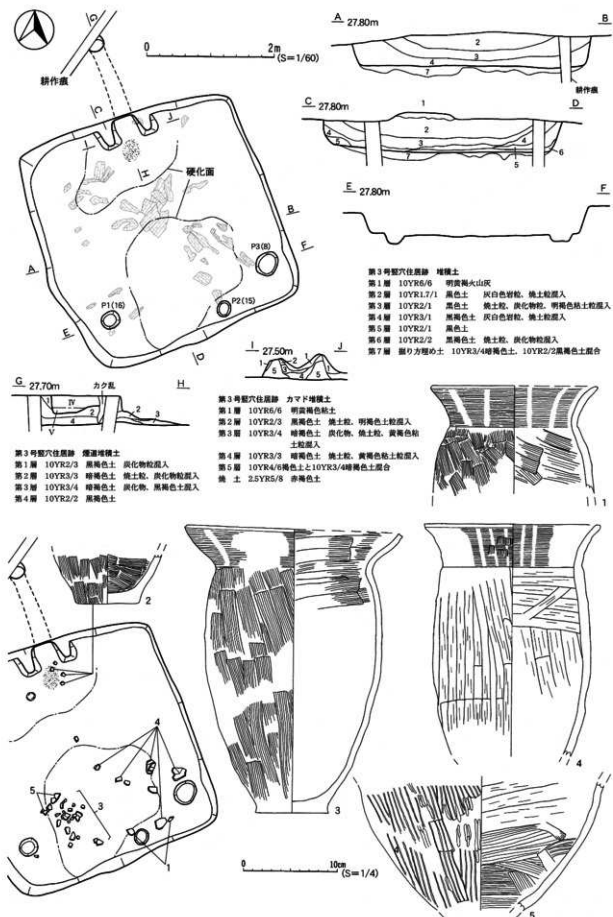


図10 第3号竪穴住居跡

第VI層の粘土塊と黒色土および褐色土を混合し床面を整えている。カマドの前面と中央部から南壁の範囲に硬化した面が確認された。壁は床面から開き気味に立ち上がる。壁高は、西壁で35cm、北壁で40cm、南壁と東壁は約50cmである。

【カマド】カマドは北壁のほぼ中央に位置する。カマドの前面が破壊されており、両袖部は奥壁から長さ40～45cm、高さ約30cmが遺存している。壊されたカマド構築土は、その場に散在していた。カマド内堆積土は4層に分けられたが、天井部と思われる土の堆積はみられなかった。火床面は遺存する袖部の前面中央に35cm程の楕円形で確認された。焼成は薄く3～4cmである。煙道は地下式で、長さ1.2m、最大幅25cmである。煙道底面は平坦でほぼ同一レベルである。煙出孔は、耕作用トレンチャーに壊されているが、径が20～30cm程の楕円ないし円形であったものと思われる。堆積土は4層に分けられる。方向は真北から西へ20度傾いている。

【柱穴】住居跡南側から3基のピットを検出した。ピットの大きさは25～40cmのほぼ円形で、深さは8～16cmと浅い。各壁際に近接してつくられており深さは浅いが、住居跡の柱穴に関連したものと考えられる。

【出土遺物】堆積土中から土師器細片が出土しているほか、住居跡床面南側から土師器壺3個体、鉢1個体分の破片と数点の礫が出土している。また、堆積土第4層上面から床上まで焼土と炭化材が出土した。焼土はカマドと住居跡隅部分に顕著であり、褐色土が混合する。炭化材は、住居跡中央部を中心に重なるように出土した。炭化材の幅は20～25cm程で、長いもので50cm程ある。

【小結】床面出土遺物から8世紀代に比定され、炭化材の出土から火災に遭ったものと判断している。第1層白頭山火山灰から10世紀初頃には完全に埋没している。(小田川)

第4号竪穴住居跡(図11・12)

【位置と確認】I区中央よりやや南東側I L・K-23・24グリッドに位置する。標高26m程の所にあり、第IV層面に黒褐色土の方形なプランで検出した。

【重複】本跡の西壁に第17号溝状土坑、北壁に第30号土坑が重複し、本遺構が新しい。

【平面形・規模】ほぼ方形の住居跡で、北辺と東辺で約6m、西辺で5.7m、南辺で5.5mある。床面積は32.3㎡である。

【堆積土】住居跡内堆積土は3層に分けられる。黒色土を主体にする土で自然堆積と判断している。後述するが、第2層上面から炭化材が出土している。

【床・壁】床面はほぼ平坦である。壁高は、北東辺に高く東壁で最大37cm、北壁で30cm、西壁で15～18cm、南壁は約10cmである。周壁は開くように立ち上がっている。

【カマド】カマドは北壁のほぼ中央につくられている。両袖部は長さ60～70cm、高さ約20cmが遺存しており、先端には礫が露呈している。袖は、15～20cmの高さで盛られた基礎の上に、にぶい黄褐色粘土をさらに盛り上げ、先端部を礫で止め構築されている。礫は30cm程の扁平な礫である。カマド内堆積土は4層に分けられる。第3～5層は褐色土で天井部の崩落と思われる。火床面は35×55cmの楕円形範囲で、燃焼部奥まで及んでいる。焼成は約6cmの厚さがある。煙道は地下式で、長さは壁から約1.5mある。底面は平坦で、床面ほぼ同じレベルで水平に延びている。煙出孔は径が40cm程の円形で煙道底面より20cm深く掘り込んでつくられている。方向は真北から18度西へ傾いている。

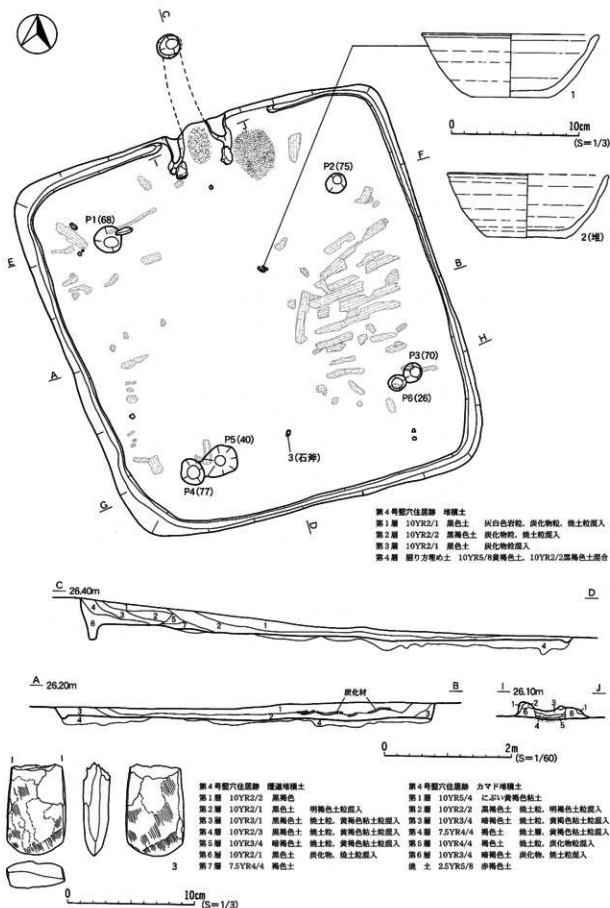


図11 第4号竪穴住居跡(1)

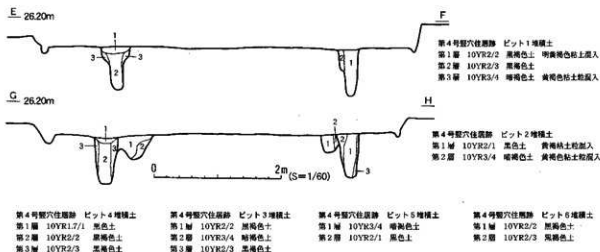


図12 第4号竪穴住居跡(2)

〔柱穴〕床面から6基のビットを検出した。形状は不整な円形および楕円形で、床面からの深さはビット1が68cm、ビット2が75cm、ビット3が70cm、ビット4が77cm、ビット5が40cm、ビット6が26cmある。ビット内堆積土は黒褐色土を主体にした土で、土層ラインからビット1～ビット4には柱下部が残っていたものと思われる。各ビットの間隔は、ビット1～ビット2間が3.65m、ビット2～ビット3間が3.3m、ビット3～ビット4間とビット1～ビット4間が3.85mあり、ビット5～ビット6間は3m、ビット1～ビット5間は3.35m、ビット2～ビット6間は3.85mある。これらは配置から主柱穴と判断され、深さと堆積土の状態からビット5とビット6は作り替えられたものと考えられる。

〔出土遺物〕堆積土中と床面から数十点の土師器と礫が出土している。床面出土遺物は概して少ない。また、堆積土第2層上面から床上まで焼土と炭化材が出土している。焼土は褐色土が混合する状態で第3号住居跡の状態に比べ少ない。炭化材は住居跡周壁付近に多く、特に住居跡東側に顕著に残っている。炭化材の幅は5～20cm程で、長さは20cm～1.3m程あり、壁際から住居跡中央部に向かい倒れているように見える。

〔小結〕床面出土遺物から9世紀末～10世紀初頭に比定される。炭化材の出土から火災に遭ったものと判断されるが、カマド破壊と床面遺物の少なさから廃棄のため火が放たれた可能性もある。

(小田川)

第5号竪穴住居跡 (図13・14)

〔位置と確認〕I区IN・O-21・22グリッドに位置する。第4号住居跡から南東へ約5m離れた、標高25.5m程の所にあり、第Ⅲa層面で黒色土の方形なプランとして検出した。

〔平面形・規模〕方形で南辺がやや長く5m、北辺と東西辺は4.8mである。床面積は24.2m²である。

〔堆積土〕住居跡内堆積土は3層に分けられる。黒色土を主体にしており、第1層中には灰白色岩粒の混入が顕著である。湧水地に近いためか、湿性と粘性に富んでいる。第4層は掘り方埋め土と捉えたが地山面までの深さがあり、掘り過ぎの可能性もある。

〔床・壁〕床面はほぼ平坦である。また、カマド前面から南東側壁際に50cm～1m程の幅でカギ状の硬化面が認められた。壁高は、南西および南東壁で15～20cm、北東および北西壁で30cmある。

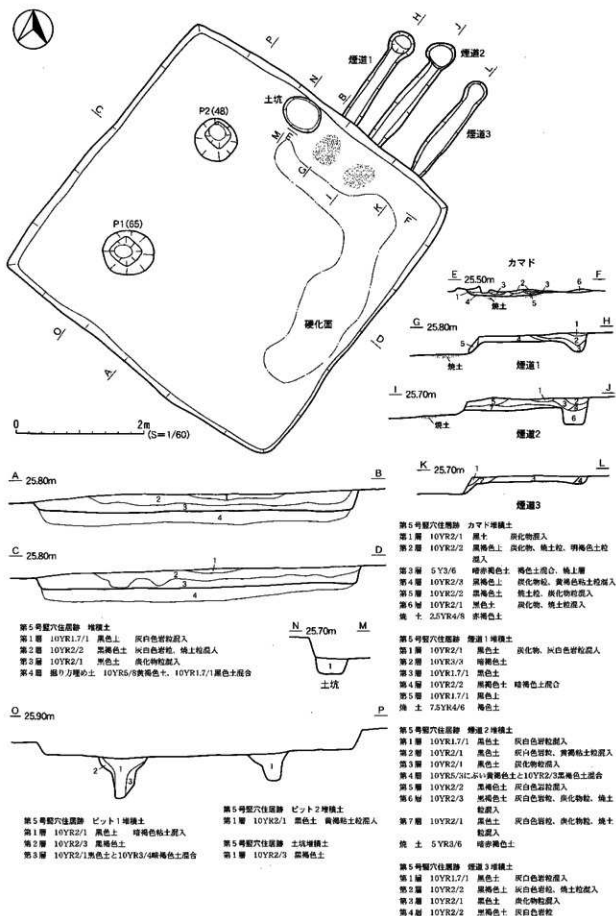


図13 第5号竪穴住居跡(1)

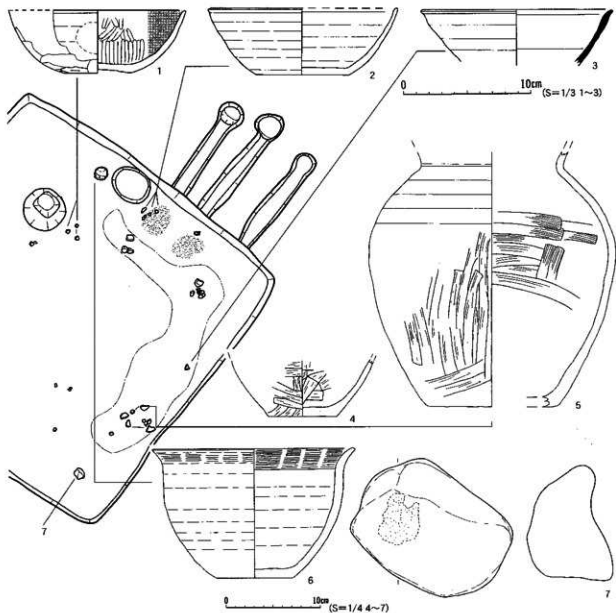


図14 第5号竪穴住居跡(2)

[カマド] 北東壁の中央から隅に向かい3基検出された。検出状況および精査から、南東隅のカマド3から中央部のカマド1・2へ作り替えられているもので、カマド1と2は同時存在した可能性もある。各カマドの袖部と天井部は遺存していない。煙道についても上部が削平されている可能性がある。壁際からの煙道の長さは、カマド1で1.7m、カマド2で1.9m、カマド3で1.8mあり近似している。煙道底面は平坦で、住居跡床面から7~20cm高く水平につくられている。煙出孔はほぼ円形で、検出面からの深さはカマド1で30cm、カマド2で40cm、カマド3で10cmあり、カマド1だけ煙道底面とほぼ変わらない深さである。火床面はカマド1と2から検出された。共に床から最大8cm程の皿状に掘り窪まれた内にあり、形状は不整な楕円形で壁から15~25cm離れている。焼成の厚さは約5cmである。火床面の付近からは被熱した円礫が出土していることから、袖の構築には礫が用いられていた可能性がある。各カマドの方向は真北から東へ、カマド1が37度、カマド2が38度、カマド3

が39度傾いている。

〔柱穴〕住居跡北西壁から約1.2m離れてピットを2基検出した。ピット1は60×80cmの楕円形で深さは65cm、黒色土を主体にした堆積で柱痕状である。ピット2は径が65cmのほぼ円形で、深さは48cm、堆積土は黒色土に黄褐粘土が混入する単層である。ピットの間隔は2.35mである。南東壁側にも同様なピットを探したが、黒色土中につくられていることと湧水のため検出できなかった。

〔土坑〕カマド1の西側壁際につくられている。50×65cmの楕円形で床面からの深さは25cmある。

〔出土遺物〕堆積土中から土師器が出土しているほか、カマド集周辺と南東壁際から坏・甕・鉢の土師器・須恵器坏の破片と礫が出土しているが、遺物は概して少ない。土坑の脇から略完形(図14-6)の鉢が出土しているほか、南東側の硬化面端部から甕が散在して出土している。

〔小結〕同一方向でのカマドの作り替えが行われている住居跡である。床面出土遺物から9世紀後半～10世紀前半に比定される。
(小田川)

第6号竪穴住居跡 (図15・16)

〔位置と確認〕I区中央部のI I-24・25グリッドに跨って位置する。標高26m程にあり、黒色

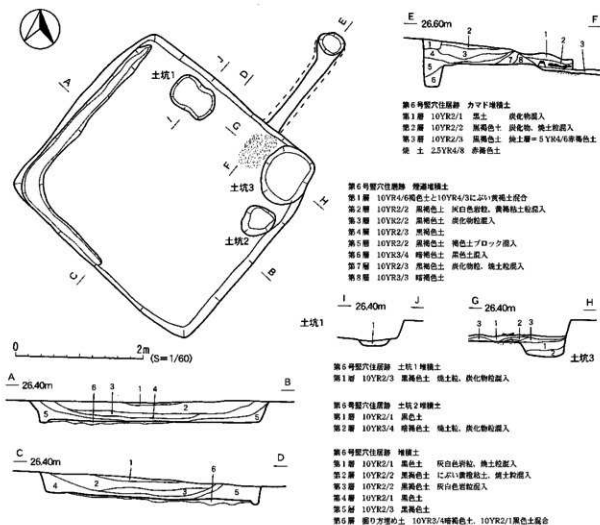


図15 第6号竪穴住居跡(1)

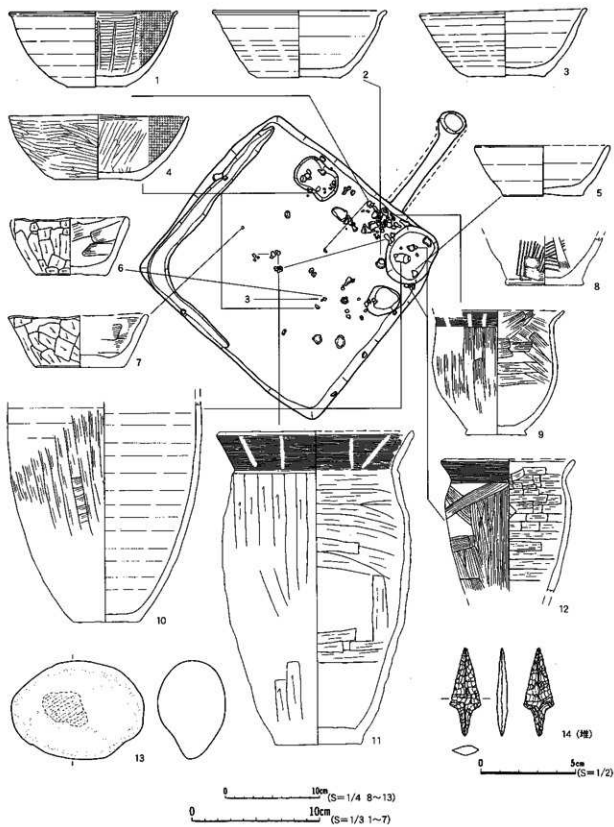


図16 第6号竪穴住居跡(2)

土の方形プランとして検出した。

〔重複〕 第3号溝跡と重複し、本遺構が新しい。

〔平面形・規模〕 ほぼ方形になる。大きさは北東・北西辺および南東辺で3.3m、南西辺で3.6mある。床面積は10.6㎡である。

〔堆積土〕 住居跡内堆積土は5層に分けられる。黒色土を主体にした土で自然堆積と判断している。第6層は掘り方埋め土で、住居跡中央から西側部分に確認された。

〔床・壁〕 床面は平坦である。壁高は24～35cmの高さで、北西壁は中位で屈曲するがほかはほぼ直に立ち上がる。

〔カマド〕 カマドは北東辺の中央から東寄りにつくられており、袖部と天井は完全に破壊されている。火床面は壁際から40×60cmの範囲で検出され、焼成は約5cmの厚さがある。火床面とカマド周辺からは、多量の土師器片と扁平な礫が出土していることから、カマドは礫を芯材に土師器片を混入してつくられていた可能性がある。煙道は半地下式で、壁から1.8mの長さがある。煙道底面は平坦で、住居跡床面より10cm程高い。煙出孔は40cm程の円形で、検出面からの深さは70cmあり、煙道底面より34cm深く掘られている。煙道内堆積土は黒褐色土を主体にした土で8層に分けられる。方向は真北から東へ36度傾いている。

〔柱穴〕 柱穴は検出されなかった。

〔壁溝〕 北西壁から南西壁の中央までの壁直下につくられている。溝幅は隅部分が最も広く35cmあり、全体では10～20cmの幅である。深さは4～6cmである。

〔土坑〕 住居跡内に3基の土坑を検出している。土坑1は北東壁際につくられている。50×70cmの不整楕円形で床面からの深さは12cmと浅い。土坑2は南東壁際にある。径は50cm程の不整円形で、深さは39cmである。機能については明確ではないが貯蔵穴の可能性がある。土坑3は、住居跡東隅に検出した。75×95cmの楕円形で、床面からの深さは25cmある。火床面の下から検出されており床下土坑のほか、本住居跡とは異なる時期のものである可能性も考えられる。

〔出土遺物〕 堆積土中から縄文時代の石鏃が出土したほか、床面から坏7個体、甕5個体分の破片と礫が出土している。火床面上からの出土が顕著で、ほかに中央部から南東壁付近まで各個体が混在して出土している。

〔小結〕 出土遺物から9世紀後半～10世紀初頭に比定される。カマドは完全に破壊され、遺物は放置されている。
(小田川)

第7号竪穴住居跡 (図17・18)

〔位置と確認〕 I区中央南のI I～K-18・19グリッドに位置する。第IV層面に黒褐色土の方形プランとして検出した。

〔重複〕 第8号竪穴住居跡と重複し本遺構の方が新しい。

〔平面形・規模〕 本調査で検出した住居跡の中で最も大きく、形状はほぼ方形になる。規模は北西および北辺で6.8m、南西辺で6.6m、南東辺で6.4mあり、床面積は45.6㎡である。

〔堆積土〕 住居跡内堆積土は5層に分けられる。黒褐色土を主体にした土で、自然堆積と考えられる。

〔床・壁〕 床面はカマド周辺が若干高いが、ほぼ平坦である。壁高は北西壁で40～50cm、北東壁で

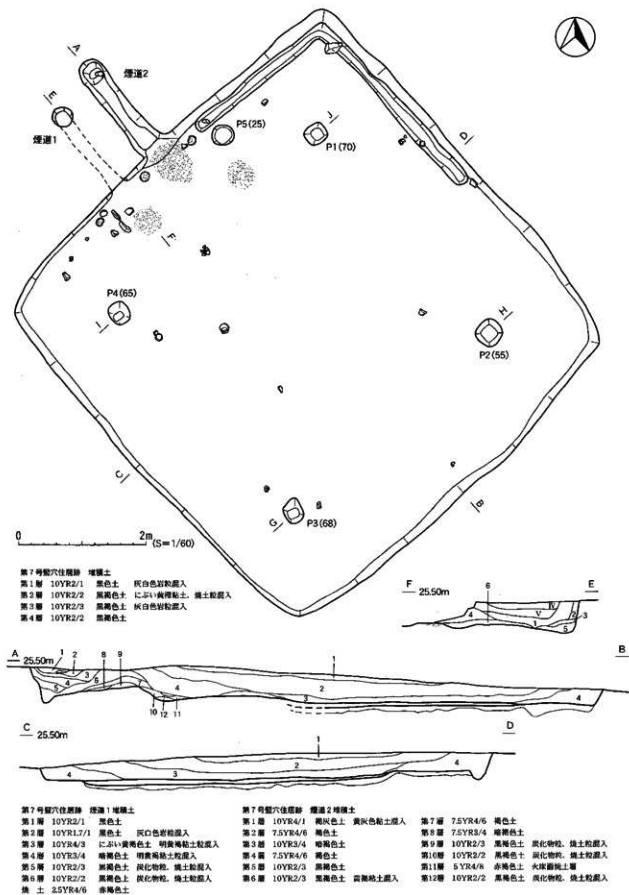


図17 第7号竪穴住居跡(1)

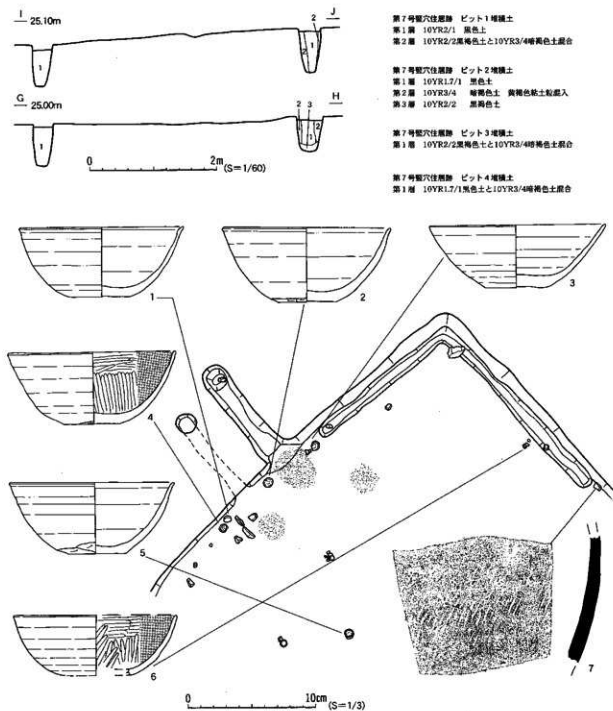


図18 第7号竪穴住居跡(2)

35～22cm、南西壁とは南東壁は28～20cmである。

[カマド] 北西壁に2基検出した。作り替えられているもので、検出状況と精査から壁のほぼ中央に位置するカマド2が古く、やや西寄りのカマド1が新しいと判断される。カマド1は、壁際から1×2mの範囲で焼けた粘土が内部に流れ込むような状態で検出された。右袖部が崩れていることと、左袖部の芯材に用いられている礫が露呈していることから、破壊されたものと考えられる。火床面は、壁際から40cm程離れて50cm程の円形で検出された。焼成は床下約5cm程である。煙道は地下式で、長さは約1.6mある。煙道底面はほぼ平坦で煙出孔に向かい傾斜している。煙道内堆積土は、黒褐土

を主体にする。自然堆積と判断している。カマド2の袖部および天井部は完全に破壊整理されている。火床面は60×70cmの不整形で、焼成は8cm程である。煙道は半地下式で、長さは約1.9mある。煙道底面は床面から20cm程高く、煙出孔に向かい傾斜している。煙出孔は煙道底面よりさらに15cm深く掘り込まれている。煙道内堆積土は、褐色土が主体であり自然堆積と判断している。方向は両カマドともに、真北から西へ40度傾いている。

〔柱穴〕住居跡の四隅から約1.5m離れて4基のピットを検出した。各ピットの大きさは30×35cm程の方形で、深さはピット1が70cm、ピット2が55cm、ピット3が68cm、ピット4が65cmである。各ピットの間隔は、ピット1～2間とピット3～4間が4.2m、ピット2～3間とピット1～4間が4.2mあり、整然とした配置で主柱穴と判断される。ピット5は、位置や深さから柱穴とは考えられず、カマド脇にあることから厨房施設に関した小穴と考えられる。

〔土坑〕カマド2の東側に検出した。柱穴と同様の大きさであり、深さは25cmと浅い。

〔壁溝〕カマド2の脇から北東壁の中央部まで、壁直下にL字状につくられている。幅は20～30cmで、深さは屈曲部で最大15cmあり、ほかは10cm前後である。

〔出土遺物〕堆積土中のほか、カマドとその周辺から土師器坏6個体と甕、須恵器の破片のほか礫が出土している。カマド検出面出土の坏は完形品で、煙道を挟み壊されたカマド構築土の上にほぼ同一間隔、同一レベルで出土しており意識的に置かれたものと考えている。

〔小結〕前述したが、カマドは破壊され、遺物が少ないことから整理されているものと思われる。その中で完形の坏の出土状況から見て、住居跡廃絶の際に祭祀行為が行われたものと考えられる。坏の形態から9世紀後半～10世紀初頭に比定されるものである。

(小田川)

第8号竪穴住居跡(図19)

〔位置と確認〕I区I1・J-17・18グリッドに跨って位置する。第7号竪穴住居跡精査時に土層面および床面に黒褐色土の長方形プランとして検出した。

〔重複〕第7号住居跡と重複し本遺構が古い。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸長方形であったものと思われる。規模は東辺で5m、北辺と西辺で約3.5～4mある。床面積はおよそ22.7㎡である。

〔堆積土〕堆積土は、黒褐色土で、第7号竪穴住居跡の土層面で1層だけ確認した。

〔床・壁〕床面は平坦である。壁の立ち上がりは僅かに遺存しているだけである。

〔カマド〕北壁のほぼ中央に位置したものと思われる。袖部および天井部は遺存していない。煙道両側の壁面の状態から、袖部は一部地山を削り残してつくられていた可能性があり、また20cm程の扁平な角礫が袖位置から出土していることから、芯材ないしは端部に礫が用いられていたものと考えられる。火床面は20cm程の円形で、焼成は約4cmである。煙道は長さ1.1mと短い。煙道底面は平坦で、煙出孔は煙道底面より6cm程深く掘られている。方向は真北から西へ28度傾いている。

〔柱穴〕住居跡の四隅にあたる部分から4基のピットを検出した。各ピットの大きさは20×35cm程の円形および方形で、深さはピット1が74cm、ピット2が30cm、ピット3が68cm、ピット4が65cmである。各ピットの間隔は、ピット1～2間とピット3～4間が3m、ピット2～3間とピット1～4間が2.7mあり、配置から主柱穴と判断される。

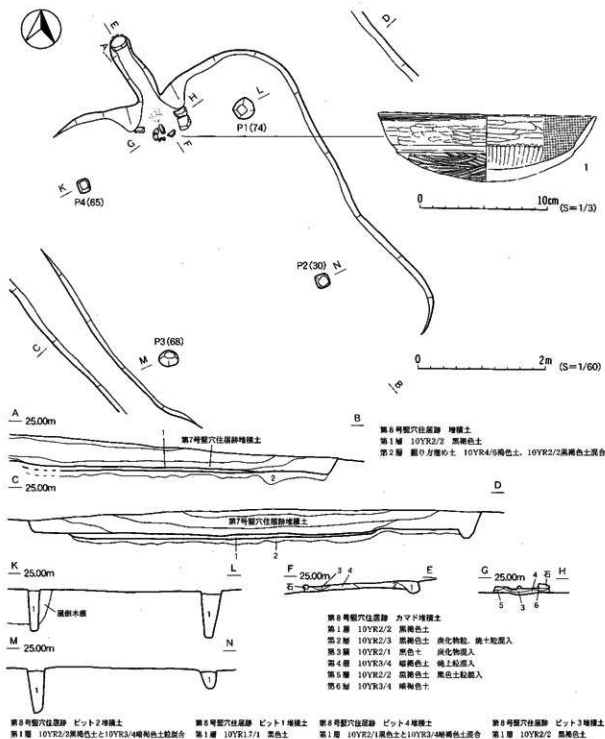


図19 第8号竪穴住居跡

〔出土遺物〕カマド中央部から土師器環が潰れた状態で出土している。

〔小結〕第7号住居跡に破壊され、明確ではないが、遺物から8世紀前半に比定される。(小田川)

第9号竪穴住居跡 (図20・21)

〔位置と確認〕I区南西側I G-13・14グリッドに位置する。第IV層中に方形なプランで検出した。

〔平面形・規模〕平面形はほぼ方形である。規模は北西辺で3.7m、北東辺4.2mあり南西辺と南東

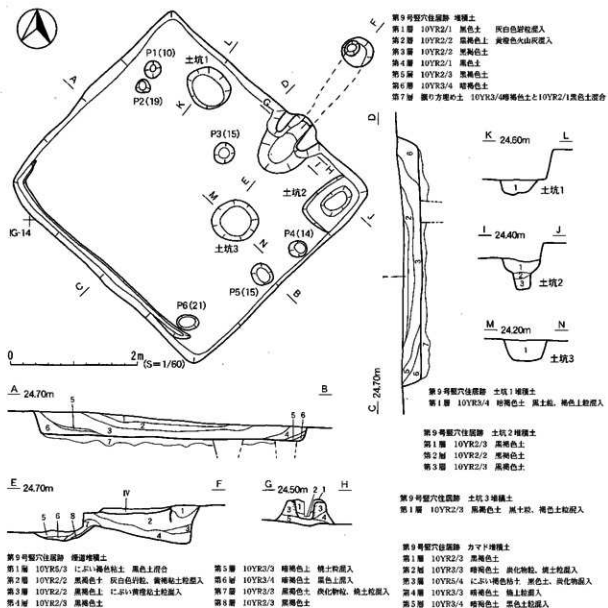


図20 第9号竪穴住居跡(1)

辺で約4mある。床面積は14.7㎡である。

〔堆積土〕住居跡内堆積土は6層に分けられる。黒褐色土を主体にした土で、自然堆積と考えられる。第7層は掘り方埋め土で、掘り方には起伏がみられる。

〔床・壁〕床面は平坦である。壁の高さは20～35cmある。

〔カマド〕北東壁の中央からやや東よりにつくられている。袖部は前方の約半分が壊されており、壁から長さ約40cm、幅約35cm、高さ約40cmが遺存している。火床と思われる焼け面は、両袖の間に僅かに検出された。また、断ち割りにより燃焼部は、床面を70×80cm程の楕円形に掘り込み埋め土をした基礎の上につくられている。煙道は地下式である。長さは1.6mあり、幅は20～35cmと煙出孔に向かい広がっている。底面は平坦で、煙出孔に向かい傾斜している。煙出孔は、径が45cmの円形で、深さは検出面から60cmある。堆積土は8層である。第2層中から土師器壁の破片が出土している。人為に埋められている可能性がある。方向は真北から東へ39度傾いている。

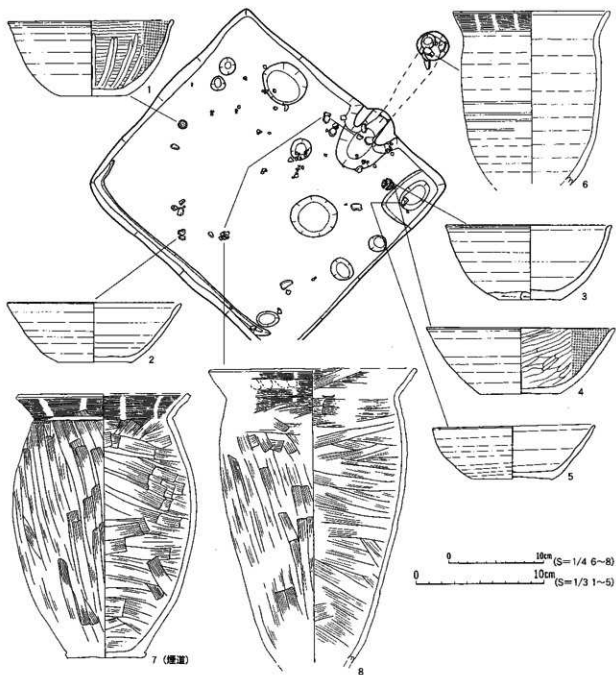


図21 第9号竪穴住居跡(2)

〔柱穴〕床面から20～35cm径のビットを6基検出した。深さはビット1の10cm～ビット6の21cmまでで比較的浅い。各ビットの間隔や配置に規則性はみられず、すべてが柱穴とは断言できない。

〔壁溝〕南西壁直下に、幅10～15cm、深さ10cm前後の溝が掘られている。

〔土坑〕床面に3基の土坑を検出した。土坑1は北東壁近くにつくられている。60×70cmの楕円形で床面から25cmの深さである。土坑2は住居跡東側隅につくられている。60×90cmの長方形で床面から50cmの深さがある。箱形で25cm程掘られさらに一段深く掘り込まれ、断面形状は中位で屈曲するY字状である。土坑3はカマドから60cm程離れた位置につくられている。70cm径の不整形円形で深さは35cmある。

〔出土遺物〕 堆積土中のほかに、床面から土師器杯5個体と甕2個体ほか礫が出土している。また、煙出孔から甕1個体の破片が出土している。遺物は、床面中央部分を除き散在して出しているが、特にカマド側に多く、破片も大きい。

〔小結〕 出土遺物から9世紀後半～10世紀初頭に比定されるものである。

(小田川)

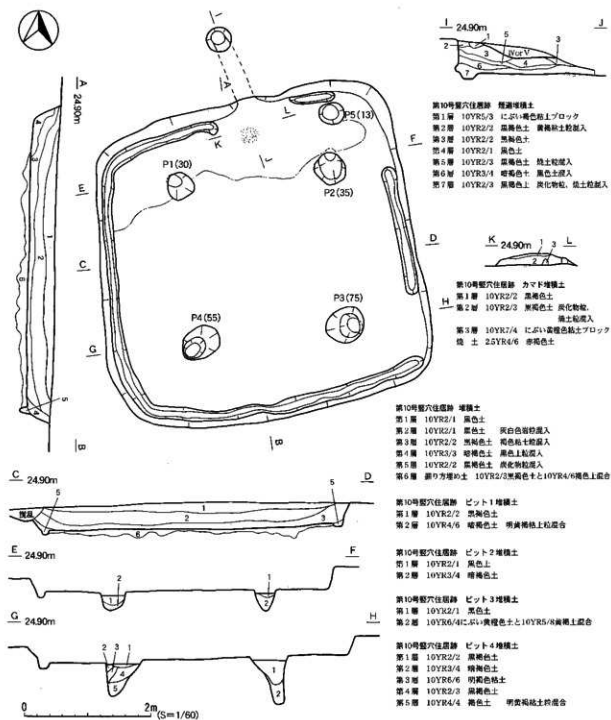


図22 第10号竪穴住居跡 (1)

第10号竪穴住居跡 (図22・23)

[位置と確認] I区西側IE-15・16グリッドに位置する。南東側に第9号竪穴住居跡が約4m離れてある。第IV層中に方形なプランとして検出した。

[平面形・規模] 平面形はほぼ方形である。規模は西辺が4.2mとやや短く、東辺で4.4m、北辺と南辺が4.5mあり、四隅部分の湾曲が強い。床面積は19.5㎡である。

[堆積土] 住居跡内堆積土は黒色土と黒褐色土の堆積で、5層に分けられる。自然堆積と判断している。第6層は第V層と黒褐色土が混合した掘り方埋め土である。掘り方底面の起伏は激しい。

[床・壁] 床面は平坦である。住居跡北側壁際から約1mの幅で硬化した面が認められた。周壁の高35～45cmである。

[カマド] 北壁のほぼ中央に位置する。床面から約20cmの高さで、黒褐色土と黄褐色粘土が混合した盛り上がりとして検出した。袖部と天井部は完全に破壊されており、崩された構築土は火床面上に

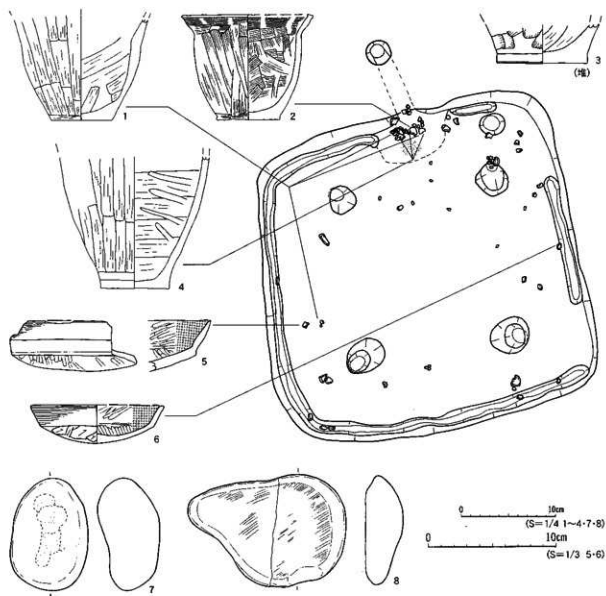


図23 第10号竪穴住居跡 (2)

60cm×1m程の範囲で置かれている。火床面は25×35cmの楕円形で壁際から約30cm離れている。焼成の厚さは約3cmである。煙道は地下式で壁際から1.4mの長さがあり、幅は約30cmである。底面は平坦で、床面とほぼ同じ高さで延びている。煙出孔は40cm程の円形で、検出面より60cmの深さで真っ直ぐ掘られており、煙道底面より10cm深い。堆積土は7層に分けられ、煙出孔から流れ込むように堆積している。カマドの方向は真北より西へ19度傾いている。

[柱穴] 床面から40～60cmの不整円形および楕円形のピットを5基検出した。深さはピット1が30cm、ピット2が35cm、ピット3が75cm、ピット4が55cm、ピット5が13cmである。このうちピットの位置からピット1～4が柱穴と判断される。柱穴は壁際から約1m離れており、各間隔は2.5～2.7mと近似している。また、各柱穴の底面は一方に片寄っており、開口部の形状も不整であること、堆積土の状態から柱が抜き取られているものと思われる。北東隅につくられているピット5は、深さから柱穴とは考えられず、規模的にも小さく貯蔵穴とも思われぬ。とりあえず、ものを置くための掘り込みと考えておく。

[壁溝] カマドと北東及び南東隅部分を除いた壁直下につくられている。幅は10～20cmで、床面からの深さは5～10cmである。

[出土遺物] カマド周辺と住居跡の隅部分を中心に土師器甕が破片で出土している。

[小結] 出土遺物から8世紀前半に比定されるものである。

(小田川)

第2節 土 坑

土坑はⅠ区で29基、Ⅱ区で2基の総数31基を検出した。Ⅰ区28グリッドから南側に多く、沼地と沢に面してつくられている。堆積土から大多数が縄文時代に比定される。多くは、坑底の施設・形態から落とし穴と考えられるもので、堆積土から早期に比定される。他にフラスコ状土坑1基と坑底から礫を出土するものがある。また、早期に比定される用途不明の大型土坑が2基ある。以下、検出順に記述するが、調査時にSK-31としたものは、土坑と認定できなかったことから欠番とした。

(小田川)

第1号土 坑 (図24)

〔位置・確認〕Ⅱ区ⅡY-49グリッドに位置する。平成10年度の調査で確認精査された。

〔平面形・規模〕開口部1.7×1.9mの不整楕円形、坑底90cm×1.2mの楕円形である。底面は緩やかな起伏があり周壁は開くように立ち上がる。

〔堆積土〕5層に分けられる。第1層は中振浮石層で、本遺構埋没後の窪地に堆積したものである。第5層は中央部に山なりに堆積しており、廃棄土の可能性がある。第2層は灰白色岩粒を混入する。

〔小結〕出土遺物はなく時期不明であるが、第2層堆積土により縄文時代晩期～平安時代までの間に構築・廃棄されたものと思われる。

(小田川)

第2号土 坑 (図24)

〔位置・確認〕Ⅰ区ⅠL-27グリッドに位置する。

〔平面形・規模〕開口部約1.3m、坑底約1mの不整形である。底面は平坦で皿状である。

〔堆積土〕黒褐色土の単層である。第Ⅱ層に近似する。

〔小結〕出土遺物はなく時期は不明である。位置的に第2号整穴住居跡に関連する可能性がある。

(小田川)

第3号土 坑 (図24)

〔位置・確認〕Ⅱ区ⅡJ-65グリッドに位置する。道跡と重複しており本遺構が古い。

〔平面形・規模〕開口部1.3×1.7m、坑底約70cm×1.3mの不整楕円形である。底面は平坦で、周壁は真っ直ぐ開くように立ち上がる。

〔堆積土〕2層に分けられ、第1層中には南部浮石が混入する。自然堆積と判断される。

〔その他〕底面から3基のピットを検出した。ピットは径が5cm程で、30～40cmの深さがある。

〔小結〕詳細な時期は不明であるが、第1層の状況とピットにより縄文時代早期～前期の落とし穴の可能性が有る。

(小田川)

第4号土 坑 (図24)

〔位置・確認〕Ⅰ区ⅠK-21グリッドに位置する。第Ⅳb層中に中振浮石が不整形に溜まった状態を確認した。トレンチ掘りを先行して行い、堆積土と壁の立ち上がりから遺構と判断した。

〔平面形・規模〕開口部は径が1.7mの不整形、坑底約80cm×1mの隅丸長方形である。底面は平坦で、検出面から最大1.7mの深さがある。周壁は底から約30cmの高さまで真っ直ぐ立ち上がり、そ

こから開口部までは開くように立ち上がるが、検出面付近では不明瞭である。

〔堆積土〕7層に分けられる。第2層はIV層と極めて似た土色で立ち上がりラインは不明瞭である。第3層は第V層の地山とほぼ同じ土色で壁の崩落土と思われる。すべて自然堆積と判断している。

〔その他〕底面から1基のピットを検出した。ピットは10cm程の楕円形で、20cmの深さがある。坑底部は湧水により滞水し、ピットの確認に手間取った。ほかにピットを確認できなかったが、位置的にみて数基あった可能性がある。

〔小結〕詳細な時期は不明であるが、第1層の堆積から縄文時代前期以前の遺構であり、形状から落とし穴の可能性はある。
(小田川)

第5号土坑(図24)

〔位置・確認〕I区IL・M-14グリッドに位置する。第IVb層中に中振浮石が円形に溜まったプランで確認し、トレンチ掘りにより遺構と判断した。

〔平面形・規模〕開口部は約1.6×1.9m、坑底約80cm×1mの不整楕円形である。底面は平坦で、検出面から最大1.1mの深さがある。周壁は底から開くように立ち上がり、断面形は台形である。

〔堆積土〕自然堆積で4層に分けられる。第2～4層は黒色土を主体の堆積土である。第2層と検出面の土色は近似しているため、遺構の立ち上がりは不明瞭である。

〔その他〕底面から1基のピットを検出した。ピットは7cm程の楕円形で、約20cmの深さがある。第4号土坑と同じ様に、ピットは数基あった可能性がある。

〔小結〕詳細な時期は不明であるが、第1層の堆積から縄文時代前期以前の遺構であり、形状から落とし穴の可能性はある。
(小田川)

第6号土坑(図24)

〔位置・確認〕I区IM・N-12グリッドに位置する。第V層に黒褐色土の円形プランで確認した。

〔平面形・規模〕本遺構の西側および坑底部を大きく掘り過ぎてしまったが、開口部は約1.6×1.8m、坑底約90cm×1mの円形ないし楕円形と思われる。底面はほぼ平坦で、検出面から約1mの深さがある。周壁は底から開くように立ち上がり、断面形は台形である。

〔堆積土〕自然堆積で4層に分けられる。全層が黒色土を主体にした堆積土である。

〔その他〕底面から2基のピットを検出した。ピットは4～6cm程の楕円形で、約15cmの深さがある。掘り過ぎた西側部分にも、ピットがあった可能性がある。

〔遺物〕堆積土1層から縄文土器片1点と土師器片17点が出土したが、細片で図示できない。

〔小結〕詳細な時期は不明である。第2層以下の堆積土とピット、形状から落とし穴の可能性はある。
(小田川)

第7号土坑(図24)

〔位置・確認〕I区IH・I-27グリッドに位置する。第IV層中で黒色土に中振浮石が混じる楕円形プランとして確認した。

〔平面形・規模〕開口部は約1.5×2.1m、坑底約80cm×1.2mの楕円形である。底面はほぼ平坦で、検出面から約1.3mの深さがある。周壁は底から開くように立ち上がり、断面形は台形である。

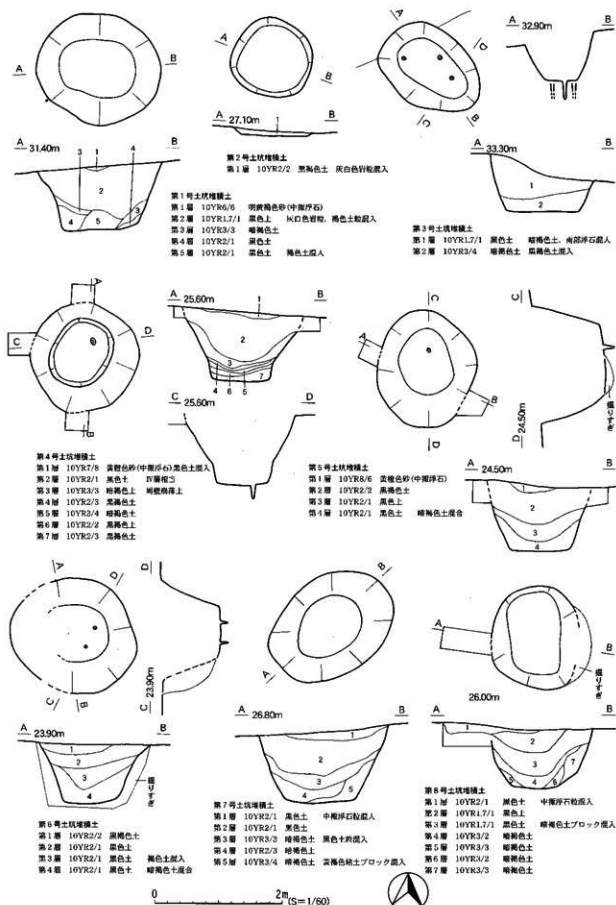


図24 土坑(1)

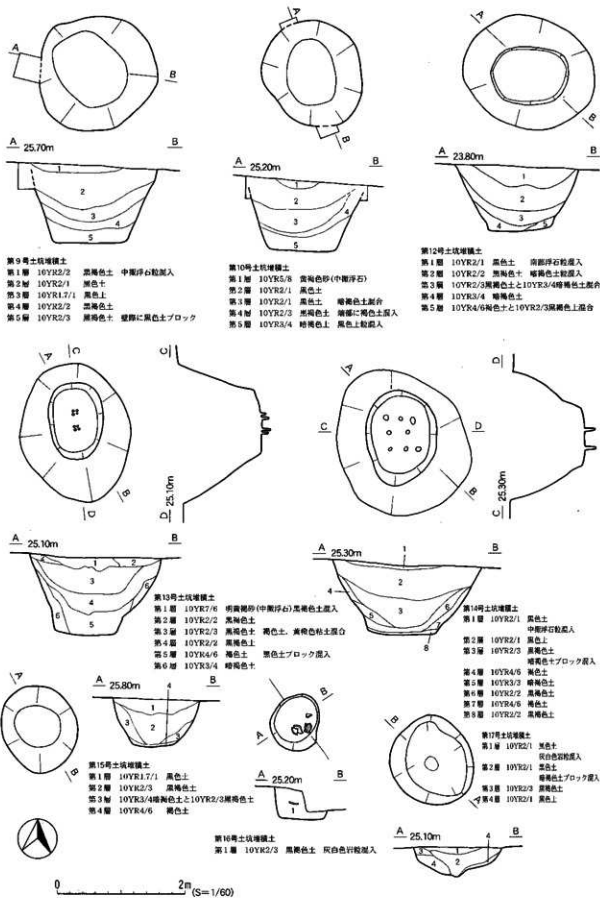


図25 土坑(2)

〔堆積土〕 5層に分けられる。黒色土を主体にした堆積土で、自然堆積と判断される。

〔小結〕 詳細な時期は不明である。底面にピットはないが、形状から落とし穴の可能性が高い。

(小田川)

第8号土 坑 (図24)

〔位置・確認〕 I区IP-24グリッドに位置する。第IV層中に中振浮石が混じる不整形プランで確認した。

〔平面形・規模〕 開口部は約1.5×1.7mの不整形円形、坑底約80cm×1.3mの隅丸長方形である。底面は平坦で検出面から95cmの深さがある。周壁は、底から開き屈曲するように立ち上がる。断面形はボウル状である。

〔堆積土〕 7層に分けられる。上位層は黒色土、下層は褐色土を主体にした土で自然堆積と判断した。

〔小結〕 詳細な時期は不明であるが、第1層堆積土の状態から縄文時代前期には埋没している。

(小田川)

第9号土 坑 (図25)

〔位置・確認〕 I区IP-21・22グリッドに跨って位置する。第IV層中に中振浮石が斑に混じる不整形プランとして確認した。

〔平面形・規模〕 開口部は径約1.9mの不整形円形、坑底約95cm×1.3mの隅丸長方形である。底面は平坦で検出面から1.3mの深さがある。周壁は真っ直ぐ開くように立ち上がり断面形は台形である。

〔堆積土〕 5層に分けられる。黒色土を主体にした土で自然堆積と判断される。

〔小結〕 詳細な時期は不明であるが、第1層堆積土の状態から縄文時代前期には埋没している。

(小田川)

第10号土 坑 (図25)

〔位置・確認〕 I区IP-20グリッドに位置する。第IVa層中に中振浮石が不整形に溜まるプランとして確認した。

〔平面形・規模〕 開口部は約1.6×1.7mの不整形円形、坑底約80cm×1.1mの楕円形である。底面は平坦で検出面から約1.2mの深さがある。周壁は底から真っ直ぐ開くように立ち上がり断面形は台形である。

〔堆積土〕 5層に分けられる。第1層は中振浮石の堆積層であり、すべて自然堆積と判断される。

〔小結〕 詳細な時期は不明であるが、第1層堆積土の状態から縄文時代前期には埋没している。

(小田川)

第11号土 坑 (図27)

〔位置・確認〕 I区IJ・K-13グリッドに位置する。第V層面に第IV層と同様な黒色土が円形状に落ち込んだプランとして確認した。検出時点では円形の竪穴住居跡と思われたが、大型の土坑であることが判明した。

〔平面形・規模〕 開口部の平面形状は不整形な楕円形で約4.5×4.9mあり、坑底は不整形で南北方向に約3.5m、東西方向には1～1.5mある。検出面からの深さは約2.1mある。周壁は南西方向に開くように立ち上がり、真南の壁は坑底部から抉れている。断面形状は周壁中位が部分的に折れる不整形な台形である。底面は北側が段状に10cm程深い、ほぼ平坦である。

〔堆積土〕 30層に分けられる。第1・2層はIV層が被覆している可能性がある。周壁付近の堆積土

は粘質上で崩落土の可能性もある。第22層以下の層は混合層で、特に第26層以下は流水による堆積状態を示している。

〔遺物〕第1層中から土器片が出土している。無文土器で縄文時代早期に比定されるが型式は特定できないほか、細片で図示できない。

〔小結〕詳細な時期と性格については不明であるが、堆積土の状態から縄文時代早期末葉頃にはほとんど埋没している。(小田川)

第12号土 坑(図25)

〔位置・確認〕I区IK-12グリッドに位置する。第V層面に円形のプランとして確認した。

〔平面形・規模〕開口部は約1.7×2mの楕円形、坑底約80cm×1.2mの隅丸長方形である。底面は平坦で検出面から最大1.1mの深さがある。周壁は底から10cm程真っ直ぐ上がり、そこから開くように立ち上がる。断面形は台形状である。

〔堆積土〕5層に分けられる。第1・2層は南部浮石の混じる黒色土。第4・5層は周壁の崩落土の可能性があり、すべて自然堆積と判断される。

〔小結〕詳細な時期は不明である。坑底からピットは検出されなかったが、形状から落とし穴の可能性はある。(小田川)

第13号土 坑(図25)

〔位置・確認〕I区IG-17グリッドに位置する。第V層面に中掘浮石が円形状に溜まったプランとして確認した。

〔平面形・規模〕開口部は約1.8×2.2mの不整楕円形、坑底約70cm×1mの隅丸長方形である。底面は平坦で、検出面から1.3mの深さがある。周壁は坑底から35cm程ほぼ直に上がり、そこから開くように立ち上がる。

〔堆積土〕6層に分けられる。第1層は黒褐色土が混入する中掘浮石の堆積層である。第6層は周壁が崩落した土の可能性があり、全層が黒褐色土を主体にした堆積土で自然堆積と判断される。

〔その他〕底面から8基のピットを検出した。径が4cm程の円形で、約8～15cmの深さがある。坑底のほぼ中央を境に4基1単位で構成されており、ピットの状態から杭状のものが打ち込まれたものと想定される。

〔小結〕詳細な時期は不明である。第1層の堆積から縄文時代前期には埋没しており、ピットおよび形状から落とし穴と判断される。(小田川)

第14号土 坑(図25)

〔位置・確認〕I区IG-18・19グリッドに位置する。第V層面に南部浮石粒を混入する第IVa層と同色の黒色土プランとして確認した。

〔平面形・規模〕開口部は約2×2.4mの不整楕円形、坑底約90cm×1.2mの楕円形である。底面は平坦で、検出面から1.2mの深さがある。周壁は坑底から20cm程ほぼ直に上がり、そこから開くように立ち上がる。

[堆積土] 8層に分けられる。黒色土と褐色土主体の土が交互に堆積する。自然堆積と判断される。

[その他] 底面から8基のピットを検出した。ピットは8～12cm程の円形および楕円形で、約15～20cmの深さがある。

坑底の中央部に北側から3・2・3の配置でつくられている。第13号土坑と同様に杭状のものが打ち込まれたものと想定される。

[小結] 詳細な時期は不明であるが、ピットおよび形状から落とし穴と判断される。 (小田川)

第15号土 坑 (図25)

[位置・確認] I区IG-20グリッドに位置する。第V層面に円形のプランとして確認した。

[平面形・規模] 開口部は約1.2×1.3m、坑底約65×75cmの不整楕円形である。底面は平坦で検出面から80cmの深さがある。周壁は底から湾曲して立ち上がる。断面形はボウル状である。

[堆積土] 4層に分けられる。第1・2層は南部浮石の混じる黒色土。第3層は周壁の崩落土の可能性があり、すべて自然堆積と判断される。

[小結] 詳細な時期と土坑の性格は不明である。 (小田川)

第16号土 坑 (図25)

[位置・確認] I区II-18グリッドに位置する。第7号竪穴住居跡検出時に確認し本遺構が古い。

[平面形・規模] 開口部東側を住居跡に壊されているが、楕円形で90cm～1m程あったものと思われる。坑底は60×75cmの楕円形である。坑底は平坦で、検出面から50cmの深さがある。周壁はほぼ直に立ち上がり、断面形は箱型である。

[堆積土] 灰白色岩粒が混入する、黒色土の単一層である。遺物の出土状態から埋土の可能性はある。

[遺物] 堆積土中位から、縄文時代の壺形土器の胴部下半～底部が出土した。

[小結] 出土遺物から縄文時代後期に比定される。 (小田川)

第17号土 坑 (図25)

[位置・確認] I区IK-18グリッドを主体に位置する。第V層面に円形のプランとして確認した。

[平面形・規模] 開口部で約1.3×1.5m、坑底は95cm×1.2mの不整楕円形である。坑底中央はピット状に浅く窪んでおり、検出面から約50cmの深さがある。周壁は底から緩やかに立ち上がる。

[堆積土] 4層に分けられる。第1層中には灰白色岩粒が混入する。

[小結] 詳細な時期と土坑の性格は不明であるが、堆積土の状態から古代に比定されるもので、近接してある、第7号竪穴住居跡に関連してつくられたものと思われる。 (小田川)

第18号土 坑 (図26)

[位置・確認] I区IF-G-16グリッドに跨って位置する。第V層面に円形のプランで確認した。

[平面形・規模] 開口部で約1.3×1.5m、坑底は1.3×1.4mの楕円形である。坑底は平坦で、検出面から最大40cmの深さがある。周壁は底から直に立ち上がり、断面形状は箱形である。

[堆積土] 2層に分けられる。黒褐色土で、第2層は周壁との混合土と判断している。

[小結] 詳細な時期と土坑の性格は不明である。

(小田川)

第19号土坑(図26)

[位置・確認] I区II-11・12グリッドに跨って位置する。第V層面に不整形プランで確認した。

[平面形・規模] 開口部は約1.4×1.5mの不整形円形である。坑底は1.2m程の不整形で、北東側はさらに抉るように掘り込まれている。坑底は中央部から緩やかに上がり周壁は直に立ち上がる。断面形状は船底形である。

[堆積土] ほとんどを掘り上げてしまったため不明なところが多い。北東側の抉れている部分で2層に分けられる。褐色土が主体で、第2層には粘土が混入する。

[小結] 詳細な時期と土坑の性格は不明である。

(小田川)

第20号土坑(図26)

[位置・確認] I区IM-28グリッドに位置する。第10号溝状土坑精査中に同遺構壁面に確認した。新旧の関係は不明である。

[平面形・規模] 重複により明確ではないが、開口部は約1.3×2.1mの不整形円形で、坑底は長軸1.8m程の不整形円形である。坑底は北東から南西方向に緩やかに下る。周壁は直に立ち上がる。断面形状は船底形である。

[堆積土] 2層に分けられる。黒色土と暗褐色土で、第2層は周壁との混合土と判断している。

[小結] 詳細な時期と土坑の性格は不明である。

(小田川)

第21号土坑(図26)

[位置・確認] I区IG-13グリッドに位置する。第V層面に円形のプランとして確認した。

[平面形・規模] 開口部は約1.5mの不整形円形、坑底は1.2×1.4mの卵形である。坑底は平坦で、検出面から約35cmの深さがある。周壁は底から直に立ち上がり、断面形状は箱形である。

[堆積土] 2層に分けられる。灰白色岩粒を混入する褐色土を主体にする。

[小結] 詳細な時期と土坑の性格は不明である。

(小田川)

第22号土坑(図26)

[位置・確認] I区IE-20グリッドに位置する。第V層面に黒色土の円形のプランで確認した。

[平面形・規模] 開口部の径が約1.6m、坑底の径が1.4mのほぼ円形である。坑底は平坦で、検出面から最大70cmの深さがある。周壁は底から直に立ち上がり、断面形状は箱形である。

[堆積土] 3層に分けられる。第1層には炭化物粒が混入する。第3層は周壁崩落土との混合土と思われ、自然堆積の可能性が高い。

[遺物] 坑底の西側壁際から約10～15cmの大きさの礫が4点、等間隔に置かれたように出土した。礫には特に使用痕跡は認められなかった。

[小結] 詳細な時期と土坑の性格は不明である。

(小田川)

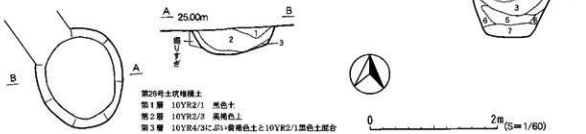
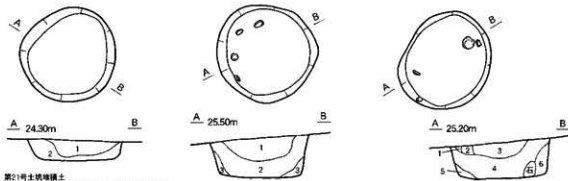
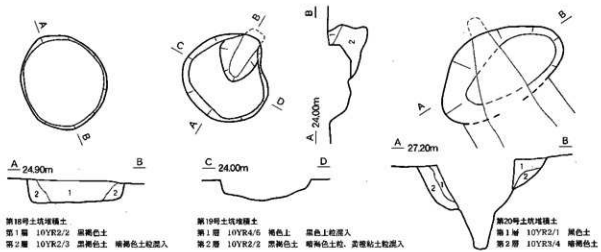


図26 土坑 (3)

第23号土 坑(図26)

【位置・確認】I区ID-20・21グリッドに跨って位置する。第V層面に黒色土の楕円形プランとして確認した。

【平面形・規模】開口部は約1.4×1.6m、坑底が約1.2×1.4mのともに不整形円形である。底面は平坦で、検出面から最大65cmの深さがある。周壁は底から直に立ち上がり、断面形は箱形である。

【堆積土】6層に分けられる。褐色土を主体にした土で、第2層中には炭化物が、第3層中には第V層及びVI層の地山ブロックが混入する。断定できないが自然堆積の可能性が高い。

【遺物】坑底から礫が4点出土している。礫は、北東と南西の壁際に2個1対になるように置かれている。礫には特に使用痕跡は認められなかった。

【小結】詳細な時期と土坑の性格は不明である。(小田川)

第24号土 坑(図26)

【位置・確認】I区IL-16グリッドを主体に位置する。第V層面に黒色土のほぼ円形のプランとして確認した。

【平面形・規模】開口部は径が約1.3mの不整形円形、坑底は約1.7×2mの不整形で北東および東側に張り出す、フラスコ状土坑である。底面はほぼ平坦で、検出面から約1.2mの深さがある。周壁は検出面から深さ約40cmの所で屈曲し、坑底に向かって広がる。

【堆積土】10層に分けられる。第1・3層は第IV層相当の黒色土でほか、第2・4・10層は土色等から周壁の崩落土と思われる。第5～9層の中には粘質土が混合している層もあり、周壁に同様な土がないことから廃棄された土とも考えられる。

【小結】本土坑の性格は不明である。時期については断定できないが、第1層および3層の堆積から縄文時代早期頃のものと思われる。(小田川)

第25号土 坑(図26)

【位置・確認】I区IM-13・14グリッドに跨って位置する。第V層面に黒色土の環状のプランとして確認した。

【平面形・規模】開口部は約1.75×2m、坑底が約75×90cmのともに不整形円形である。底面は平坦で検出面から1.25mの深さがある。壁は底から開くように立ち上がり、断面形は台形状である。

【堆積土】7層に分けられる。第2～7層は黒色土と褐色土であり、周壁の崩落土を含め自然堆積と思われる。湧水地点に位置しており、第7層はグライ化している。第1層は明基褐粘質土で、本遺構埋没後の窪地に廃棄されたものと考えられる。

【小結】詳細な時期は不明であるが、形状と規模および他の土坑の位置から落とし穴の可能性はある。(小田川)

第26号土 坑(図26)

【位置・確認】I区IO-P-18グリッドに跨って位置する。第V層中に円形のプランで確認した。

【平面形・規模】開口部は約1.4×1.6m、坑底約1.1×1.3mのともに楕円形である。底面はやや起伏があり、検出面から40cmの深さがある。周壁は底開くように立ち上がる。断面形は船底状である。

〔堆積土〕3層に分けられる。第3層は混合土であるが、上位層から自然堆積と考えられる。

〔小結〕詳細な時期と性格については不明である。

(小田川)

第27号土坑(図27)

〔位置・確認〕I区東側調査区境界IK-37・38グリッドに跨って位置する。第V層面に楕円状のプランとして確認した。

〔平面形・規模〕調査区境界に位置しており、しかも掘り過ぎたため全体形は明確ではないが、およそ開口部で約1.2×1.8mの楕円形、坑底で約80cm×1.2mの隅丸長方形になるものと思われる。底面は平坦で検出面から90cmの深さがある。周壁はやや開くように立ち上がる。

〔堆積土〕5層に分けられる。第3層の周壁崩落土と思われる層を除き、全層に南部浮石が混じる。自然堆積と判断される。

〔その他〕底面から4基のピットを検出した。ピットは5～10cm程の円形で、約8～15cmの深さがある。

〔小結〕詳細な時期は不明である。第1層の堆積から縄文時代前期には埋没しており、ピットおよび形状から落とし穴と判断される。

(小田川)

第28号土坑(図27)

〔位置・確認〕I区IP-18グリッドに位置する。第V層中に円形のプランとして確認した。

〔平面形・規模〕開口部は約1.0×1.3mの楕円形、坑底約50×80cmの隅丸長方形である。底面は平坦で、検出面から45cmの深さがある。周壁は開くように立ち上がる。断面形は船底状である。

〔堆積土〕黒色土の単一層である。

〔小結〕詳細な時期と性格については不明である。

(小田川)

第29A号土坑(図28)

〔位置・確認〕I区II-9・10およびIH-10・11グリッドに位置する。第V層面に第IV層が円形状に落ち込んだプランとして確認した。

〔重複〕第15号溝状土坑に、開口部の東側を僅かに壊されている。

〔平面形・規模〕検出時点では第11号土坑と同様に円形の大型土坑と思われたが、精査段階で本遺構の北西側に溝状の掘り込みが連続することが判明した。別遺構の重複の可能性もあるが捉えきれず、また堆積土も似ていることから、本土坑に付属するものとして記述する。土坑部はほぼ円形で、開口部が3.1×3.4m、坑底は1.25×1.45mあり、検出面からの深さは約1.7mある。断面形状は周壁中位が部分的に抉れ段状になる不整な台形である。溝状部分は土坑の北西側から延びている。土坑開口部から2m程延び、緩やかに折れさらに西側に3m程延びる。接続する部分の幅は1.5mあり、西端部の幅は約60cmである。底面は起伏があり歪であり中位は土坑状に窪んでいる。また、西端部から開口部に向かって傾斜しており比高差は約65cmある。

〔堆積土〕土坑部は13層に分けられる。第1・2層は第IV層が被覆している可能性がある。周壁付近の堆積土は粘質土で崩落土の可能性もある。第8層以下の層は混合層で、特に第11層は流水によ

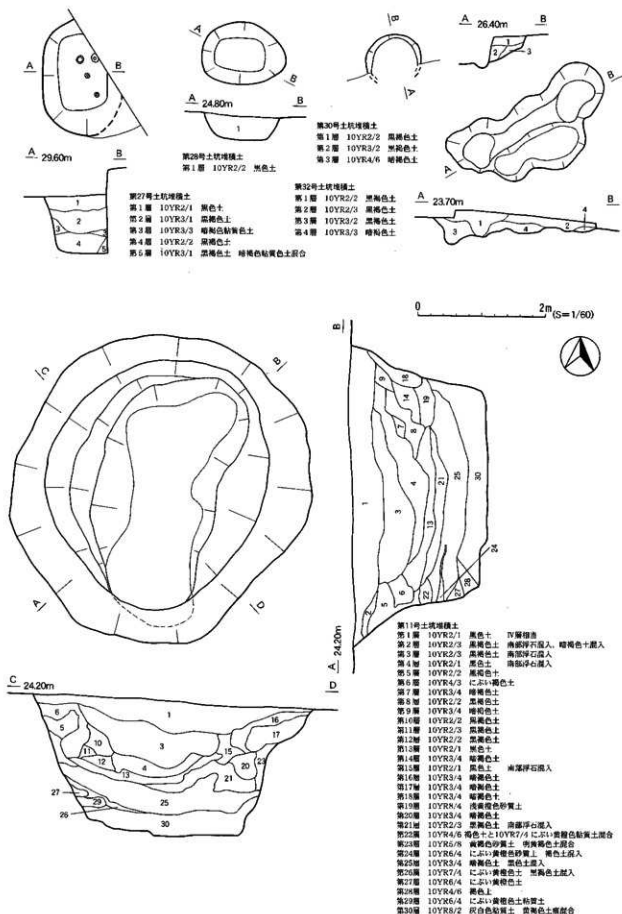


図27 土坑(4)

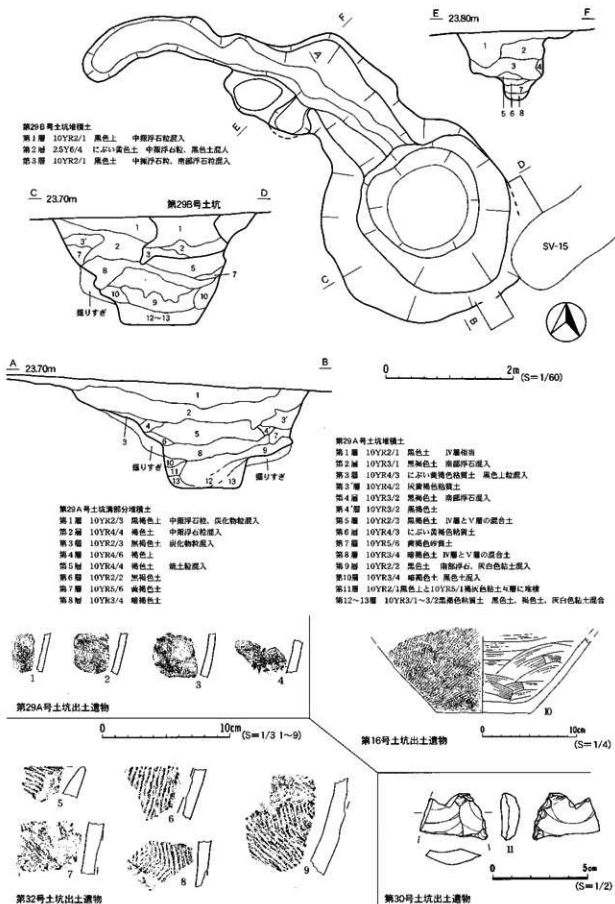


図28 土坑(5)・出土遺物

る堆積状態を示している。第12～13層とした層はさらに分層が可能であったが、湧水が激しく土色を捉えることができなかつたため一括した。溝状部分の堆積土は、褐色土を主体にした土で8層に分けられる。第1層は、第2層堆積後に掘り込まれたようであるほか、第5層以下の土は、抉られた状態の底面に堆積しており、部分的に欠層するほか注記以外の砂が堆積する部分もみられた。

[遺物] 土坑部第1層中と溝部から7点の土器片が出土している。すべて無文土器で縄文時代早期に比定されるが型式まで特定できない。このうち4点を図示した。

[小結] 詳細な時期と性格については不明であるが、堆積土の状態から縄文時代早期末葉頃のものと思われる。(小田川)

第29号土坑(図28)

[位置・確認] I区II-10グリッドに位置する。第29号土坑精査中に、土層面に確認し第29A号とB号にわけた。

[平面形・規模] 掘り下げてしまったため、平面形状等は不明である。土層面から断面形状はフラスコ状となる。検出面から坑底までの深さは約70cmである。

[堆積土] 3層に分けられる。黒色土を主体にした土で、第1層は自然堆積と思われるが、第2・3層は判断し兼ねる。

[小結] 本土坑の性格は不明である。時期については断定できないが、堆積から縄文時代早期頃のものと思われる。また、第24号土坑と関連して機能していた可能性がある。(小田川)

第30号土坑(図27)

[位置・確認] I区IL-24グリッドに位置する。第4号竪穴住居跡精査時に住居跡北側壁面に検出した。本遺構が古い。

[平面形・規模] 本跡の南側半分は住居跡に壊されているが、開口部は径が90cm程の円形であったものと思われる。坑底の形状もほぼ同様であったものと思われる。断面からみて、坑底は中央から緩やかに立ち上がる。検出面からおよそ40cmの深さがある。

[堆積土] 褐色土を主体にしており、3層に分けられる。

[遺物] 堆積土中から、破損した削器が1点出土した。

[小結] 詳細な時期と性格については不明である。(小田川)

第32号土坑(図27)

[位置・確認] I区IF-10グリッドに位置する。第V層面に黒褐色土の不整形プランで検出した。

[平面形・規模] 平面形状は不整形であり、長軸で2.7m、短軸で1.3mある。坑底は起伏が激しく、周壁も屈曲し立ち上がる。

[堆積土] 褐色土を主体にしており、4層に分けられる。

[遺物] 堆積土中から、縄文時代早期の早稲田5類に比定される土器が5点出土した。

[小結] 詳細な時期と性格については不明である。意図した掘り込みと思われるが、形状は意識されていない。小土坑数基が集合したもので、掘り込んで使用後にすぐ埋め戻されている可能性もある。

(小田川)

第3節 溝状土坑

溝状土坑は19基検出された。調査Ⅰ区から18基、調査Ⅱ区から1基の検出である。大半は調査Ⅰ区東側から検出され、他の遺構と同様の検出傾向を示す。溝状土坑同士の重複はない。また、第18号溝状土坑は精査により第4号溝跡に遺構名を変更した。

第1号溝状土坑（図29）

〔位置・確認〕 調査区北西の緩斜面地、標高30m前後のⅡⅠ-7グリッドに位置する。平成10年度の試掘で第Ⅳ層を精査中に黒色土の細長いプランとして検出し、精査した。

〔規模〕 遺構西側が調査区外に延びるため精査できなかったが、検出できた長さで開口部185cm×68cm、底面規模は242cm×16cmで、深さ125cmである。

〔長軸方向〕 斜面に対し斜交し、N-47°-Eである。

〔断面形・底面〕 断面型は長軸方向が袋状で、単軸方向はV字状である。底面は平坦である。

〔堆積土〕 黒色土を主体とし、3層に分かれる。堆積状況は自然堆積である。 （平山）

第2号溝状土坑（図29）

〔位置・確認〕 調査区東端の平坦地、標高29m程のⅠK-37・38グリッドに位置する。第Ⅳ層を精査中に黒色土の細長いプランとして確認した。

〔規模〕 開口部規模361cm×137cm、底面規模は434cm×24cmで、深さ162cmである。

〔長軸方向〕 等高線に対し斜交し、N-8.5°-Wである。

〔断面形・底面〕 長軸方向の断面形状は袋状で、単軸方向の断面型はY字状である。底面にやや凹凸がみられる。

〔堆積土〕 黒色土を主体とし、9層に分かれる。堆積状況は自然堆積である。 （平山）

第3号溝状土坑（図29）

〔位置・確認〕 調査区東側の緩斜面地、標高28.5m前後のⅠH-37・38グリッドに位置する。第Ⅴ層を精査中に黒色土の細長いプランとして確認した。

〔規模〕 開口部規模329cm×48cm、底面規模は314cm×10cmで、深さ104cmである。

〔長軸方向〕 斜面に対し斜交し、N-3.4°-Wである。

〔断面形・底面〕 断面型は長軸方向が歪な逆台形状で、単軸方向はV字状である。底面は平坦に近い。

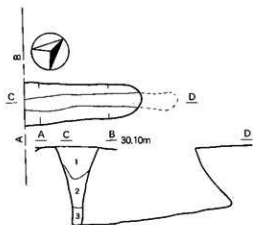
〔堆積土〕 黒～暗褐色土を主体とし、3層に分かれる。堆積状況は自然堆積である。 （平山）

第4号溝状土坑（図29）

〔位置・確認〕 調査Ⅰ区北側のⅠF-35グリッド、標高27m前後の緩斜面地に位置している。第Ⅴ層を精査中に黒色土の細長いプランとして確認した。

〔規模〕 開口部規模は273cm×28cm、底面規模は307cm×10cmで、深さ76cmである。

〔長軸方向〕 斜面に対し平行し、N-49.5°-Wである。

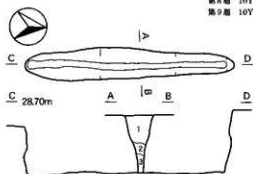
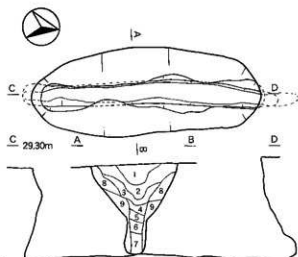


第1号溝状土坑埋藏土

- 第1層 10YR1.7/1 黒色土 南部浮石混入
 第2層 10YR1.7/1 黒色土 黄褐色土混入
 第3層 10YR2/2 黒褐色土 黒色土混入

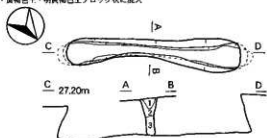
第2号溝状土坑埋藏土

- 第1層 10YR1.7/1 黒色土 南部浮石混入
 第2層 10YR1.7/1 黒色土 南部浮石混入、黒褐色土混入
 第3層 10YR1.7/1 黒色土 南部浮石混入、褐色土混入
 第4層 10YR1.7/1 黒色土 南部浮石混入、褐色土混入
 第5層 10YR2/1 黒色土 南部浮石混入、褐色土混入
 第6層 10YR5/6 黄褐色土 黄褐色土・明黄褐色土ブロック状に混入
 第7層 10YR6/6 黄褐色土 褐色土ブロック状に混入
 第8層 10YR2/2 黒褐色土 南部浮石混入、褐色土混入
 第9層 10YR4/6 黒色土 黒色土・黄褐色土・明黄褐色土ブロック状に混入



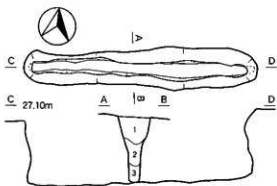
第3号溝状土坑埋藏土

- 第1層 10YR1.7/1 黒色土 南部浮石混入
 第2層 10YR3/4 暗褐色土 砂の層状土
 第3層 10YR3/2 黄褐色土



第4号溝状土坑埋藏土

- 第1層 10YR2/1 黒色土 南部浮石混入
 第2層 10YR2/2 黒褐色土 褐色土・暗褐色土混入
 第3層 10YR1.7/1 黒色土 黄褐色土・暗褐色土混入

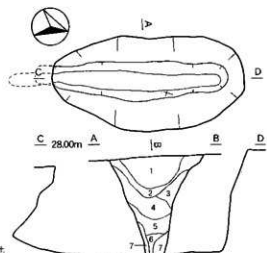


第5号溝状土坑埋藏土

- 第1層 10YR1.7/1 黒色土 南部浮石混入
 第2層 10YR3/4 暗褐色土 南部浮石混入、黄褐色土混入
 第3層 10YR1.7/1 黒色土

第6号溝状土坑埋藏土

- 第1層 10YR1.7/1 黒色土
 第2層 10YR2/1 黒色土
 第3層 10YR2/1 黒色土と10YR2/3黄褐色土混合 南部浮石混入
 第4層 10YR2/1 黒色土 南部浮石混入
 第5層 10YR2/2 黒褐色土 南部浮石混入、黄褐色土混入
 第6層 10YR5/6 黄褐色土
 第7層 10YR1.7/1 黒色土



(S=1/60)
 0 2m

図29 溝状土坑(1)

[断面形・底面] 断面形状は長軸方向が袋状、単軸方向がU字状である。底面は平坦に近い。

[堆積土] 黒色土を主体とし、3層に分かれる。堆積状況は自然堆積である。 (平山)

第5号溝状土坑 (図29)

[位置・確認] 調査I区中央北寄りのIH・II-29グリッドで、標高27m程の平坦地に位置している。第IV層を精査中に黒色土の細長いプランとして確認した。

[規模] 開口部規模370cm×53cm、底面規模は358cm×16cmで、深さ123cmである。

[長軸方向] 等高線に対し斜交し、N-82.4°-Eである。

[断面形・底面] 断面形状は長軸方向が緩やかな袋状で、単軸方向はY字状である。底面にはやや凹凸がみられる。

[堆積土] 黒色土を主体とし、3層に分かれる。堆積状況は自然堆積である。 (平山)

第6号溝状土坑 (図29)

[位置・確認] 調査区東端の平坦地、標高27.5m程のIO・IP-30・31グリッドに位置する。第IV層を精査中に黒色土の細長いプランとして確認した。

[規模] 開口部規模303cm×147cm、底面規模は333cm×30cmで、深さ168cmである。

[長軸方向] 等高線に対し斜交し、N-19°-Wである。

[断面形・底面] 長軸方向の断面形状は一方が袋状、もう一方が逆台形状で、単軸方向の断面形状はV字状である。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 黒色土を主体とし、7層に分かれる。堆積状況は自然堆積である。 (平山)

第7号溝状土坑 (図30)

[位置・確認] 調査区東端の平坦地、標高27.5m程のIP・IQ-29グリッドに位置する。第IV層を精査中に黒色土の細長いプランとして確認した。

[規模] 開口部規模368cm×60cm、底面規模は342cm×25cmで、深さ136cmである。

[長軸方向] 等高線に対し斜交し、N-51°-Wである。

[断面形・底面] 断面形状は長軸方向が逆台形状、単軸方向がU字状である。底面は平坦である。

[堆積土] 黒色土で、混入物により4層に分層される。堆積状況は自然堆積である。 (平山)

第8号溝状土坑 (図30)

[位置・確認] 調査I区中央の平坦地、標高26.5m程のIK-26・27グリッドに位置する。第IV層を精査中に黒色土の細長いプランとして確認した。

[規模] 開口部規模397cm×155cm、底面規模は398cm×26cmで、深さ163cmである。

[長軸方向] 等高線に対し直交し、N-23.4°-Eである。

[断面形・底面] 断面形状は長軸方向が袋状で、単軸方向はY字状である。底面は平坦である。

[堆積土] 黒色土を主体とし、9層に分かれる。堆積状況は自然堆積である。 (平山)

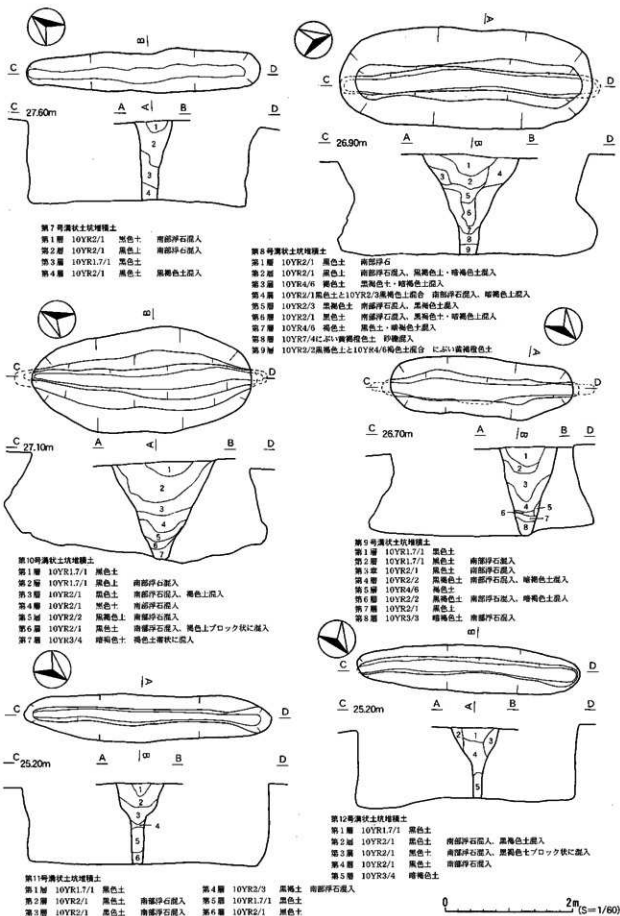


図30 溝状土坑(2)

第9号溝状土坑（図30）

〔位置・確認〕 調査区東端の平坦地、標高26.5m程のIP-26グリッドに位置する。第IV層を精査中に黒色土の細長いプランとして確認した。

〔規模〕 開口部規模288cm×94cm、底面規模は353cm×33cmで、深さ145cmである。

〔長軸方向〕 等高線に対し直交し、N-46°-Wである。

〔断面形・底面〕 断面形状は長軸方向が袋状、単軸方向はV字状である。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕 黒色土を主体とし、8層に分かれる。堆積状況は自然堆積である。（平山）

第10号溝状土坑（図30）

〔位置・確認〕 調査I区中央付近の平坦地、標高27m程のIM-27・28グリッドに位置する。第20号土坑と重複し、本遺構の方が新しい。第IV層を精査中に黒色土の細長いプランとして確認した。

〔規模〕 開口部規模346cm×160cm、底面規模は378cm×21cmで、深さ172cmである。

〔長軸方向〕 等高線に対し直交し、N-25°-Wである。

〔断面形・底面〕 断面形状は長軸方向が袋状で、単軸方向はV字状である。底面に凹凸がみられる。

〔堆積土〕 黒色土を主体とし、7層に分かれる。堆積状況は自然堆積である。（平山）

第11号溝状土坑（図30）

〔位置・確認〕 調査区南東の平坦地、標高24.5m程のIL-17・18グリッドに位置する。第IV層を精査中に黒色土の細長いプランとして確認した。

〔規模〕 開口部規模390cm×72cm、底面規模は360cm×16cmで、深さ131cmである。

〔長軸方向〕 等高線に対し斜交し、N-39.3°-Wである。

〔断面形・底面〕 断面形状は長軸方向が逆台形状、単軸方向はY字状である。底面は平坦である。

〔堆積土〕 黒色土で、混入物により6層に分かれる。堆積状況は自然堆積である。（平山）

第12号溝状土坑（図30）

〔位置・確認〕 調査区南東のIN-17・18及びIM-18グリッドで、第11号溝状土坑の東側に位置している。標高24.5m程の平坦地で、第IV層を精査中に黒色土の細長いプランとして確認した。

〔規模〕 開口部規模351cm×74cm、底面規模は344cm×14cmで、深さ133cmである。

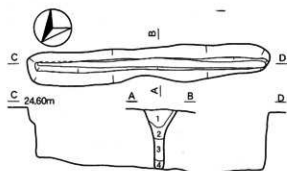
〔長軸方向〕 等高線に対し斜交し、N-55°-Wである。

〔断面形・底面〕 長軸方向の断面形状は、片側がやや袋状に張り出した逆台形状で、単軸方向の断面形状はY字状である。底面はやや凹凸がみられる。

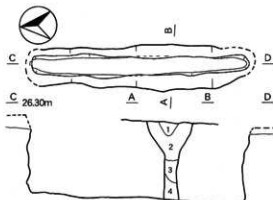
〔堆積土〕 黒色土を主体とし、5層に分かれる。堆積状況は自然堆積である。堆積土中から縄文土器が出土している。（図31-1・2）（平山）

第13号溝状土坑（図31）

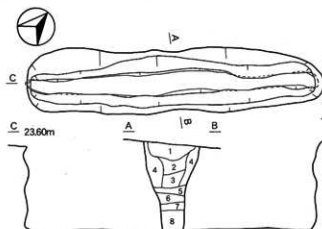
〔位置・確認〕 調査区南東の平坦地、標高24.5m程のIM-15グリッドに位置する。第IV層を精査中に黒色土の細長いプランとして確認した。



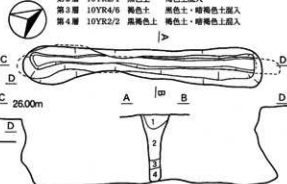
- 第13号溝状土坑埋積土
 第1層 10YR1.7/1 黒色土 南部浮石
 第2層 10YR2/1 黒色土
 第3層 10YR2/1 黒色土 南部浮石混入、褐色土混入
 第4層 10YR1.7/1 黒色土 南部浮石



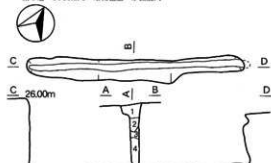
- 第14号溝状土坑埋積土
 第1層 10YR2/1 黒色土 黒褐色土混入
 第2層 10YR2/1 黒色土 褐色土混入
 第3層 10YR4/6 褐色土 黒色土・暗褐色土混入
 第4層 10YR2/2 黒褐色土 褐色土・暗褐色土混入



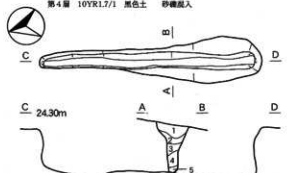
- 第15号溝状土坑埋積土
 第1層 10YR2/1 黒色土 黒褐色土混入
 第2層 10YR2/3 黒褐色土 南部浮石混入、黒色土・暗褐色土混入
 第3層 10YR2/3 黒褐色土 黒褐色土・褐色土混入
 第4層 10YR4/6 褐色土 南部浮石混入、明黄色土・黒褐色土混入
 第5層 10YR3/4 暗褐色土
 第6層 10YR2/1 黒色土
 第7層 10YR3/4 暗褐色土 砂礫混入
 第8層 10YR3/3 暗褐色土 砂礫混入



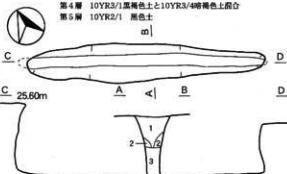
- 第16号溝状土坑埋積土
 第1層 10YR2/1 黒色土 南部浮石混入、暗褐色土混入
 第2層 10YR2/2 黒褐色土 南部浮石混入、褐色土混入
 第3層 10YR2/1 黒色土
 第4層 10YR1.7/1 黒色土 砂礫混入



- 第17号溝状土坑埋積土
 第1層 10YR1.7/1 黒色土
 第2層 10YR2/2 黒褐色土 南部浮石混入
 第3層 10YR2/3 黒褐色土と10YR4/6 褐色土混入
 第4層 10YR3/3 暗褐色土 砂礫混入



- 第18号溝状土坑埋積土
 第1層 10YR2/1 黒色土 線跡に褐色土混入
 第2層 10YR3/4 暗褐色土と10YR4/6 褐色土混入
 第3層 10YR2/3 黒褐色土
 第4層 10YR3/3 黒褐色土と10YR3/4 暗褐色土混入
 第5層 10YR2/1 黒色土



- 第19号溝状土坑埋積土
 第1層 10YR2/1 黒色土
 第2層 10YR2/2 黒褐色土 暗褐色土ブロック状に混入
 第3層 10YR1.7/1 黒色土



第12号溝状土坑出土遺物

- 第20号溝状土坑埋積土
 第1層 10YR2/1 黒色土 南部浮石混入
 第2層 10YR2/2 黒褐色土
 第3層 10YR1.7/1 黒色土

0 10cm

0 2m (S=1/80)

図31 溝状土坑(3)・出土遺物

〔規模〕 開口部規模383cm×44cm、底面規模は360cm×14cmで、深さ106cmである。

〔長軸方向〕 等高線に対し斜交し、N-48.5°-Eである。

〔断面形・底面〕 断面形状は長軸方向は逆台形状で、単軸方向はY字状である。底面には凹凸がみられる。

〔堆積土〕 黒色土で、混入物によって4層に分かれる。堆積状況は自然堆積である。 (平山)

第14号溝状土坑 (図31)

〔位置・確認〕 調査Ⅱ区中央の平坦地、標高25.5m程のIK-23グリッドに位置する。第V層を精査中に黒色土の細長いプランとして確認した。

〔規模〕 攪乱とトレンチによって、端部が削平されてしまったが、開口部は推定で363cm×67cm、底面規模は342cm×31cmで、深さ131cmである。

〔長軸方向〕 等高線に対し斜交し、N-5.5°-Eである。

〔断面形・底面〕 長軸方向の断面形状は片側がやや袋状に張り出した逆台形状で、単軸方向の断面形状はY字状である。底面は平坦に近い。

〔堆積土〕 黒色土を主体とし、4層に分かれる。堆積状況は自然堆積である。 (平山)

第15号溝状土坑 (図31)

〔位置・確認〕 調査区南端の平坦地、標高23.5m程のII・IJ-9・10グリッドに位置する。第V層を精査中に黒色土の細長いプランとして確認した。

〔規模〕 開口部規模457cm×91cm、底面規模は457cm×31cmで、深さ145cmである。

〔長軸方向〕 等高線に対し斜交し、N-50°-Eである。

〔断面形・底面〕 断面形状は長軸方向が歪んだ箱形で、単軸方向はY字状である。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕 黒色土を主体とし、8層に分かれる。堆積状況は自然堆積である。 (平山)

第16号溝状土坑 (図31)

〔位置・確認〕 調査Ⅱ区中央の平坦地、標高25.5m程のIG・IH-22グリッドに位置する。第V層を精査中に黒色土の細長いプランとして確認した。

〔規模〕 開口部規模377cm×44cm、底面規模は352cm×12cmで、深さ127cmである。

〔長軸方向〕 等高線に対し直交し、N-39°-Eである。

〔断面形・底面〕 長軸方向の断面形状は一方が袋状、もう一方が逆台形状で、単軸方向の断面形状はU字状である。底面にはやや凹凸がみられる。

〔堆積土〕 4層に分かれる。黒色土を主体とする。堆積状況は自然堆積である。 (平山)

第17号溝状土坑 (図31)

〔位置・確認〕 調査区中央のIK-23とIL-23・24グリッドに位置する。第4号竪穴住居跡と重複し、本遺構の方が古い。標高25.5m程の平坦地で、第V層を精査中に黒色土の細長いプランと

して確認した。

[規模] 開口部規模345cm×33cm、底面規模は351cm×11cmで、深さ115cmである。

[長軸方向] 等高線に対し斜交し、N-63.4°-Eである。

[断面形・底面] 長軸方向の断面形状一方が袋状、もう一方が逆台形状で、単軸方向の断面形状はU字状である。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分かれる。黒色土を主体とする層であり、堆積状況は自然堆積である。(平山)

第19号溝状土坑(図31)

[位置・確認] 調査区南東の緩斜面地、標高24~24.5mのIP-15・16グリッドに位置する。第IV層を精査中に黒色土の細長いプランとして確認した。

[規模] 開口部規模351cm×40cm、底面規模は340cm×10cmで、深さ94cmである。

[長軸方向] 斜面に対し斜交し、N-15.5°-Eである。

[断面形・底面] 長軸方向の断面形状は袋状で、単軸方向の断面形状はV字状である。底面には緩やかな凹凸がみられる。

[堆積土] 5層に分かれる。黒色土を主体とする層であり、堆積状況は自然堆積である。(平山)

第20号溝状土坑(図31)

[位置・確認] 調査区東端のIP・IQ-22グリッド、標高25m程の平坦地に位置している。第IV層を精査中に黒色土の細長いプランとして確認した。

[規模] 開口部規模377cm×58cm、底面規模は394cm×18cmで、深さ117cmである。

[長軸方向] 等高線に対し斜交し、N-60°-Wである。

[断面形・底面] 断面形状は長軸方向が袋状・単軸方向がV字状である。底面は平坦である。

[堆積土] 土色は黒色で、浮石や暗褐色土の混入度合いによって、3層に分かれる。これらは壁の崩落によって混入したものと思われる。堆積状況は自然堆積である。(平山)

第4節 土器埋設遺構 (図-32)

【位置・確認】 I区I O-26グリッドに位置する。第IV層面で遺構検出中に土器が出土し、土器周辺のプランから土器埋設遺構とした。

【平面形・規模】 掘り方の形状は40×55cmの楕円形で、検出面からの深さは12cmである。底面は円形で、断面はボウル状である。

【堆積土】 掘り方の堆積土は黒色土の単層である。

【出土遺物】 深鉢形土器の胴部下半から底部にかけての破片である。検出面で、底部をやや斜めにし横位に置かれていたようである。周囲からは接合する破片は出土しておらず、土器上半部は耕作等により破壊散逸したと思われる。土器は、単節LRが斜位に施文される。また、土器の破片と共に、基部が無で肩状の凸基有茎の石炭が出土している。

【小結】 出土土器から、縄文時代後期頃に比定される。

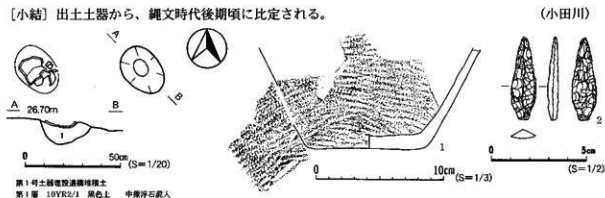


図32 第1号土器埋設

第5節 円形周溝・溝跡

円形周溝を含め溝跡は、2ヶ年の調査で第4号までの遺構番号を付した。しかし、平成10年度に検出調査した第1号溝跡(堀跡)は、11年度の調査により道跡と判明したため、後述する。

第2号 円形周溝 (図33)

【位置・確認】 I区I J-30グリッドに位置する。第II層中で黒色土の環状プランとして確認した。表土層が比較的薄く、遺構の掘り込みも浅かったため遺構の南側を削平してしまった。

【平面形・規模】 溝幅は35～50cmで、深さは検出面から5～20cmである。削平により明確ではないが、直径は4m程で全周していたものと思われる。底面は平坦であるが部分的に傾斜している。

【堆積土】 灰白色岩粒が混入する黒色土と褐色土が混合する単層である。

【小結】 周溝の内部からは何も検出されず、出土遺物もないため詳細な時期は不明であるが、奈良ないし平安時代のものと思われる。

(小田川)

第3号 円形周溝 (図33)

【位置・確認】 I区南西端I F-12・13グリッドに跨って位置する。第II層面に黒褐色土の環状プラン

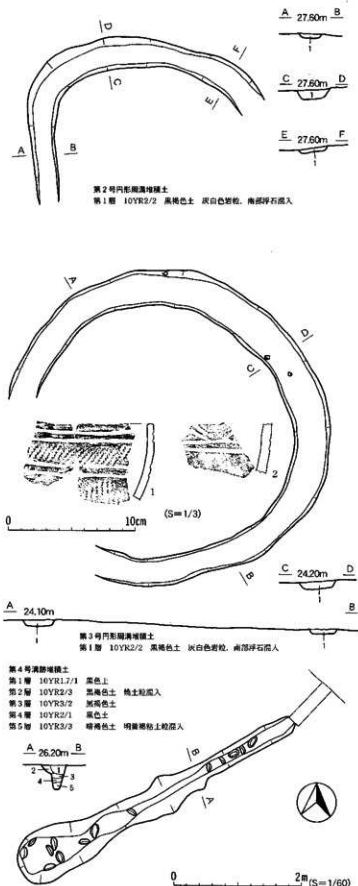


図33 円形周溝、溝跡・出土遺物

ンとして確認した。遺構の南西側を一部削平してしまった。

[平面形・規模] 溝幅は40~60cmで、深さは検出面から5~14cmである。直径は5m程で全周していたものと思われる。底面は平坦であるが、部分的に傾斜している。

[堆積土] 灰白色岩粒が混入する黒色土と褐色土が混合する単層である。

[遺物] 周溝内から土師器の細片1点と、図示した弥生土器(1)と縄文時代後期の十腰内I式土器(2)が出土した。

[小結] 周溝の内部から何も検出されず、出土遺物もないため詳細な時期は不明であるが、奈良ないし平安時代のもと思われる。(小田川)

第4号 溝跡(図33)

[位置・確認] I区1H-23・24グリッドに跨って位置する。第IVb層で黒色土のプランで確認した。第6号竪穴住居跡南隅に接するようにある。

[平面形・規模] 長さは約5mである。幅は南西端部が80cmと膨らみ、北東端部は30cmである。開口部上端は直線ではなくてこぼこであり、底面も起伏がある。また、両端部付近の底面には半月状の掘り込みが十数カ所みられる。深さは35~53cmある。

[堆積土] 黒褐色土を主体としており5層に分けられる。部分的に焼土粒、炭化物粒を混入する。

[小結] 出土遺物はなく時期は不明であるが、第6号竪穴住居跡に関連した遺構の可能性がある。(小田川)

第6節 道跡 (図34)

【位置・確認】調査区北端の緩斜面地である標高30～33.5mのⅡD-62～ⅡM-67グリッドに位置している。遺構西側は、平成10年度に表土下で黒～暗褐色土の帯状プランとして検出・精査され、東側は平成11年度に精査された。第3号土坑と重複し、本遺構の方が新しい。

【規模】斜面に直交して北東～南西向に延び、市道一日市～高岩線に平行している。確認された長さは40.4m、幅4.9m、深き最大1.3mである。断面は概ね浅い皿形であるが、西側のセクションでは逆台形に近い形状をしている。底面は東側は平坦に近いが、西側は流水によってできた凹凸が激しい。

【堆積土】黒～黒褐色土を主体とし20層に分けられる。第7層は黒～褐～にぶい黄褐色土の混合土で、すべての土層断面で確認された。東側では壁の外側にも堆積していることから、整地層と思われる。シルト質の第6・9層や、砂が混入する第3・4・8・20層は流水による堆積層と考えられる。

【出土遺物】堆積土中から寛永通寶が1点出土した。

【小結】遺構西側の特徴から、当初は城館の堀跡と考えたが、周辺に城館が存在しないことや、関連遺構・遺物が検出されなかったこと、また、形状や堆積土などから、その可能性は低い。明確な硬化面は確認されなかったものの、道跡としておきたい。年代は近代～現代と思われる。(平山)

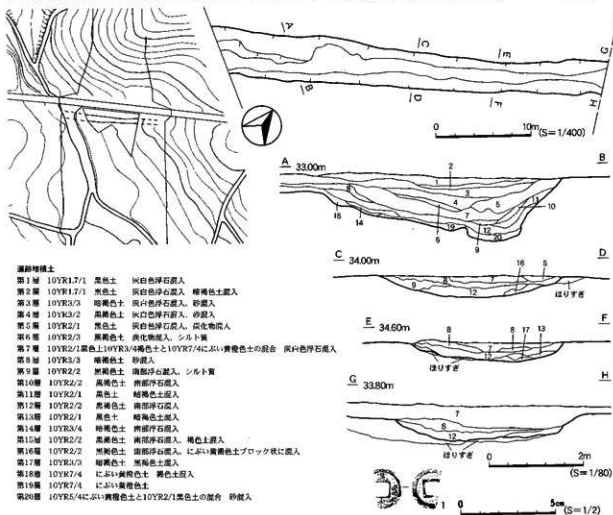


図34 道跡・出土遺物

第4章 遺構外出土土器

第1節 土器

平成10・11年の調査で出土した遺構外の土器は、土師器1,990点、縄文・弥生土器400点である。出土層位は第I層～IV層までで、第I・II層中のものは各時期の土器が土師器と混在している。出土状況は、I区遺構配置図に示した等高線の25mラインより南側の沼地際からの出土数が多い。全体に細片が多く図示できるものは少ないが、本節では縄文・弥生土器を取り上げ各時代ごとに分けて記述する。

第I群—縄文時代早期の土器

a類—吹切沢式に相当するもので1点出土している(図35-1)。口縁部破片で、口端には斜位方向から刻みが施される。外面は貝殻腹縁押し引き文が施文される。胎土には凝灰岩粒を多く含む。

b類—早期土器の胴部片で33点出土している(図35-2～11)。無文破片で、ほとんどが胴部下半のものと思われる。所属型式は特定できないが、吹切沢式からムシリI式までの範疇で捉えられるものと思われる。外面のナデ調整は丁寧であるが、内面は調整されていないものが多い。胎土には砂粒を多量に含む。第29A号土坑出土土器も本類に含まれる。

c類—ムシリI式に相当するもので3点出土している(図35-12～14)。胴部の細片で、斜位および平行沈線が施文される。内面の調整は無く、胎土はb類とほぼ同じである。

d類—早稲田5類に相当するもので26点出土している(図35-15～25)。胎土には繊維を多量に混入する。同図15～17は口縁部片であり、15は0段多条LRが口端まで施文されている。17はLとRの燃糸圧痕が施文されている。18～23は同一個体と思われ、Lの絡条体が施文されている。24はLRとRL2種の原体で施文されている。

第II群—縄文時代後期の土器

出土数はいくつも多いが全体形状を把握できるものはない。小破片ばかりで判然としないが、およそ十腰内I式とその直前型式の範疇におさまる土器である。

a類—地文縄文に沈線で文様が施文されるもの(図35-26～34、41～46)。同図26～34、41～43は地文にL燃糸施文後に1～3条の横位の沈線が施される。37は無文の緩い波状口縁になる。44は地文にRL縄文施文後、縦位2条の沈線と連続短沈線が斜位に施文されている。46は割縁が面取りされており透かしの入った台部の破片と判断した。

b類—多条沈線により文様が表出されるもの(図35-38、62～64)。鋸歯状工具により施文される。

c類—沈線により文様が表出されるもの(図35-39、47～61)。無文に横位のほか楕円形文が施文されているもの。沈線の幅は2～5mmで、47～49は比較的深い。39は口端に円形の刺突が施されている。

d類—陸帯が貼付されるもの(図35-40)。頸部の破片と思われ、細い陸帯に円形刺突が施されている。

図35-35～37は、無文の口縁部片で上記いずれかの類に属すると思われる。

第III群—縄文時代粗製土器

特徴的文様がない地文のみのもの、施文原体が広い時期にわたるものを一括した(図36-9～25)。

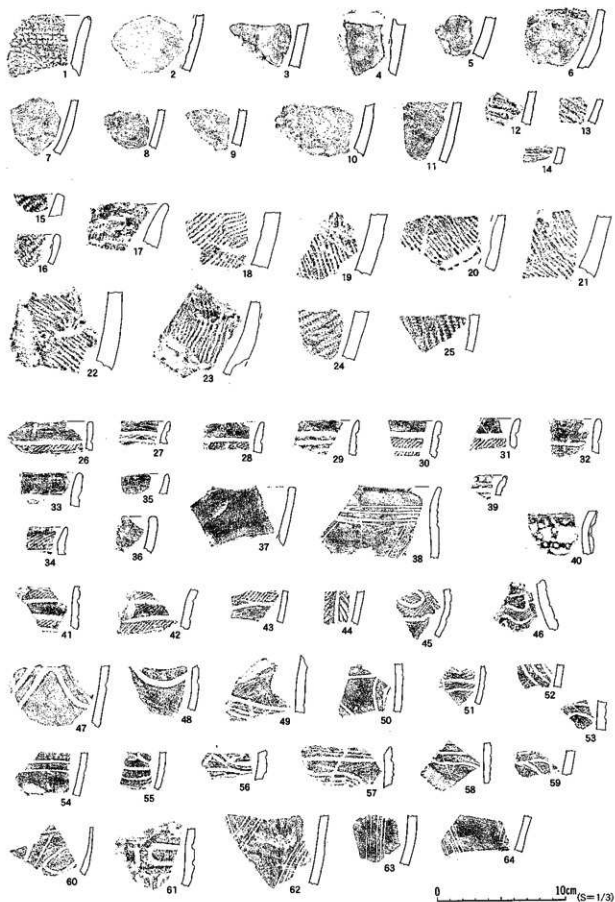


図35 遺構外出土縄文土器 (1)

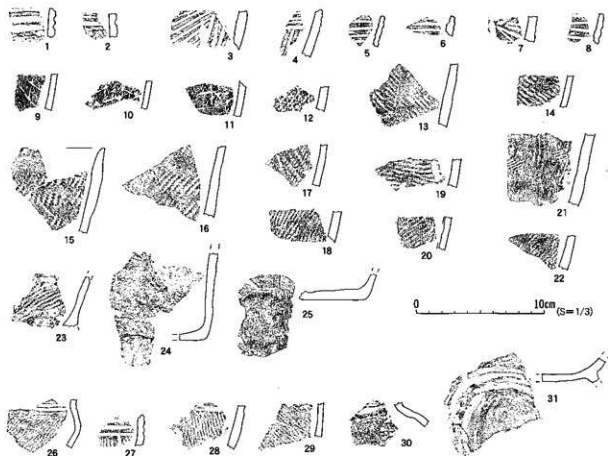


図36 遺構外出土縄文土器(2)・弥生土器

同図9～12は網目状燃糸文が施文されるもので、10と11は施文がくずれている。12は地文縄文施文後に燃糸文が施文されている。13と14はLの燃糸が施文されている。同図15～23は地文縄文のみの破片である。15と16は同一個体片でLR縄文が施文されている。19はRL縄文の斜位回転である。23～25は底部および底部付近の破片で、23は底部が張り出す形状である。

第IV群—所属時期不明な土器

無文地に平行及び斜行する沈線が施文されるもので8点ある(図36-1～8)。すべて胴部ないしは口縁部付近の破片と思われる。図36-1と2は、幅5mm程、断面V字状の深い平行沈線が施文される。胎土・焼成や質感は第II群に酷似するが、文様に類似性を見いだせない。第V群に属する可能性もある。同図3～8は、幅3mm断面U字状の浅い沈線が比較的密に施文される。胎土には砂粒を混入し、表面の色調は異なるものの、内面と胎土の質感は、第I群b・c類に似る。第I群c類に属する可能性もある。

第V群—弥生時代の土器

頸部から胴部および底部破片で全体形の判るものはない(図36-26～31)。同図26は小型の浅鉢になるものである。口縁部に2条の沈線が施され、屈曲する胴部には節の細かいLR縄文が施文されている。27と28は沈線の下部にLの燃糸が縦走施文されている。30は壺の頸部である。31は台付き深鉢形土器で、台の接合部に沈線が巡る。およそ砂沢式期に比定されるものと思われる。

(小田川)

第2節 石器

本調査で出土した石器類は、遺構内及び遺構外をあわせて総数28点である。このほかに、剥片・破砕片21点が出土している。器種は、石鏃・石錐・不定形石器・打製石斧・磨製石斧・敲磨石・凹石・台石がある。以下に各器種ごとに分けて記述するが、点数が少ないこともあり、古代の竪穴住居跡出土の礫石器類についてもまとめて記述する。

石 鏃

遺構内から3点、遺構外から2点出土している。有茎と無茎があり各形態は異なる。

凹基無茎鏃（図37-1） 表採品である。基部の作りは大まかで、基部再調整品の可能性もある。尖頭部の作りはやや鈍角である。

平基無茎鏃（図9-2） 第2号竪穴住居跡内土坑堆積土中から出土している。

凸基有茎鏃（図37-2、図16-14、図32-2） 遺構外から1点、遺構内から2点出土している。図37-2は茎部と先端を僅かに欠失している。基部は欠損し平らであるが、もともとは茎がT字に突出していたものと思われる。図16-14（第6号竪穴住居跡堆積土内出土）は先端を僅かに欠失しており基部は撫で肩状で、鏃身の約2分の1の長さの茎が作出されている。図32-2（埋設土器遺構出土）は、土器とともに出土している。これも先端を僅かに欠失している。基部は僅かに抉られる程度で形態は柳葉形に近く、茎部は短い破損している可能性もある。

石 錐

遺構外から2点出土している。

図37-3は、やや厚みのある縦長剥片を素材とし、急角度な背面調整で末端を断面三角形の錐部を作出している。錐部背面の剥離稜線は摩耗している。同図4は錐部を欠失する。表皮を残す剥片を素材とし、剥片端部に両面調整を施し刃部を作出している。打点側の調整はおおまかで、ある程度形状を整えるだけのものと思われる。

楔形石器（図37-5）

表採品が1点ある。形状は断面菱形の四辺形である。器体の上下両端の潰れはないが、階段状の微細な剥離がみられる。

不定形石器（図37-6～13、図28-11）

上記の石器以外で、削器及び掻器として使われたと思われるものである。遺構内1点、遺構外から8点出土している。不定形石器のほとんどが、素材剥片の周縁及び縁辺に不規則な調整加工を施すもので、特に形状は意識されず、機能に適した刃部の作出だけを目的としているようである。個々の形状は素材剥片の形状のまま多様であり、打点ないし打瘤を残す小型の剥片が用いられている。剥離調整の状態から次のように分けられる。

片面の周縁が調整されるもの（図37-6） 側縁の調整は急角度で、剥片末端を尖らせるように調整されている。

片面の周縁と対する裏面の一部に調整されるもの（図37-7） 側縁が錯向剥離である。

片面の側縁部が調整されるもの（図37-9・10、図28-11）

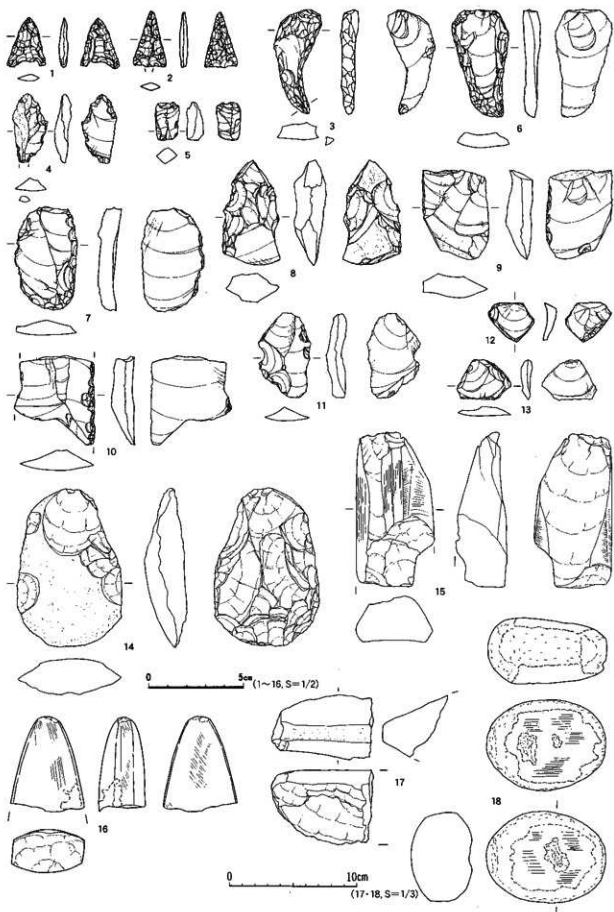


圖37 遺構外出土石器

片面の一部に、微細な極浅形剥離調整されるもの(図37-11~13) 同図12・13は、打瘤の大きさから剥片を折り取り微細な調整が施されている可能性がある。

両面の側縁が調整されるもの(図37-8) 粗い調整である。

打製石斧(図37-14)

遺構外から1点出土している。腹面の側縁を主体に剥離が加えられており、背面は厚さを調整するためか、打点側にも調整が加えられている。

磨製石斧(図37-15・16、図11-3)

遺構内から1点、遺構外から2点出土している。

図37-15は擦り切り技法で作られている。刃部および基部を欠失する胴部破片で、3条の擦り切り溝の痕跡が残る。同図16は基部破片で研磨は丁寧である。図11-3(第4号竪穴住居跡床面出土)は基部を欠失するもので、剥離と敲打痕が研磨で取りきれないまま残されている。

磨石(図37-17)

礫の一侧縁に磨り面をもつものである。破損しているが断面形状から三角柱状磨石と思われる。

敲石(図37-18、図23-7)

図37-18円は礫を用いた複合機能をもつ石器である。使用痕は、磨りと敲打痕、敲打による浅い窪みである。使用痕の状態から磨石から敲石に転用されている。図23-7(第10号竪穴住居跡床面出土)は一器面の中央部に敲打による浅い窪みをもつ。

台石(図14-7、図16-13、図23-8)

すべて古代の竪穴住居跡床面から出土しており、敲打痕跡をもつものが3点、磨りの痕跡をもつものが1点ある。図14-7(第5号竪穴住居跡床面出土)は、礫の曲面部に敲打による浅い窪みがみられる。図16-13(第6号竪穴住居跡床面出土)は、器面の中央部に浅く潰れ変色した部分がみられる。図23-8(第10号竪穴住居跡床面出土)は、扁平な礫の器面に磨りの痕跡がみられる。住居跡内接合品で、全体が被熱された結果破損したものとと思われる。

(小田川)

第5章 まとめ

第1節 古代の土器について

I 土師器の器種と分類 (図38・39)

本遺跡から出土した土師器・須恵器は段ボール5箱分で、このうち、図化できたのは53点である。土師器の器種には坏・手捏ね土器・甕・小型甕・球胴甕・鉢・壺が、須恵器には坏・甕があり、竪穴住居跡から出土したものがほとんどである。遺構外から出土した土師器は細片が多く、ほとんど接合しなかった。これは、本来竪穴住居跡内にあったものが、畑の耕作機械(トレンチャー)で攪乱されたためと思われる。以下、土師器を器種ごとに分類していく。須恵器の出土点数は2点なので、個別の記述は省略する。

【坏】ほとんどの竪穴住居跡から出土し、出土量が多い器種である。器形と調整からA～D類の4つに分けられる

A類：丸底で、成形にロクロを使用していないもの。内面ミガキ調整で黒色処理される。胴部外面の中位に段が作られている。

B類：平底で、成形にロクロを使用していないもの。内外面はミガキ調整で、内面黒色処理される。

C類：平底で、成形にロクロを使用しているもの。内面調整と器形によって、更に細分される。

I類：内面調整がミガキで、黒色処理されるもの。いわゆる内黒のものである。

a類：器高が高く(5.5cm以上)、底径が小さく(5.0cm以下)、口縁部が端反るもの。

b類：器高が低く(5.5cm未満)、底径が小さく(5.0cm未満)、口縁部が直立するもの。

c類：器高が低く、底径が大きく、口縁部が外反するもの。

II類：内面調整が施されず、ロクロ成形のみのもの。

a類：器高が高く、底径が小さく、口縁部が端反るもの。

b類：器高が低く、底径が小さく、口縁部が外反するもの。

c類：器高が低く、底径が大きく、口縁部が外反するもの。

d類：器高が低く、底径が大きく、口縁部が端反るもの。

e類：器高が低く、底径が大きく、口縁部が直立するもの。胎土・器厚が他類と異なる。

D類：平底で、外面がケズリ調整のもので、器形や調整が甕の底部に近いもの。

なお、実測図中の底部調整痕は、底部周縁を軽く整形したものである。底径が極端に小さく底部周辺に僅かな稜が観察されるものや、底部周縁に砂粒の移動が見られ糸切り後の粘土のみ出しが見られないものに関しては、底部切り離し後に調整を加えていると判断し、その範囲と方向を図化した。

C II a類に多く観察されるほか、C I a・C I b類にも確認される。

【手捏ね土器】第1号竪穴住居跡から1点出土した。底部は丸底である。口縁部は胴部中位から直立して立ち上がる。平口縁で、椀型の器形である。

【甕】坏に次いで出土量が多かったが、器形全体がわかるまで復元できたものは少ない。成形によってA・B類の2つに分けられる。

A類：成形にロクロを使用しないもの

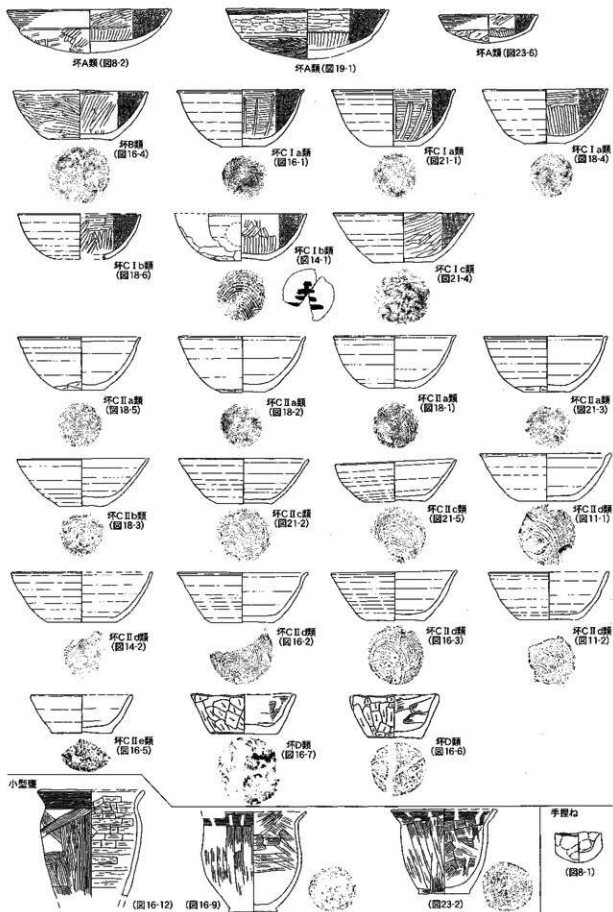


図38 出土土師器集成 (1)

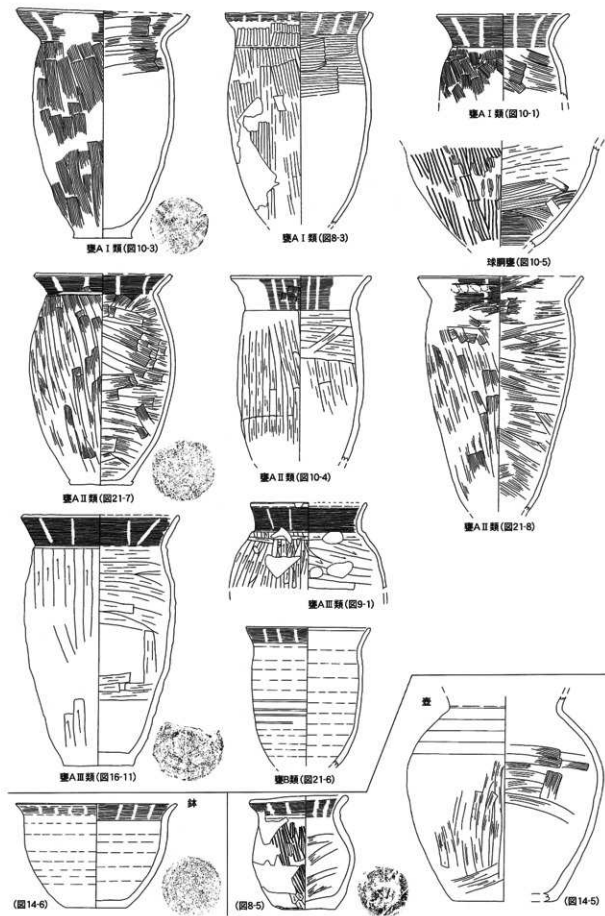


圖39 出土土師器集成(2)

B類：成形にロクロを使用するもの

また、A類は主な外面調整によって3類に分けられる。

I類：ハケメ主体のもの

II類：ナデ主体のもの

III類：ケズリ主体のもの

それぞれに、最大径が口縁部や胴部にあるものや、口縁部径と胴部径がほぼ同じで寸胴のものがある。

【小型甕】器高がおよそ15cm以下になるものをまとめた。外面調整の主体がハケメのものとなデのものがある。

【球胴甕】胴部下半の破片が第3号竪穴住居跡から1点出土している。

【鉢】第5号竪穴住居跡から、ロクロ成形のものが1点出土した。

【壺】2点出土した。成形にロクロを使用するものと使用しないものが各1点で、ロクロを使用するものは、焼成不良の須恵器である可能性もある。

II 出土土器の組み合わせ

A群：坏A類を含む一群で、第1・8・10号竪穴住居跡が該当する。第1号竪穴住居跡では甕A I・II類と壺・手捏ね土器が、第10号竪穴住居跡では甕A IIと小型甕が共伴し、ナデ主体の甕A II類が優勢でケズリ調整の甕A III類を含まない。坏が出土しなかったものの、第3号竪穴住居跡の床面出土の甕(図10-5)が、第10号竪穴住居跡堆積土出土の破片と遺構間接合していること、共伴する土器に甕A III類が含まれていないことから、第3号竪穴住居跡も同群に収まるものと思われる。これには球胴甕が伴っている。

B群：主に坏C類を含む一群で、第4・5・6・7・9号竪穴住居跡が該当する。第5号竪穴住居跡では甕A II類と鉢・壺が、第6号竪穴住居跡では甕A I・A III・B類と小型甕が、第9号竪穴住居跡では甕A II・B類が共伴し、ケズリ主体の甕A III類やロクロ整形の甕B類・壺・鉢が含まれるのが特徴である。また、須恵器の坏が第5号竪穴住居跡から、甕破片が第7号竪穴住居跡から1点づつ出土している。第4・7号竪穴住居跡からは、良好な甕の資料が出土しなかった。坏は各住居跡から複数出土している。類型は、第4号竪穴住居跡がC II d類、第5号竪穴住居跡がC I b・C II d類、第6号竪穴住居跡がB・C I a・C II d・C II e・D類、第7号竪穴住居跡がC I a/C II a・C I b/C II b類、第9号竪穴住居跡がC I a/C II a・C I c/C II c類となっており、口縁部が端反るもの(C I a/C II a類)と直線的に外反するものが組になり、それぞれに内黒と非内黒のものが揃うようになっている。なお、遺構間接合が第2・5・6・9号竪穴住居跡で認められている。第5号竪穴住居跡の壺(図14-5)が第2・6号竪穴住居跡出土の破片と、第6号竪穴住居跡の甕2個(図16-3・12)が第9号竪穴住居跡の破片と接合している。遺物はいずれも床面やカマドから出土していることや、カマドの煙道の向きが同じであることなどから、これらの住居跡は同時存在が考えられ、坏が出土しなかった第2号竪穴住居跡も本群に含まれると思われる。

墨書土器は実測図を載せなかったが第5号竪穴住居跡から1点出土している。これは、坏の底部外面に横4本・縦1本の線が組み合わせられたもので、横線の上2本は太く短く、下2本は細く長い。また、縦線は横線から突出しない。同様の墨書は、八戸市和野前山遺跡から出土した坏にもみられる。これは、遺構外から出土したものであるが、当遺跡の年代は9世紀初頭と考えられることから、この

類例もそれに近い年代のものと思われる。

Ⅲ 年代

A群土器中の坏A類は、体部外面中位に段があることなどから、宇部則保氏の第Ⅲ群土器に相当し、8世紀前半の時期が考えられる。本遺跡周辺では八戸市人首沢遺跡や酒美平遺跡と同時期と思われる。

B群は、第5号竪穴住居跡から須恵器坏が、第7号竪穴住居跡から須恵器甕の破片が出土している。この坏は口縁部が端反り、土師器坏のCⅡd類に類似しているが、欠損により底部の切り離し技法がわからないため、これから年代を推定することは困難である。甕破片も大甕の胴部下半部と思われるが、肉眼観察だけでは産地・年代を求められなかった。蛍光X線による胎土分析によって、須恵器の産地を同定し、窯跡の操業年代の推定を試みたところ、2つは同一産地の製品と推定されたが、産地や年代は不明であった。そこで、遺物の主体となる坏C類について年代を考察する。内面や底部の調整技法からⅠ類→Ⅱ類、Ⅱ類の中ではa→b～d類の順に新しい要素が見られるが、共存関係からこれらは同時期のものと理解できる。坏CⅡb～d類のようにロクロ成形で内外面に調整が施されない坏の類例は、本遺跡周辺の八戸市八幡遺跡・岩ノ沢平遺跡からも出土し、概ね10世紀前葉の年代が与えられている。第4・7号竪穴住居跡については、竪穴住居跡の煙道部の方向がB群の他の竪穴住居と異なることから、若干の時期差があることが予想されるが、新旧関係は不明である。なお、第5・6・9号竪穴住居跡の堆積土中から白頭山火山灰が検出されていることから、本遺跡は10世紀前葉のなかでも白頭山火山灰の降下時期までの極めて短い期間しか営まれなかったものと想像される。(平山)

第2節 検出遺構について

本調査で検出された遺構は、竪穴住居跡10軒、土坑31基、溝状土坑19基、埋設土器1基、円形周溝2基、溝跡1条、道跡である。各遺構の帰属時期は、縄文時代早期～平安時代までであるが、これらのほとんどが、湿沼地に面したⅠ区に集中している。

Ⅰ 古代竪穴住居跡の変遷と立地

古代の竪穴住居跡の年代は、前節の土師器について述べられているように、奈良時代と平安時代に分けられる。奈良時代のものは第1・8・10号竪穴住居跡と、接合関係から第3号竪穴住居跡を含めた4軒であり、土師器の年代から8世紀前半に比定される。平安時代のものは残る6軒で、県内の平安期土師器型式は混沌としているものの、本住居跡の帰属時期は9世紀後葉頃から10世紀初頭までの間であると思われる。さらに、第5・6・9号住居跡は火山灰の検出から10世紀前葉には埋没している。次に、住居の構造からみて第5・6・9号住居跡のカマド方向は北からの傾きが近似した北東向きであるのに対し、第4・7号住居跡は北西向きで、奈良時代の第1・3・8・10号住居跡と向きを同じくする。古代竪穴住居跡のカマド方向については多く分析・指摘されており、岩ノ沢平遺跡発掘調査報告書で述べたが、県内では時期が新しくなるにつれ北ないし北西向きから東・南向きに変移する傾向にある。このことから、第4・7号住居跡は第5・6・9号住居跡より古い可能性があり、調査した竪穴住居跡は図40に示したように奈良時代1期、平安時代2期の、3時期の変遷を辿ると考えられる。各竪穴住居跡の規模と位置をみると、奈良時代の住居跡はほぼ同一規模で一辺が4m強であり、他遺跡の住居跡と比べてもほぼ標準的といえる。住居間の距離は、第1・3号

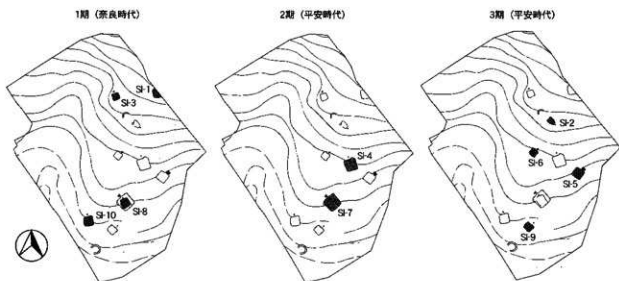


図40 竪穴住居跡変遷

住居跡と第8・10号住居跡が約17m、第1・8号住居跡は約55m、第3・10号住居跡は約62m離れてつくられており、2軒1単位の規則性が伺える。平安時代の第4・7号住居跡は一边が約6～7mであり、大型化しており、住居間の距離も14mと前時代のものに近い。同じく第5・6・9号住居跡は、第5号住居跡の5m～第3号住居跡の3mと住居の規模にややバラツキがあり、各住居間の距離も20～34mと開きがある。

本遺跡から北に約500m離れた人首沢遺跡からは、奈良時代の竪穴住居跡が6軒検出されており、本遺跡の奈良時代の住居跡と比べた場合、規模とカマド方向に違いはないが、住居間の距離は大きく異なる。また北へ約1km離れた岩ノ沢平遺跡は、本遺跡や人首沢遺跡とは異なった平坦部の少ない地形上に奈良～平安時代まで150軒を超える住居跡がひろがっている。

本遺跡は、岩ノ沢平遺跡と比べ住居構築上では容易な地形であり、また水利面でも適所と思われる。しかし、大規模な集落には発展せず3期に亘り小規模な集落が営まれていたにすぎない。本調査では、その要因を探るまでには至らなかったが、今後、集落の生業を含め大規模集落と小集落・短時期の集落の関わりを検討できるような調査が必要である。

II 縄文時代の遺構

縄文時代の遺構は、土坑、溝状土坑、埋設土器がある。前述のとおり、ほとんどがI区で検出されている。I区の溝状土坑は18基あり、埋没沢に面した微高地に散漫に検出されている。本遺構は、単体よりも複数基単位で機能したと考えるのが妥当と思われる。溝状土坑の軸方向と距離から配置をみると、調査区東側に位置する第7・9・20号溝状土坑は、地形に斜行する状態でつくられており、各距離は13mと16mある。その北西に位置する第6・8・10号溝状土坑も軸方向はほぼ同じで、各距離は9mと14mである。これ以外は、軸方向や配列をみてとれるものはない。これは、地形的に高低差がないこと、または、構築時期が各異なっているためと思われる。溝状土坑の出時と消失はまだ明確ではないが、出土土器から縄文時代後期を主体にした時期に帰属するものと思われる。土坑は総数31基あり、大半はI区24グリッドラインから南側に集中し位置する。遺物を出土するも

のがほとんどなく、堆積土・施設や形状から縄文時代に帰属すると考えられるものは約20基ある。このうち、坑底の施設や形状から落とし穴と思われるものは12基(第1・3・4・5・6・7・8・9・10・13・14・27号)ある。これらの中には、堆積土第1層として中振浮石が溜まった状態で検出されたものがあるほか、堆積土の第1・2上位層が第IV a層相当のものがほとんどであり、堆積土の状態からみて縄文時代早期後葉から末葉にはほぼ埋没していることから、帰属時期は中振浮石以前と考えられる。本時期の落とし穴としては、八戸市鶉窪遺跡(1982: 福田)をはじめ十和田市寺山(3)遺跡(1998: 坂本)、櫛引遺跡II(2000: 小山)、岩ノ沢平遺跡(2000: 杉野森・田中)青森県における陥し穴集成(1997: 坂本・杉野森)等で、まとめ述べられている。本調査で検出された落とし穴についても、個別の規模・形態等で変わるところはないが、配列と距離については特に規則性は捉えられない。本遺構の、一様な規模と形態の画一性は、时期的な特徴であり、配列等の不規則性は、作り手の違いに起因するものと思われる。沼地に集まる大型動物が対象であり、それが散発的に行われたものと思われる。これは、前述の溝状土坑(落とし穴)に時期を隔てて継続される。推測であるが、両者が同じ獣道に仕掛ける罠であれば、落ちる獣を待つ罠から、仕掛けて捕る罠に変化していった可能性もある。

このほか、本調査で検出された土坑には、フラスコ状土坑や底面に礫を配列したものがなどがあるが、機能性格については不明である。その中でも特に特異な土坑に、第11・29号土坑がある。最大の特徴は規模であり、第11号土坑は径が5m、深さ2mである。県内では、住居以外の同じ規模の遺構は、岩ノ沢平遺跡検出のASV-90だけである。両遺構とも帰属時期が縄文時代早期頃であり、时期的にも共通する。本遺跡の場合、溝状の遺構が付く第29号土坑も加味して考えなくてはならないが、落とし穴だとすれば単一で機能したものか、対象が異なるものかなど、いずれにしても不明な点が多く、類例の増加を待ちたい。

(小田川)

第6章 自然科学的分析

第1節 放射性炭素年代測定結果報告書

2000年3月1日

青森県埋蔵文化財調査センター

中島 邦夫 殿

1999年12月2日受領致しました試料についての年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

表示したBP年代は、1950年から何年前かの年数で、 ^{14}C の半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差はβ線の計算数の標準偏差 σ にもとずいて算出した年数で、標準偏差 (ONE SIGMA) に相当する年代です。また試料のβ線計数率と自然計数率の差が 2σ 以下のときは、 3σ に相当する年代を下限の年代値 (記号>) として表示してあります。また試料のβ線計数率と現在の標準炭素についての計数率との差が 2σ 以下のときには、Modernと表示してあります。

表示した同位対比は標準値からのずれをパーミルで表した値です。 $\delta^{14}\text{C}$ の値は、放射線の測定で求めた試料炭素中の ^{14}C 濃度Aと現在の炭素の標準の濃度A (std) を用いて、

$\delta^{14}\text{C} = [A - A(\text{std})] / A(\text{std}) \times 1000$ によって算出された値です。 $\delta^{13}\text{C}$ の値は、試料炭素の $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 原子比を質量分析器で測定し、標準にPDBを用いて同様に算出した値です。

$\Delta^{14}\text{C}$ は試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ パーミルであったときの ^{14}C 濃度を計算した値です。この濃度を用いて表記のBP年代値が算出されています。したがって、表記の年代値は同位体効果による測定値誤差を補正した年代値となっています。

記

Code No.	試料	BP年代と炭素の同位対比
GaK-20454	炭化材 from 上野平 (3) 遺跡	1420 ± 40
	No.1 第4号竪穴住居跡	$\delta^{14}\text{C} = -167 \pm 4.6$
	(遺構確認面より約10cm下部)	$\delta^{14}\text{C} = -167 \pm 4.6$
		$\delta^{13}\text{C} = -27.6$
		$\Delta^{14}\text{C} = -162.7 \pm 4.6$

以上

木越邦彦

第2節 上野平(3)遺跡出土土器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻利一

須恵器には窯跡が残っているということはそこで須恵器の集中生産が行われたことを意味する。土師器にも、三重県伊勢の斎宮の近くにある北野遺跡には100基を超える平窯が残っており、集中生産されたことがわかっている。しかし、縄文土器や弥生土器には土器を生産した窯跡はほとんど残っていない。果たして、縄文土器や弥生土器が集中的に生産されたのだろうか？このことについての証拠はない。また、青森県内での土師器の生産の様相についても、胎土分析からはこれまでのところ、十分な情報は引き出されていない。

本報告では八戸市の上野平(3)遺跡から出土した土師器と在地の粘土との対応を調べてみた。

分析データは表1にまとめられている。何分にも試料の数が少ないので、クラスター分析で分類することもできない。とりあえず、K-Ca、Rb-Srの両分布図を作成し、データ解析へのきっかけを掴もうと試みた。

図1にはK-Ca、Rb-Srの両分布図を示す。土師器は2点含まれているが、まとめて分布していない。これらの土師器胎土は別々のものであることは明白である。ここで、2点の粘土の分布をみると、比較的まとまっている。仮りに、これらが同じ場所の粘土であると考えたと、No.3の土師器(甕)の胎土は粘土にほぼ対応すると考えられる。もしそうだとすれば、No.3の土師器の素材粘土と考えられる。その場合にはNo.4の土師器(坏)は外部からの搬入品となる。ただ、この程度の試料数から、このような判断を下すことは危険で、今後、相当数の土師器を分析し、地元産の土師器胎土の特徴を把握することが必要である。

2点の須恵器については全因子の分析値は類似しており、同一生産地の製品である可能性が高い。また、図1をみると、Rb-Sr分布図では五所川原領域に分布するものの、K-Ca分布図では五所川原領域には対応しない。また、Fe因子でも、 $Fe > 3$ という五所川原群への帰属条件も満足しない。これらのことから、地元、青森県内の五所川原窯群の製品ではない。外部地域からの搬入品である。また、岩手県の瀬谷子窯群の製品である可能性も少ない。これら以外に産地を求めなければならぬが、目下のところ、保留としておかざるを得ない。

表1 上野平(3)遺跡出土土器の分析データ

試料	出土遺構	試料の種類	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	備考
No.1	第5号竪穴住居跡	須恵器(坏)	0.341	0.185	2.12	0.366	0.447	0.277	図14-3
No.2	第7号竪穴住居跡	須恵器(甕)	0.294	0.184	1.47	0.367	0.326	0.121	図18-7
No.3	第1号竪穴住居跡	土師器(甕)	0.412	0.451	1.80	0.380	0.698	0.263	図8-4
No.4	第4号竪穴住居跡	土師器(坏)	0.201	0.253	3.06	0.182	0.254	0.122	図11-1
No.5	第1号竪穴住居跡	粘土	0.335	0.497	2.32	0.422	0.560	0.197	
No.6	第4号竪穴住居跡	粘土	0.302	0.685	1.85	0.352	0.806	0.316	

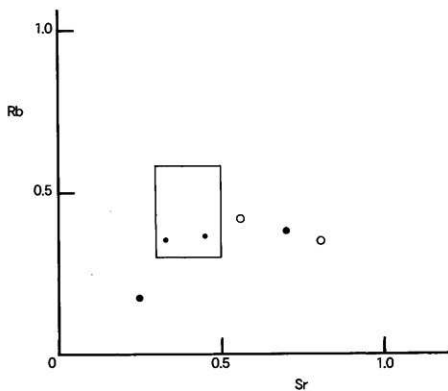
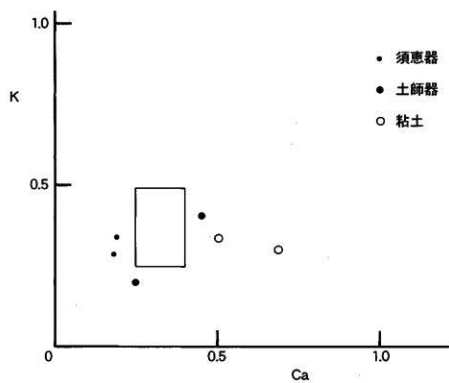


图 1 K-Ca、Rb-Sr分布图

第10号壁穴住居跡出土遺物<図23>

番号	品名	出土層位	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	外底調整	内底調整	底面調整	分類	備考
4	裏面直上	-	(13.6)	(7.2)	ナデ		ナデ	ナデ	ⅡA	
5	表面直上	(19.4)	(2.9)	丸底	ヨコナデ			ミガキ(黒色磨痕)	ⅡA	
6	表面直上	(10.5)	3.0	丸底	ヨコナデ			ミガキ(黒色磨痕)	ⅡA	

道路出土遺物<図34>

品名	層位	種類	直径(mm)	高さ(mm)	外縁径(mm)	内縁径(mm)	備考
1	地積土	寛水遺物	21.7	(0.9)	1.0	2.5	

遺構内出土縄文・弥生土器

図番号	出土位置・層位	器種	部位	施文様等	胎土	分類	備考
28-10	SK16・地積土	深鉢	胴下~底部	L R 縄文/内面ナデ	砂粒多	Ⅱ	底面礫物散
28-1	SK29・地積土	深鉢	胴部下半	無文・ナデ	砂粒	I b	内面割溝
28-2	SK29・地積土	深鉢	胴部下半	無文・ナデ	砂粒	I b	1・4同一器体
28-3	SK29・地積土	深鉢	胴部下半	無文・ナデ	砂粒	I b	
28-4	SK29・地積土	深鉢	胴部下半	無文・ナデ	砂粒	I b	内面割溝
28-5	SK32・地積土	深鉢	口縁部	短輪筋本体(L)/内面ナデ	繊維多	I d	5~9同一器体
28-6	SK32・地積土	深鉢	胴部	短輪筋本体(L)	繊維多	I d	内面割溝
28-7	SK32・地積土	深鉢	胴部	短輪筋本体(L)/内面ナデ	繊維多	I d	
28-8	SK32・地積土	深鉢	胴部	短輪筋本体(L)/内面ナデ	繊維多	I d	
28-9	SK32・地積土	深鉢	胴部	短輪筋本体(L)/内面ナデ	繊維多	Ⅱ	
31-1	SV12・地積土	深鉢	胴部	横位沈線	砂石英	c	
31-2	SV12・地積土	深鉢	胴部	縦位沈線	砂石英	Ⅱc	
32-1	SM1・-	深鉢	胴下~底部	L R 縄文斜位	砂粒	Ⅱ	
33-1	SD3・地積土	深鉢	口縁部	L R 縄文・文字/内面ナデ	砂粒	V	
33-2	SD3・地積土	深鉢	胴部	無文(L)/内面ナデ	砂粒	Ⅱa	

遺構外出土縄文・弥生土器

図番号	出土位置・層位	器種	部位	施文様等	胎土	分類	備考
35-1	I H-9・IV b	深鉢	口縁部	具段縁線引/内面ナデ	凝灰岩粒	I a	
35-2	I H-11・IV b	深鉢	胴部	無文・ナデ	石灰岩粒	I b	内面割溝
35-3	I H-11・IV b	深鉢	胴部	無文・ナデ	石灰岩粒	I b	
35-4	I G-9・E	深鉢	胴部	無文・ナデ	石灰岩粒	I b	内面割溝
35-5	I H-11・IV b	深鉢	胴部	無文・ナデ	石灰岩粒	I b	
35-6	I H-11・IV b	深鉢	胴部	無文・ナデ	石灰岩粒	I b	
35-7	I H-11・IV b	深鉢	胴部	無文・ナデ	石灰岩粒	I b	
35-8	I H-11・IV b	深鉢	胴部	無文・ナデ	石灰岩粒	I b	
35-9	I H-11・II	深鉢	胴部	無文・ナデ	石灰岩粒	I b	
35-10	不明	深鉢	胴部	無文・ナデ	石灰岩粒	I b	
35-11	I H-12・II	深鉢	胴部	無文・ナデ	石灰岩粒	I b	
35-12	I F-10・III	深鉢	胴部	沈線	砂粒	I c	
35-13	I G-11・IV b	深鉢	胴部	沈線	砂粒	I c	
35-14	I G-10・III	深鉢	胴部	沈線	砂粒	I c	
35-15	16号トレンチ	深鉢	口縁部	L R 縄文? I 横縄文施文	繊維多	I d	I 横縄文(L R)
35-16	16号トレンチ	深鉢	口縁部	0段多糸(L R)	繊維多	I d	内面割溝
35-17	I G-11・IV b	深鉢	口縁部	I と R 縦糸位置? 筋糸体?	繊維多	I d	
35-18	I G-10・III	深鉢	胴部	短輪筋本体(L)	繊維多	I d	18~23同一器体
35-19	I I-12・IV	深鉢	胴部	短輪筋本体(L)	繊維多	I d	
35-20	I G-10・IV	深鉢	胴部	短輪筋本体(L)	繊維多	I d	内面割溝
35-21	I G-10・III	深鉢	胴部	短輪筋本体(L)	繊維多	I d	
35-22	I G-10・IV	深鉢	胴部	短輪筋本体(L)	繊維多	I d	
35-23	I G-10・IV	深鉢	胴部	短輪筋本体(L)	繊維多	I d	
35-24	16号トレンチ	深鉢	胴部	0段多糸(L R)?	繊維多	I d	
35-25	16号トレンチ	深鉢	胴部	L R 縄文	繊維多	I d	
35-26	16号トレンチ	深鉢	口縁部	L 縦糸・横位沈線	砂粒	Ⅱa	
35-27	16号トレンチ	深鉢	口縁部	L 縦糸・横位沈線	砂粒	Ⅱa	
35-28	16号トレンチ	深鉢	口縁部	L 縦糸・横位沈線	砂粒	Ⅱa	
35-29	16号トレンチ	深鉢	口縁部	L 縦糸・横位沈線	砂粒	Ⅱa	
35-30	16号トレンチ	深鉢	口縁部	L 縦糸・横位沈線	砂粒	Ⅱa	
35-31	16号トレンチ	深鉢	口縁部	L 縦糸・横位沈線	砂粒	Ⅱa	
35-32	12号トレンチ	深鉢	口縁部	L 縦糸・横位沈線	砂粒	Ⅱa	
35-33	10号トレンチ	深鉢	口縁部	L 縦糸・横位沈線	砂粒	Ⅱa	
35-34	10号トレンチ	深鉢	口縁部	L 縦糸・横位沈線	砂粒	Ⅱa	
35-35	16号トレンチ	深鉢	口縁部	無文	砂粒	Ⅱ	
35-36	不明	深鉢	口縁部	無文	砂粒	Ⅱ	
35-37	18号トレンチ	深鉢	口縁部	無文	砂粒	Ⅱ	
35-38	16号トレンチ	深鉢	口縁部	横位と斜位の多糸沈線	砂粒	Ⅱ b	縦位沈線
35-39	不明	深鉢	口縁部	沈線・口端内形割突	砂粒	Ⅱ c	
35-40	11号トレンチ	深鉢	胴部	横位沈線・内形割突	砂粒	Ⅱ d	
35-41	16号トレンチ	深鉢	胴部	L 縦糸・横位沈線	砂粒	Ⅱ c	
35-42	16号トレンチ	深鉢	胴部	L 縦糸・横位沈線	砂粒	Ⅱ c	
35-43	16号トレンチ	深鉢	胴部	L 縦糸・横位沈線	砂粒多	Ⅱ c	
35-44	16号トレンチ	深鉢	胴部	R L 縄文・短沈線	砂粒	Ⅱ c	
35-45	16号トレンチ	深鉢	胴部	L 縦糸・沈線内形割突	砂粒	Ⅱ c	
35-46	16号トレンチ	深鉢	台座	L 縦糸・沈線糸綴文	砂粒	Ⅱ c	
35-47	I R-27・I	深鉢	胴部	沈線	砂粒	Ⅱ c	
35-48	I S-27・I	深鉢	胴部	沈線	砂粒	Ⅱ c	
35-49	12号トレンチ	深鉢	胴部	沈線	砂粒	Ⅱ c	
35-50	16号トレンチ	深鉢	胴部	沈線	砂粒	Ⅱ c	

遺構外出土縄文・弥生土器

図番号	出土位置・層位	器種	部位	施文文様等	粘土	分類	備考
35-51	I J-10・IV	深鉢	胴部	沈線	砂 粒	II c	
35-52	16号トレンチ	深鉢	胴部	沈線	砂 粒	II c	
35-53	16号トレンチ	深鉢	胴部	沈線	砂 粒	II c	
35-54	16号トレンチ	深鉢	胴部	沈線	砂 粒	II c	
35-55	16号トレンチ	深鉢	胴部	沈線	砂 粒	II c	
35-56	10号トレンチ	深鉢	胴部	沈線	砂 粒	II c	
35-57	10号トレンチ	深鉢	胴部	沈線	砂 粒	II b	縦溝状工具
35-58	16号トレンチ	深鉢	胴部	沈線	砂 粒	II c	
35-59	16号トレンチ	深鉢	胴部	沈線	砂 粒	II c	
35-60	16号トレンチ	深鉢	胴部	沈線	砂 粒	II c	
35-61	18号トレンチ	深鉢	胴部	沈線・幾何形文	砂 粒	II c	
35-62	16号トレンチ	深鉢	胴部	沈線	砂 粒	II b	縦溝状工具
35-63	16号トレンチ	深鉢	胴部	沈線	砂 粒	II b	縦溝状工具
35-64	16号トレンチ	深鉢	胴部	沈線	砂 粒	II b	縦溝状工具
36-1	I L-13・IV	深鉢	胴部	平行沈線	砂粒多	IV	
36-2	不明	深鉢	胴部	平行沈線	砂粒多	IV	
36-3	12号トレンチ	深鉢	胴部	平行、斜行沈線	砂粒多	IV	
36-4	12号トレンチ	深鉢	胴部	平行、斜行沈線	砂粒多	IV	
36-5	12号トレンチ	深鉢	胴部	沈線	砂粒多	IV	
36-6	不明	深鉢	胴部	沈線	砂粒多	IV	
36-7	12号トレンチ	深鉢	胴部	平行、斜行沈線	砂粒多	IV	
36-8	不明	深鉢	胴部	沈線	砂粒多	IV	
36-9	表 様	深鉢	胴部	縦目状施文文 (R)	砂 粒	Ⅲ	
36-10	11号トレンチ	深鉢	胴部	縦目状施文文 (L)	砂 粒	Ⅲ	
36-11	12号トレンチ	深鉢	胴部	縦目状施文文 (L)	砂 粒	Ⅲ	
36-12	17号トレンチ	深鉢	胴部	縦目状施文文 (L)	砂 粒	Ⅲ	
36-13	12号トレンチ	深鉢	胴部	L 繫糸	砂 粒	Ⅲ	縦溝状工具
36-14	16号トレンチ	深鉢	胴部	L 繫糸	砂 粒	Ⅲ	
36-15	17号トレンチ	深鉢	口縁部	L R 縄文/内面ナデ	砂 粒	Ⅲ	
36-16	17号トレンチ	深鉢	胴部	L R 縄文/内面ナデ	砂 粒	Ⅲ	
36-17	I P-20・II	深鉢	胴部	R L 縄文	砂 粒	Ⅲ	
36-18	表 様	深鉢	胴部	R L 縄文	砂 粒	Ⅲ	
36-19	12号トレンチ	深鉢	胴部	R L 縄文	砂 粒	Ⅲ	
36-20	12号トレンチ	深鉢	胴部	L R 縄文	砂 粒	Ⅲ	
36-21	12号トレンチ	深鉢	胴部	L R 縄文	砂 粒	Ⅲ	
36-22	16号トレンチ	深鉢	胴部	L R 縄文	砂 粒	Ⅲ	
36-23	表 様	深鉢	胴部下半	L R 縄文	砂粒多	Ⅲ	
36-24	11号トレンチ	深鉢	底部	無文/内面ナデ	砂 粒	Ⅲ	
36-25	12号トレンチ	深鉢	底部	無文・ミガキ	砂粒多	Ⅲ	
36-26	16号トレンチ	深鉢	胴部	L R 縄文・平行沈線	砂 粒	V	
36-27	12号トレンチ	浅鉢	胴部	L 繫糸縦位・平行沈線	砂 粒	V	
36-28	10号トレンチ	深鉢	胴部	L 繫糸縦位	砂 粒	V	
36-29	表 様	深鉢	胴部	R L 縄文	砂 粒	V	
36-30	I O-30・II	空	胴部	無文	砂粒多	V	
36-31	12号トレンチ	付付	底部	沈線	砂粒多	V	

遺構内出土土片・礫石器

図番号	出土位置・層位	器種	長さ: mm	幅: mm	厚: mm	重: g	石質	分類	備考
9-2	S I 2・内土坑	石 鏝	24	14	4	1.1	玉髓質珪質頁岩	平基	基部欠損
11-3	S I 4・床	磨製石斧	(73)	46	21	110.5	安山岩		
14-7	S I 5・床	台 石	172	146	102	1374.7	安山岩		縦打痕
16-13	S I 6・床	台 石	141	104	80	2617.7	石英安山岩		縦打痕
16-14	S I 6・堆積土	石 鏝	47	16	6	2.3	珪質頁岩	凸基	
23-7	S I 10・床	台 石	119	82	65	809.3	砂 岩		縦打痕
23-8	S I 10・床	台 石	118	79	40	1014.7	砂 岩		磨り損
28-11	S K 30・堆積土	不定形石鏝	(24)	36	10	3.5	珪質頁岩		
32-2	S M 1	石 鏝	(44)	13	5	2.6	珪質頁岩	凸基	先端欠損

遺構外出土土片・礫石器

図番号	出土位置・層位	器種	長さ: mm	幅: mm	厚: mm	重: g	石質	分類	備考
27-1	表 様	石 鏝	36	21	5	1.6	玉髓質珪質頁岩	凹基	基部両側損
37-2	12号トレンチ	石 鏝	29	17	4.5	1.6	玉髓質珪質頁岩	凸基	基部欠損
37-3	I H-9・IV	石 鏝	55	25	9	10.2	珪質頁岩		
37-4	I F-10・IV b	石 鏝	(37)	19	9	3.7	珪質頁岩		刃部欠損
37-5	表 様	楔形石鏝	20	13	9	2.1	珪質頁岩		
37-6	I J-11・IV	不定形石鏝	57	30	10	14.7	珪質頁岩		
37-7	I P-17・IV	不定形石鏝	55	33	12	18.8	珪質頁岩		
37-8	I G-9・IV b	不定形石鏝	55	31	17	13.4	頁 岩		
37-9	I G-14・IV b	不定形石鏝	48	35	14	23.8	珪質頁岩		
37-10	I P-10・IV c	不定形石鏝	(47)	43	13	20.8	珪質頁岩		
37-11	I G-14・IV b	使用土片	45	28	10	5.8	珪質頁岩		
37-12	I G-12・IV	使用土片	21	29	6	2.5	珪質頁岩		
37-13	表 様	不定形石鏝	21	24	7	3.6	珪質頁岩		
37-14	17号トレンチ	打製石斧	84	56	23	107.5	燧石		
37-15	I F-9・IV	磨削割製片	(81)	(41)	(27)	99.6	綠色硬岩質灰岩		
37-16	6号トレンチ	磨製石斧	(51)	(39)	(24)	66.2	綠色硬岩質灰岩		刃部欠損
37-17	表 様	磨 石	(80)	(59)	(49)	181.9	燧石		
37-18	I I-27・I	磨 石	94	72	52	447.7	石英安山岩		磨・敲・凹

引用参考文献

- 青森県教育委員会 1984 『和野前山遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第82集
- 青森県教育委員会 2000 『岩ノ沢平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第287集
- 八戸市教育委員会 1988 『八幡遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第26集
- 八戸市教育委員会 1992 『岩ノ沢平遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第46集
- 八戸市教育委員会 1992 『八幡遺跡Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第47集
- 八戸市教育委員会 1993 『岩ノ沢平遺跡Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第50集
- 八戸市教育委員会 1997 『酒美平遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第73集
- 八戸市教育委員会 2000 『人首沢遺跡』『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』
八戸市埋蔵文化財調査報告書第84集
- 福田友之 1982 「おとし穴（第5章考察 第1節遺構）』『鶉窪遺跡』
青森県埋蔵文化財調査報告書第76集
- 宇部則保 1989 「青森県における7・8世紀の土師器—馬淵川下流域を中心に—」
『北海道考古学』第25輯
- 三浦圭介 1993 「青森県における古代の土器様相」
『シンポジウム「北日本における律令期の土器様相」』第18回古代城柵官衙遺跡検討会
- 八木光則 1993 「古代斯波群と甗薩体の土器様相」
『シンポジウム「北日本における律令期の土器様相」』第18回古代城柵官衙遺跡検討会
- 工藤清泰 1996 「青森県の10世紀の土器」『日本土器事典』雄山閣
- 坂本真弓・杉野森淳子 1997 「青森近県における陥し穴集成」『研究紀要』2
青森県埋蔵文化財調査センター
- 八木光則ほか 1998 「東北地方の古代集落（馬淵川流域）」
『シンポジウム「城柵と地域社会の変容」資料集』第24回古代城柵官衙遺跡検討会
- 坂本真弓 1998 「円形土坑の配列について（第4章まとめ）』『寺山（3）遺跡』
青森県埋蔵文化財調査報告書第235集
- 小山浩平 2000 「円形の落とし穴について（第4章）』『櫛引遺跡Ⅱ』
青森県埋蔵文化財調査報告書第272集
- 田中珠美 2000 「早期の陥し穴（第3章まとめ 第2節遺構）』『岩ノ沢平遺跡』
青森県埋蔵文化財調査報告書第287集
- 杉野森淳子 2000 「溝状土坑（第3章まとめ 第2節遺構）』『岩ノ沢平遺跡』
青森県埋蔵文化財調査報告書第287集
- 小田川哲彦 2000 「カマド（第3章まとめ 第2節遺構）』『岩ノ沢平遺跡』
青森県埋蔵文化財調査報告書第287集

報告書抄録

ふりがな	うわのたいかっこさんいせき							
書名	上野平(3)遺跡							
副書名	東北縦貫自動車道八戸線(八戸～八戸)建設事業に伴う遺跡発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第296集							
編著者名	小田川哲彦・平山明寿							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	平038-0042 青森市大字新城市天田内152-15 TEL 017-788-5701・5702							
発行年月日	西暦2001年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
	あomorikawa-hirohito-hi-shi-ohara 青森県八戸市大字 うわのあざひらば 上野平、外	203	03264	40° 28' 45"	141° 25' 13"	19980901 ～ 19981030 ・ 19990803 ～ 19991029	1,500 8,000	東北縦貫自動車道 八戸線(八戸～八 戸)建設事業に伴 う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
	狩猟地 他	縄文時代	土坑 31基 (奈良・平安時代含) 溝状土坑 19基 埋設土器 1基	縄文土器 石器		縄文時代早期の落とし穴 縄文時代早期の大型土坑2基		
	集落跡 他	奈良時代 平安時代	竪穴住居跡 4軒 竪穴住居跡 6軒 円形周溝・溝 3条	土師器				
		近・現代	道跡 1条					

写 真 图 版



作業状況



作業状況



層序A



層序B

写真1 作業状況・層序



調査区Ⅰ全景 (NW→)



調査Ⅰ区南東端検出遺構 (NW→)



調査Ⅰ区南東端検出遺構 (NW→)

写真2 調査Ⅰ区全景・検出遺構



土層 (S→)



完壁 (SW→)



遺物出土状況

写真3 第1号竪穴住居跡



土层 (W→)



遺物出土状況

写真4 第3号竪穴住居跡



土層 (E→)



炭化材出土状況



穴窟 (SE→)

写真5 第4号竪穴住居跡



土層 (SW→)



完掘 (SW→)



カマド土層 (S→)



カマド完掘 (SW→)

写真6 第5号竪穴住居跡



土層 (W→)



全景 (SW→)



遺物出土状況

写真7 第6号竪穴住居跡



全景 (SE→)



第7号竪穴住居跡遺物出土状況



第7号竪穴住居跡遺物出土状況カマド完掘 (SE→)



第8号竪穴住居跡カマド土層 (E→)

写真8 第7・8号竪穴住居跡



土層 (W→)



全景 (NW→)

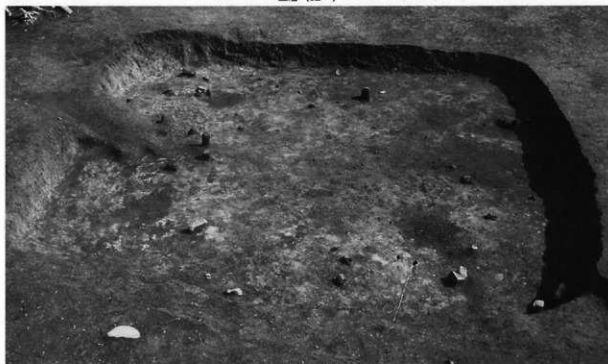


遺物出土状況

写真9 第9号竪穴住居跡



土層 (SE→)



遺物出土状況



完麗 (SE→)

写真10 第10号竖穴住居跡



第1号土坑土層 (S→)



第1号土坑完掘 (S→)



第7号土坑土層 (S→)



第7号土坑完掘 (S→)



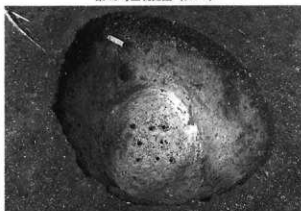
第13号土坑土層 (SW→)



第13号土坑完掘 (SW→)



第14号土坑土層 (SE→)

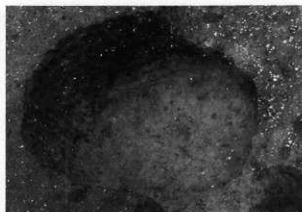


第14号土坑完掘 (SE→)

写真11 土坑(1)



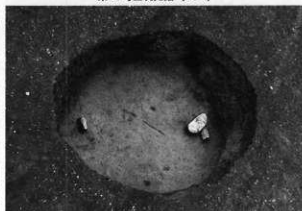
第16号土坑土层 (SE→)



第16号土坑完掘 (SE→)



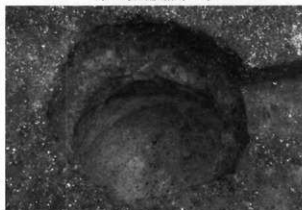
第23号土坑土层 (SE→)



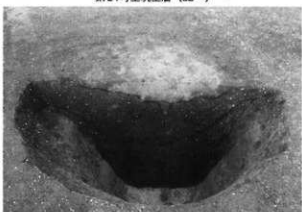
第23号土坑完掘 (SE→)



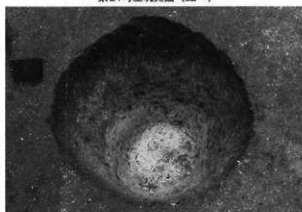
第24号土坑土层 (SE→)



第24号土坑完掘 (SE→)

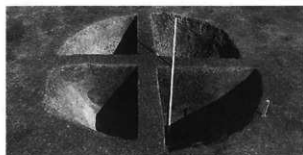


第25号土坑土层 (S→)

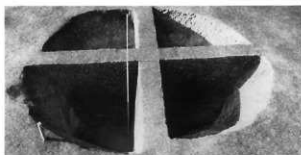


第25号土坑完掘 (S→)

写真12 土坑(2)



第11号土坑土層 (W→)



第11号土坑土層 (S→)



第11号土坑完観 (E→)



第29号土坑完観 (S→)



第29号土坑土層 (W→)



第29号土坑土層 (S→)

写真13 土坑(3)



第2号溝状土坑土層 (S→)



第3号溝状土坑土層 (S→)



第5号溝状土坑土層 (W→)



第6号溝状土坑土層 (SE→)



第8号溝状土坑土層 (S→)



第10号溝状土坑土層 (S→)



第11号溝状土坑土層 (SE→)



第15号溝状土坑土層 (SW→)

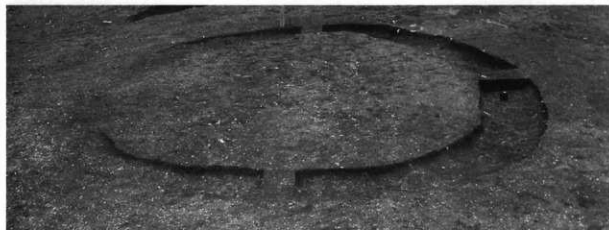


第19号溝状土坑土層 (S→)

写真14 溝状土坑



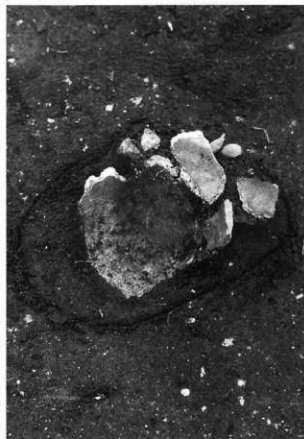
第2号円形周溝土層 (N→)



第3号円形周溝土層 (SE→)

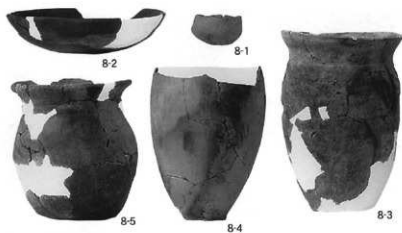


道跡土層 (SW→)



土器埋設遺構検出状況 (W→)

写真15 円形周溝・道跡・土器埋設遺構



第1号竖穴住居跡

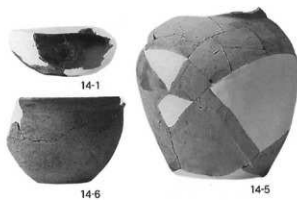


第2号竖穴住居跡

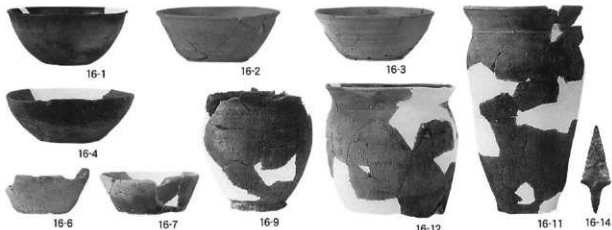
第4号竖穴住居跡



第3号竖穴住居跡



第5号竖穴住居跡

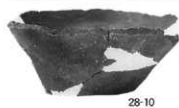
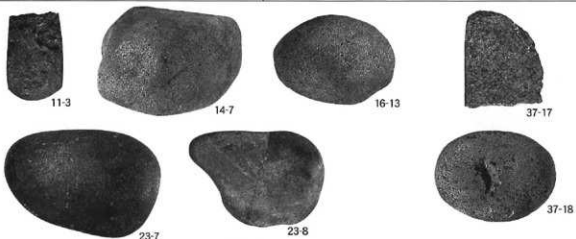
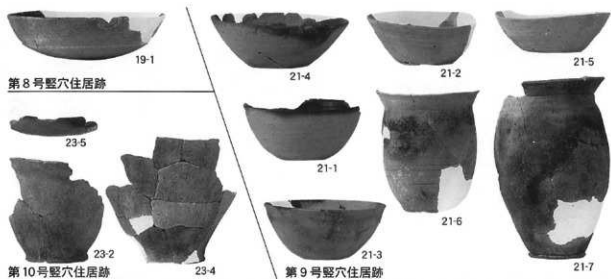


第6号竖穴住居跡

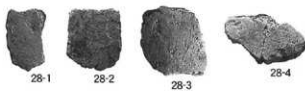


第7号竖穴住居跡

写真16 竖穴住居跡出土遺物(1)



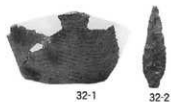
第16号土坑



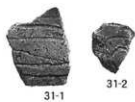
第29A号土坑



第30号土坑



第1号土器埋設



第12号溝状土坑



第3号円形周溝

写真17 竪穴住居跡出土遺物(2)・その他遺構出土遺物

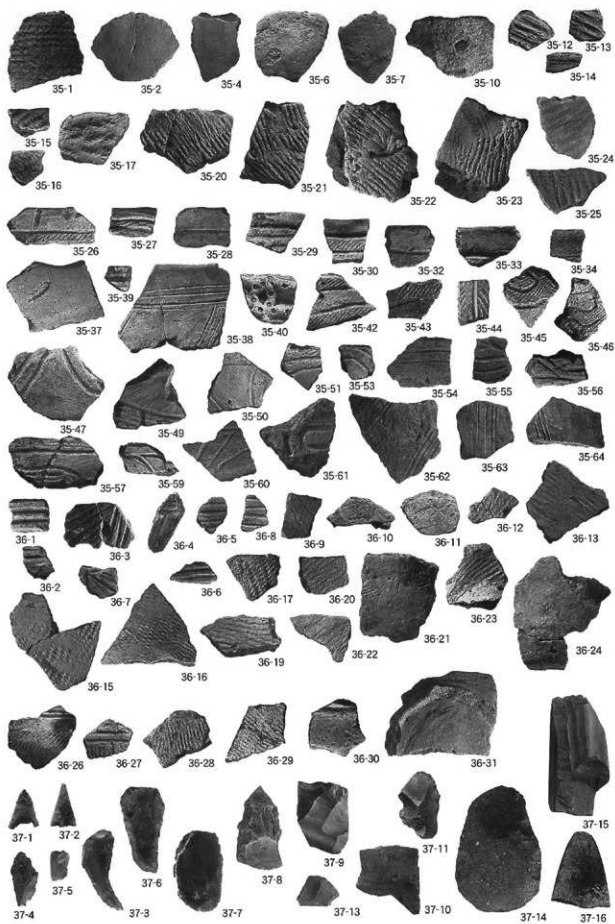


写真 18 遺構外出土、土器・石器

青森県埋蔵文化財調査報告書 第296集

上野平(3)遺跡

—東北縦貫自動車道八戸線(八戸～八戸)建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 2001年2月28日
発行 青森県教育委員会
編集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042 青森市大字新城字天田内152-15
TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702
印刷所 第一印刷株式会社
〒038-0003 青森市石江江渡3-1
TEL 017-782-2333 FAX 017-781-9153



活彩あomor
— 輝くあomor新時代 —